（財）八尾市文化財調査研究会報告７

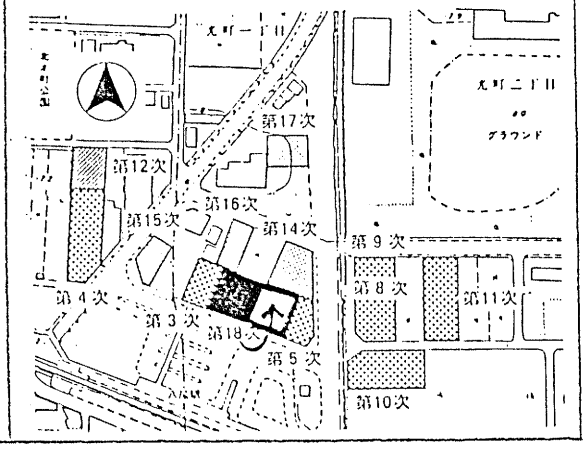
昭和59年度事業概要報告

1985年

（財）八尾市文化財調査研究会

(財) 八尾市文化財調査研究会報告 7

正　誤　表

頁	行	誤	正
3	26	慎重に掘進めた	慎重に掘り進めた
49 , 53 65 , 71	6 ～ 7	始めて実施	初めて実施
45	調査地周辺図		

（財）八尾市文化財調査研究会報告７

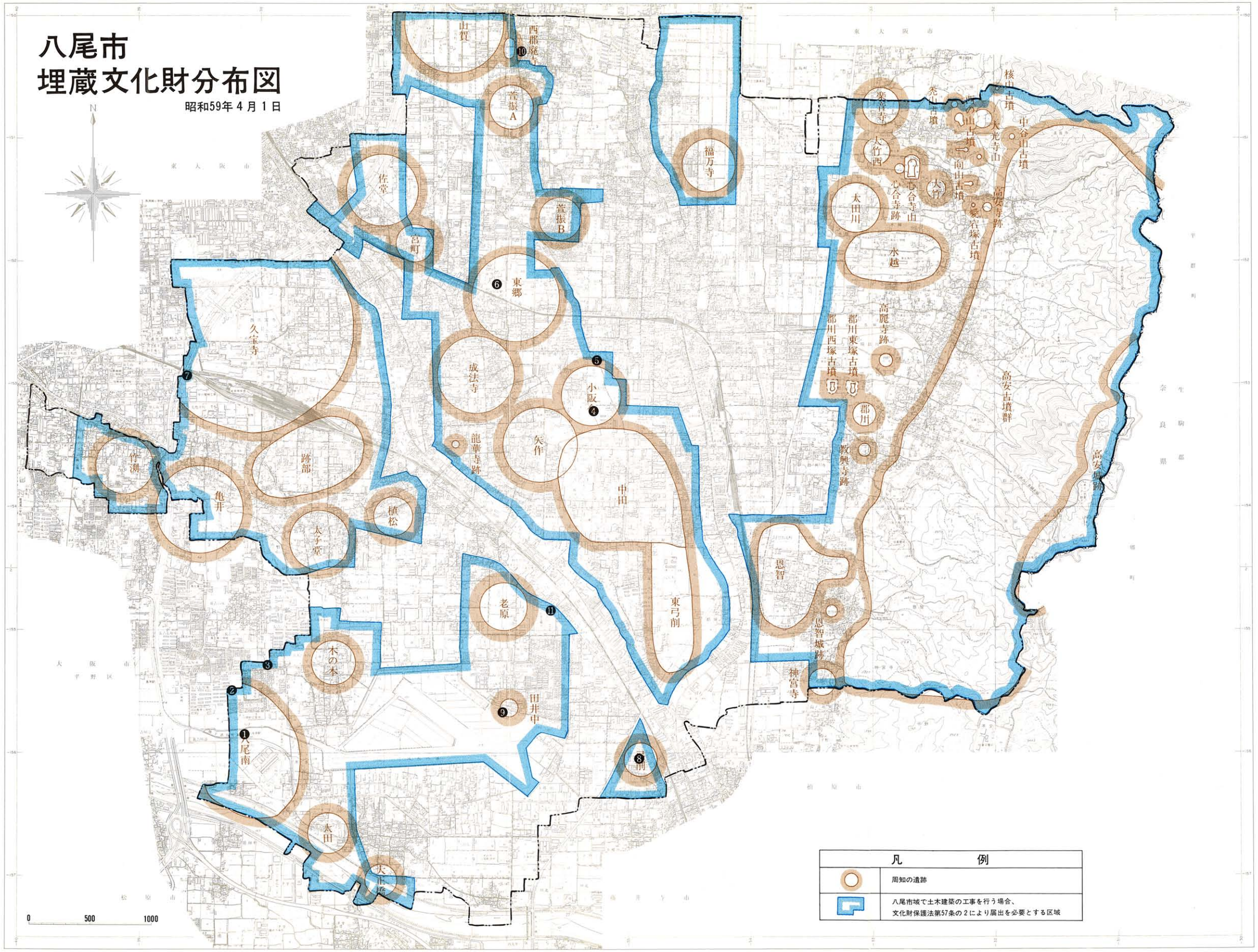
昭和59年度事業概要報告

1985年

（財）八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

昭和59年４月１日



凡	例
○	周知の遺跡
▭	八尾市域で土木建築の工事を行う場合、文化財保護法第57条の２により届出を必要とする区域

序　文

河内平野は先人の活動の舞台として、古来より重要な役割を果たして来たところであります。

我が八尾市も開発の波は遠慮なしに押し寄せ、近代都市へと大きく変わりつつあります。

私たちは、開発申請者のご理解を得ながら調査を実施し、先人の築いた貴重な遺産である埋蔵文化財の実態把握と保存に努めているところであります。

更には一般文化財に関する講座等をも開催し、文化財に対する啓蒙普及に努めているところであります。

本書は、昭和59年度事業の概要を収録したものでありますが、わずかでも市民の皆様をはじめ、ご協力いただいた関係各位に寄与出来ますれば幸せと存じます。

なお、本書作成にあたって、ご協力、ご教示いただいた各位に感謝の意を表します。

昭和60年４月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　山　脇　悦　司

例　　言

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が昭和59年度に実施した事業についてまとめたものである。本書作成にあたっては、成海佳子・原田昌則が企画・編集した。

1．埋蔵文化財の発掘調査の項は、調査担当者（高萩千秋・原田・成海・西村公助・駒澤敦）の報告をもとに、成海・原田が検討を加えてまとめた。

1．出土遺物の復元・実測等の作業は、大地慶子・吉原早智子・相松隆・麻田優が行った。また、出土遺物観察表は大地が担当した。

1．本書掲載の地図は、八尾市発行の2500分の１・10000分の１を使用した。埋蔵文化財分布図は、八尾市教育委員会発行のものをもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面で、ＴＰと略して記載した。

目　　次

序　　文

例　　言

埋蔵文化財分布図

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　埋蔵文化財の発掘調査……1

1　八尾南遺跡（第２次調査）……3

2　八尾南遺跡（第３次調査）……9

3　八尾南遺跡（第４次調査）……13

4　小阪合遺跡（第４次調査）……39

5　小阪合遺跡（第５次調査）……43

6　東郷遺跡（第18次調査）……45

7　久宝寺遺跡（第１次調査）……49

8　弓削遺跡（第１次調査）……53

9　田井中遺跡（第２次調査）……61

10　萱振遺跡（第１次調査）……65

11　老原遺跡（第１次調査）……71

Ⅲ　その他の事業……79

Ⅳ　受贈図書一覧……81

I　はじめに

昭和57年７月１日に財団法人八尾市文化財調査研究会が発足して以来、はや３年の歳月が経過し、業務の柱としている埋蔵文化財の発掘調査・文化財の普及事業も年々充実し、当調査研究会の運営もようやく軌道に乗った感があります。

ただ、業務の大部分を占める埋蔵文化財の発掘調査につきましては、正式な報告書の刊行を持って全業務が終了するのが原則でありますが、現在の体制では日々増加する発掘調査の現場作業に対応するのが精一杯であり、出土遺物の整理作業すら満足に行えないのが偽らない事実であります。このような状況でありますので、昭和59年度に実施した発掘調査についても、一部を除いては正式報告書の刊行が大幅に遅れるのではないかと危惧している次第であります。しかし、調査成果の早急な公開は発掘担当機関の責務であり、いたずらに整理・研究を停滞させてはならないものと考えられます。

本書はこのような趣旨に基づき、昭和59年度事業の概略をまとめたものであり、八尾市内の文化財、ならびに当調査研究会の業務を少しでも御理解いただければ幸せに存じます。

II　埋蔵文化財の発掘調査

昭和59年度に当調査研究会が、八尾市教育委員会文化財室の指示を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の受託件数は11件を数え、総調査面積は9912㎡に及んでいる。このうち、昭和58年度から継続しているものは**１・６**で、**４**は昭和57年度から断続的に実施している事業である。昭和59年度の調査では、大半の調査地が小面積であったにもかかわらず、比較的良好な遺構・遺物を検出し、多大な成果を得ることができた。

まず、弥生時代後期では、**１八尾南遺跡**から小型仿製鏡（連弧文銘帯鏡）の破片が出土している。この鏡片には、瓜破北遺跡から出土した鏡片に認められるような懸垂用の孔を穿とうとした痕跡があり、本来は同様の目的で使用することを意図したものと推定される。なお、本資料は包含層から出土したものであるが、瓜破北遺跡の資料は方形周溝墓の副葬品であることから、当時の埋葬に対する意識を反映した資料として注目できる。また、**８弓削遺跡**では、南北方向に伸び、幅3.5～４ｍ・深さ1.2～1.5ｍを測る溝を検出した。溝内からは、弥生時代後期に比定される土器類がきわめて密集した状況で出土しており、検出長22ｍの間でコンテナ約150箱分が出土している。これらの土器類は、溝内出土にもかかわらず磨耗を受けていないもので、しかも溝全域にわたって完形もしくは完形に近い形で出土しており、河内平野における

第Ⅴ様式の土器の細分を行ううえで重要な問題を内包した資料といえよう。

古墳時代前期では、**6東郷遺跡**で〔庄内式期〕に比定される集落遺構を検出し、**4小阪合遺跡**でも溝遺構から同時期に比定される大量の土器類が出土している。また、**7久宝寺遺跡**では布留式の古相に比定される土器で構成されている2箇所の土器集積を検出している。

古墳時代中期では、**2八尾南遺跡**で掘立柱建物を中核とする集落遺構を検出し、各遺構から初期須恵器・韓式系土器・製塩土器等の注目すべき土器類が出土している。この調査地より南約400mに位置する**1八尾南遺跡**では、方墳1基が検出されている。さらに、**4小阪合遺跡**では、朝顔形埴輪と円筒形埴輪を組合わせた埴輪円筒棺1基が検出されている。

奈良時代では、**8弓削遺跡**で横板井籠組井戸2基と素掘井戸1基が検出されている。そのうちの1基からは、墨書人面土器・神功開宝が出土している。**10萱振遺跡**では、遺構としては土坑1基を検出したにすぎないが、多量の屋瓦の出土が示すように、西郡廃寺の寺域を推定するうえで、多くの問題を残す結果となった。

平安時代末期から鎌倉時代では、**4・5小阪合遺跡**、**10萱振遺跡**で集落遺構を検出した他、**2八尾南遺跡**で水田を検出している。なお、**5小阪合遺跡**の井戸からは、和泉型瓦器椀の最古に位置付けられる瓦器椀2点が出土している。

昭和59年度発掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	原因	期間	(㎡)面積	担当者	備考
1	八尾南	若林町1丁目49	大阪府住宅供給公社	分譲住宅建設	1月9日～7月6日	2500	駒澤	弥生時代後期の小型仿製鏡出土
2	八尾南	西木の本4丁目4	近畿財務局	合同宿舎建設	7月10日～60年3月30日	900	原田成海	『(財)八尾市文化財調査研究会報告6』所収
3	八尾南	西木の本1丁目63	大西俊輝	病院建設	10月5日～11月6日	630	駒澤	
4	小阪合	青山町・南小阪合町の一部	八尾市	区画整理	6月15日～11月15日	1940	高萩	
5	小阪合	南小阪合町1丁目の一部	八尾市	流域下水道等整備	60年1月25日～3月20日	636	西村	最古に位置付けられる和泉型瓦器椀出土
6	東郷	北本町2丁目141	森田清次	店舗付賃貸共同住宅建設	3月1日～4月10日	500	高萩	
7	久宝寺	北亀井町3丁目1	シャープ㈱	工場建設	4月2日～6月25日	792	原田	
8	弓削	志紀町南2丁目74～76	㈱ファミリー	共同住宅建設	4月2日～7月27日	1260	西村	溝からⅤ様式の土器コンテナ150箱出土
9	田井中	空港1丁目81	大阪防衛施設局	需品整備工場建設	10月15日～10月26日	155	西村	
10	萱振	幸町1丁目76	八尾市	店舗付改良住宅建設	11月13日～12月24日	266	原田	
11	老原	東老原2丁目46	関西電力㈱	八尾制御所建設	60年2月12日～3月8日	333	駒澤	

1　八尾南遺跡（第２次調査）

調 査 地：若林町１丁目49

調査期間：昭和59年１月９日～７月６日

調査面積：2500㎡

はじめに

今回の発掘調査は、分譲住宅建設に先立って実施したもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した発掘調査の第２次調査にあたる。

八尾南遺跡は、南から伸びる羽曳野丘陵の先端部（河内台地）と河内平野が融合する部分に位置し、現在の行政区画では、八尾市南西部の若林町・西木の本一帯（地下鉄八尾南駅周辺）に所在する。西隣に位置する大阪市の長原遺跡とは、市域の違いによって名称を異にするだけで、この付近一帯は同一の遺跡と考えられている。

当遺跡は、大阪市高速電気軌道第２号線建設工事に先立って、昭和53～54年に八尾南遺跡調査会が実施した発掘調査の結果から、旧石器時代～鎌倉時代の複合遺跡として認識されている。この調査以後、当遺跡範囲内では開発件数も比較的増加し、昭和58年度までに３件の発掘調査が実施されている他、八尾市教育委員会文化財室による遺跡範囲確認調査や多数の試掘調査等が実施されている。

当遺跡周辺には、東に木の本遺跡、南には大和川を挟んで小山遺跡（藤井寺市）・津堂遺跡（同）、北には竹渕（たこち）遺跡・亀井遺跡・城山遺跡（大阪）、西には長原遺跡（大阪市）・瓜破遺跡（同）・瓜破北遺跡（同）等が位置している。

なお、当調査地は、八尾南遺跡調査会が実施した調査地のうち、〔Ｂ地区〕の南に隣接している。

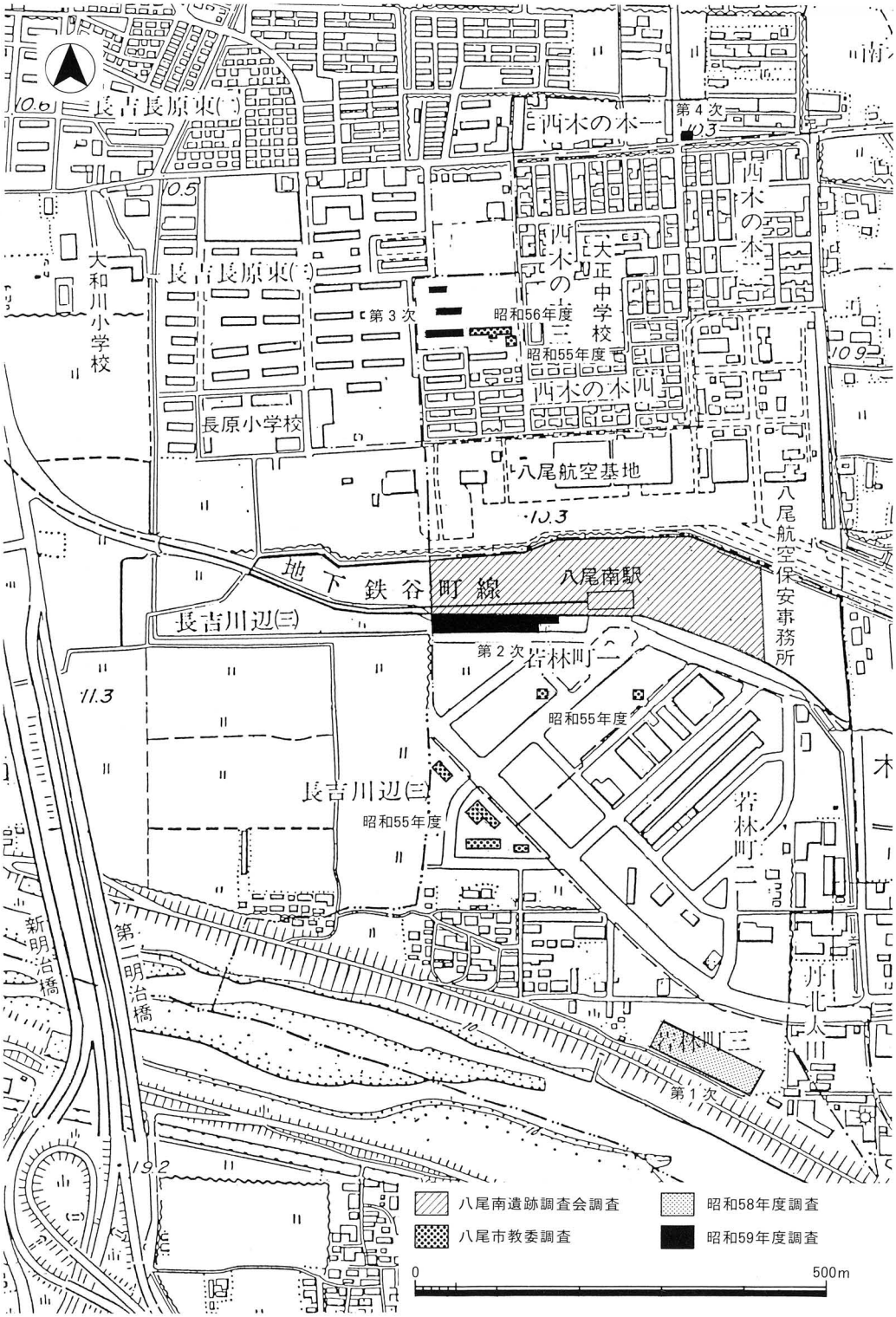
調査概要

調査に際しては、調査区を東部と西部に分け、西部をＡ区・東部をＢ区と付称した。調査面積は前者が1000㎡・後者が1500㎡を測る。

現地表（ＴＰ＋11.70ｍ前後）から約２ｍは機械掘削で盛土を除去し、旧耕土以下の各層を人力によって慎重に掘進めた。その結果、ＴＰ＋9.70～9.50ｍで、鎌倉時代～弥生時代にわたる４時期の遺構を検出した。それ以下の土層については、調査地に２×２ｍのグリッドを79箇所設定し、遺構・遺物の確認に努めた。

＜第１調査面＞

旧耕土下に堆積する淡灰色～淡黄灰色の粘質砂～粘質土層上面（ＴＰ＋9.70ｍ付近）で、南


長吉長原東(一)
西木の本一
第4次
西木の本
大和川小学校
長吉長原東(二)
第3次
昭和56年度
大正中学校
昭和55年度
西木の本三
西木の本四
長原小学校
八尾航空基地
八尾航空保安事務所
地下鉄谷町線
八尾南駅
長吉川辺(三)
第2次
若林町一
昭和55年度
長吉川辺(三)
昭和55年度
若林町二
新明治橋
第二明治橋
若林町三
第1次
八尾南遺跡調査会調査
昭和58年度調査
八尾市教委調査
昭和59年度調査
0
500m

調査地周辺図

北方向に伸びる溝を19条検出した。幅0.2～5ｍ・深さ0.05～0.4ｍを測る。内部堆積土は灰褐色～淡褐色砂混粘土で、内部から土師器・須恵器・陶磁器・瓦等の細片がわずかに出土している。遺物からは遺構の構築時期を明確にし得ないが、層序・方向等から、中世の農耕に関係する溝と推定できる。

＜第２調査面＞

第１調査面より0.1～0.2ｍ下位に堆積する褐灰色粘質土層上面（ＴＰ＋9.60ｍ付近）で、小穴を10個検出した。径0.2～0.6ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。内部堆積土は暗褐色粘土で、出土遺物は希少であるが、検出面直上で奈良時代の土師器杯が１点出土している。

＜第３調査面＞

ＴＰ＋9.50ｍ前後の黄灰色粘土層上面で、土坑３基・溝４条・土器集積１箇所の他、方墳を検出した。前者の遺構群からは弥生時代後期の土器、後者からは古墳時代中期の須恵器壺が出土している。方墳は一辺10ｍ程度の規模が想定でき、周溝の検出幅１～３ｍ・深さ0.2～0.3ｍを測り、北隅に陸橋部を持つ。周溝の内部堆積土は上層の黒灰色粗砂と下層の黄褐色～淡茶褐色粘質粗砂からなる。これら２時期の遺構はほぼ同一レベルで検出されたが、方墳は上部が削平されていることや、黄灰色粘土層上面に薄く堆積する黄灰色粗砂混粘土層上面で検出された部分もあることから、両者は明瞭に区別できる。なお、これらの遺構の構築時期に対応する遺物包含層である褐灰色粘質土層は薄く堆積しており、面的な広がりは認められないが、その中でも弥生時代後期の土器を伴出する層中から鏡片が出土している。

＜グリッド調査＞

ＴＰ＋8.70ｍ前後に堆積する濃緑灰色粘土層（層厚0.05～0.1ｍ）以下濃灰色微砂混粘土層（層厚0.05～0.15ｍ）・乳青灰色微砂混粘土層（層厚0.5ｍ以上）の各層からは、サヌカイトおよびチャート製の石器が約300点出土した。層位から、これらの石器は縄文時代のものと考えられるが、いずれの層でも掘形を持ついわゆる遺構は検出されなかった。

まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の小型仿製鏡（連弧文銘帯鏡）が出土した。この鏡は、前述のように、弥生時代後期の遺物包含層から出土したものである。遺存状態はきわめて良好で鋳出は高く、図文等は鋭く明瞭である。現状は長辺4.5㎝・短辺2.8㎝・高さ2.1㎝の台形を呈し、破砕面は研磨されている。また、周縁には懸垂用の孔をあけようとした痕跡（表面に３箇所・裏面に２箇所）が認められている。復元直径は8.4㎝を測り、周縁の反りはわずかである。鏡背の構成は、平縁―櫛歯文帯―擬銘帯―連弧文帯の順で、鈕の部分は欠損している。

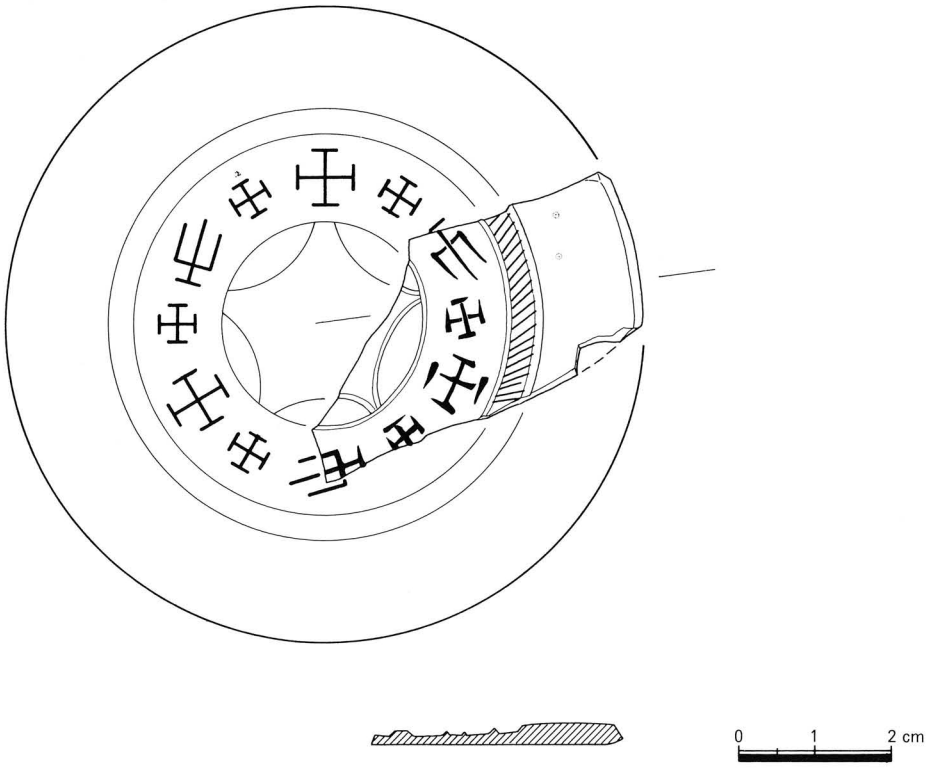
縁は幅13㎜・厚さ2.5～３㎜で、他の文様帯との比高差0.8～1.5㎜を測り、内側の稜は鋭い。櫛歯文帯の幅は４㎜を測り、櫛歯文は斜行し、約1.3㎜間隔である。擬銘帯は幅10.5㎜を

測り、両側を圏線によって区画されている。図文は５個文が遺存しており、「卍」・「卐」・「卍」の間に、小型の「卐」を配している。復元すれば、全体に「卍」と「卐」を３個ずつ交互に配し、それぞれの間を小型の「卐」６個で埋めているものと推定できる。なお、「卍」は「而」・「之」を図案化したものと考えられる。連弧文帯は復元径27㎜を測り、浮彫状に鋳出されており、連弧文３個分が遺存している。うち１個は完存しており、弧幅15㎜を測ることから、復元すれば５個で一周するものと考えられる。

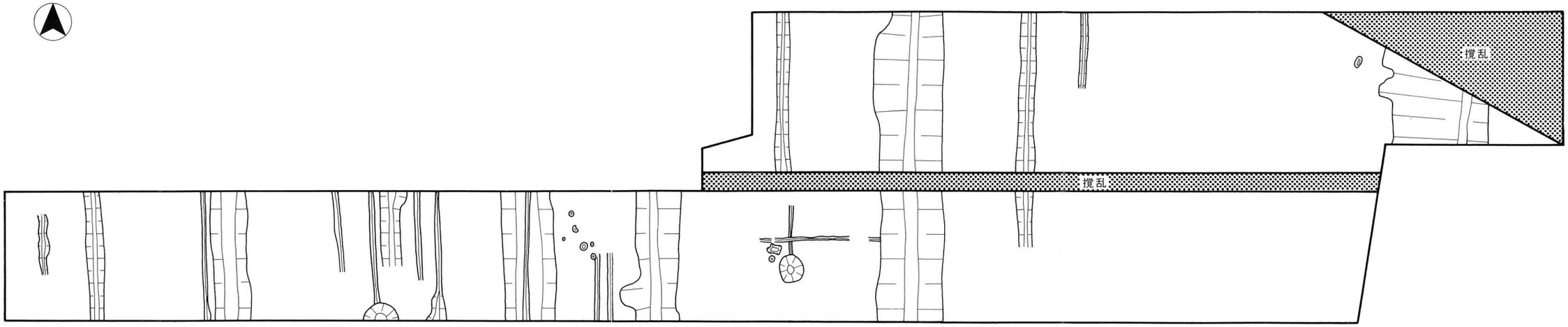
この鏡は、高倉洋彰氏の分類による内行花文鏡Ⅲｂにあたり、岡山県百間川原尾島遺跡・便木山遺跡出土の鏡と同じ背文構成を持つ。[註] また、図文中に「卍」あるいは「卐」が認められるものには、前出の百間川原尾島遺跡出土鏡の他、重圏文日光鏡Ⅲｂに分類されている岡山県加茂Ｂ遺跡・八尾市亀井遺跡出土鏡などがあげられる。高倉氏は、これら第Ⅲ型鏡が九州に分布しない点から、その製作地を瀬戸内～近畿一帯に求めることが可能であると示唆されている。

註

高倉洋彰　「弥生時代小型仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』：第70巻第３号　1985年　高倉氏はこの中で、八尾南遺跡出土鏡の内行花文（連弧文）の数を６個と書かれているが、これは現地説明会の資料を参考にされたためである。本書をまとめるにあたって検討を加えた結果、５個に復元できた次第であり、ここに訂正させていただく。

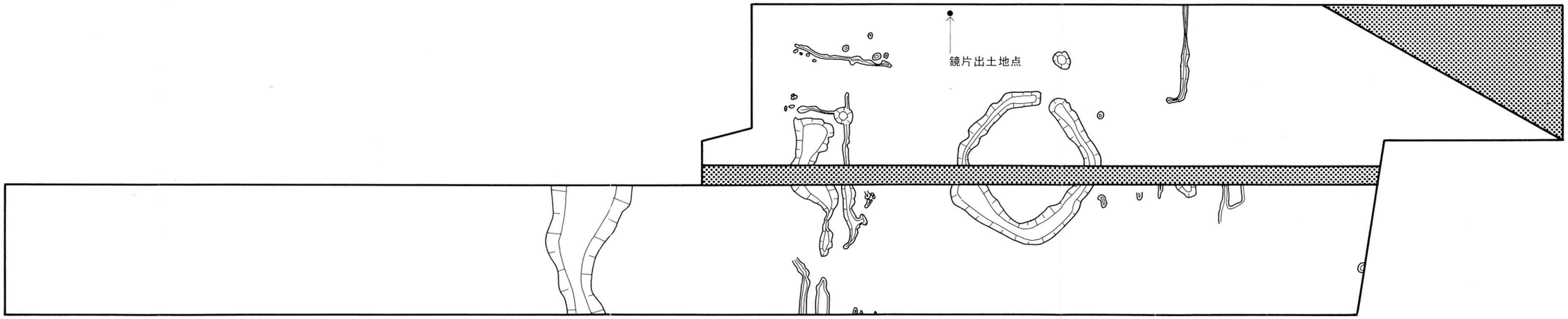


鏡片実測図



A 区　B 区

第 1 ・第 2 調査面（奈良時代・鎌倉時代）

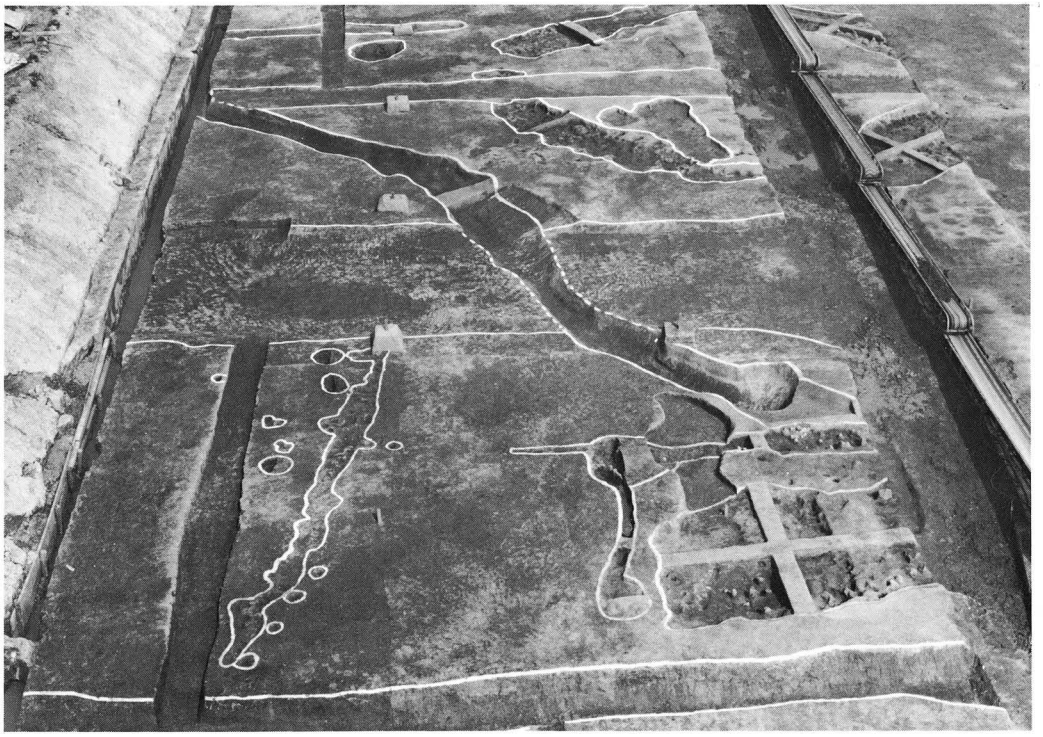


第 3 調査面（弥生時代後期・古墳時代中期）

0　10　20m

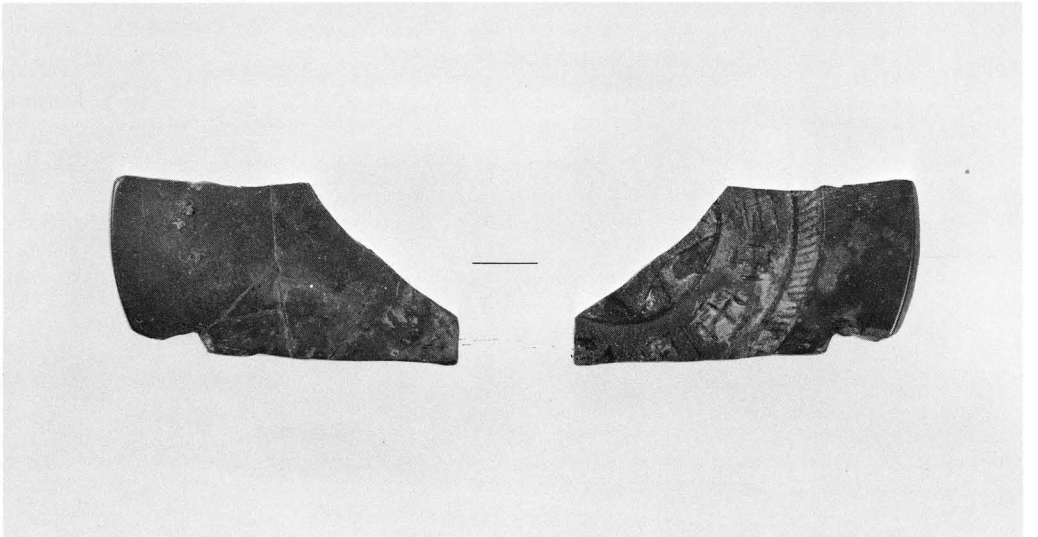
検出遺構平面図

A区全景（東から）



B区全景（西から）

A区グリッド調査



鏡片

2　八尾南遺跡（第３次調査）

調 査 地：西木の本４丁目４

調査期間：昭和59年７月10日～昭和60年３月30日

調査面積：900㎡

はじめに

今回の発掘調査は、近畿財務局合同宿舎建設に先立って実施したもので、八尾南遺跡内の第３次調査にあたる。当調査地は、第２次調査地の北方約400ｍ地点、八尾南遺跡推定範囲の北西部に位置する。

当調査地の東隣では、昭和56年度に八尾市教育委員会文化財室が、防衛庁宿舎建設に先立って発掘調査を実施しており、その結果、平安時代の水田遺構、古墳時代中期の土坑１基とそれに伴う韓式系土器・初期須恵器が検出されている。

調査概要

調査対象地に３箇所の調査区を設定し、南からＡ～Ｃトレンチと付称して調査を実施した。

・Ａトレンチ（45×10ｍ）

表土下2.7ｍ付近に堆積する淡灰色粗砂および黒灰色粘砂土層上面（ＴＰ＋8.50ｍ前後）で、古墳時代中期の掘立柱建物１棟・土坑７基・溝６条・柱穴96個を検出した。なお、各遺構内から、初期須恵器・韓式系土器・製塩土器の良好な資料が出土している。

・Ｂトレンチ（30×10ｍ）

表土下2.3ｍ（ＴＰ＋8.60ｍ）付近で、茶灰色粘土を耕作土とする平安時代の水田遺構を検出した。また、それより0.45ｍ下層に堆積する灰色粗砂上面（ＴＰ＋8.15ｍ）で、古墳時代中期の土坑２基・溝７条・柱穴44個を検出し、さらに0.15ｍ下層（ＴＰ＋8.00ｍ）では、灰黒色粘土を耕作土とする古墳時代中期初頭の水田遺構を検出した。

・Ｃトレンチ（20×10ｍ）

Ｂトレンチと同様、表土下2.2ｍ（ＴＰ＋8.60ｍ）付近で、茶灰色粘土を耕作土とする平安時代の水田遺構の他、溝１条を検出した。さらに0.6ｍ下層（ＴＰ＋8.00ｍ）でも、灰黒色粘土を耕作土とする古墳時代中期初頭の水田遺構・溝１条を検出した。

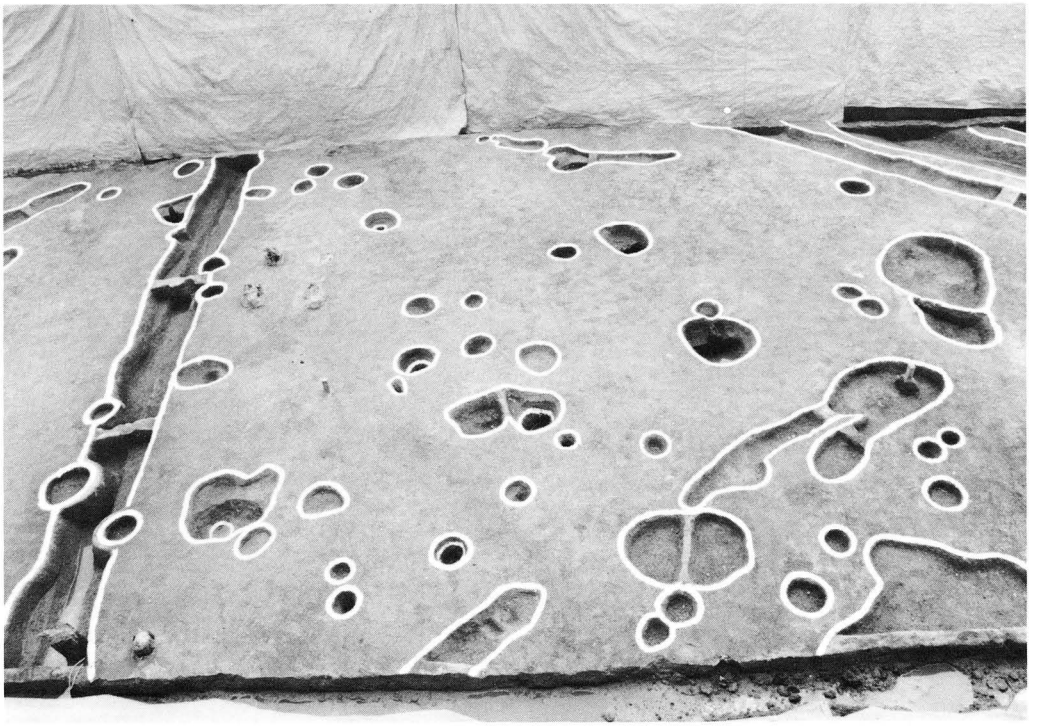
まとめ

今回の調査では、昭和56年度の調査でも検出した平安時代の水田遺構、古墳時代中期の集落遺構に加え、古墳時代中期初頭の水田遺構を検出した。その中でも特に古墳時代中期初頭の水田遺構は、昭和53年度の調査で確認した同時期の遺構群との有機的な関係を持つものとして注

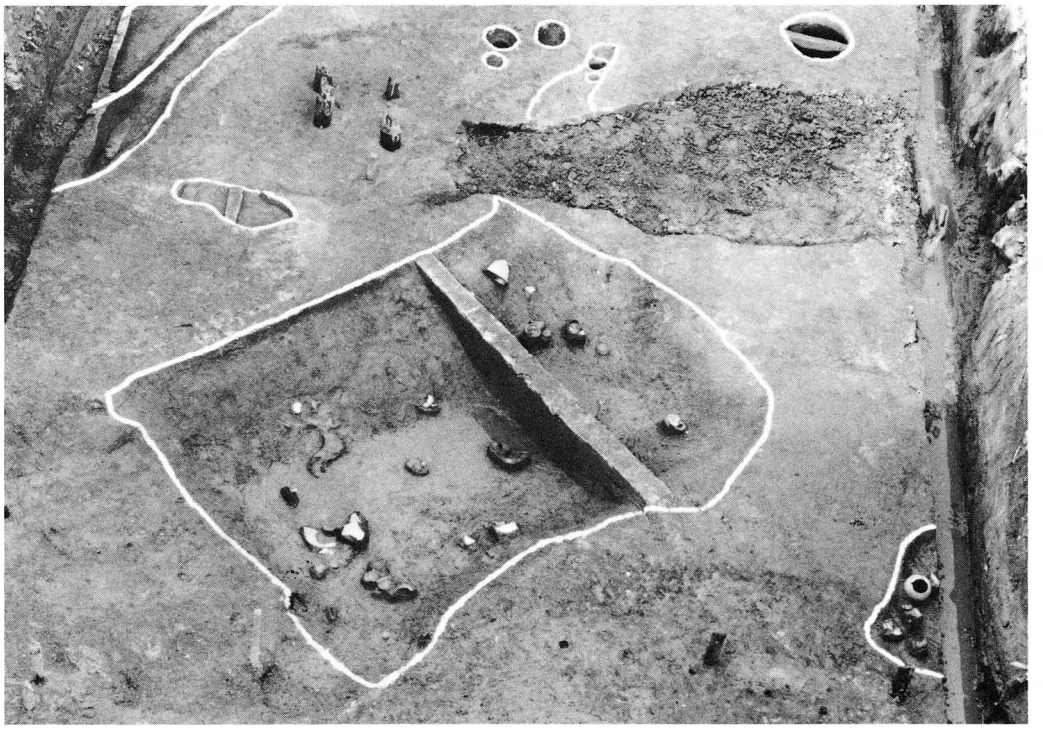
目される。さらに、Ａトレンチで確認した掘立柱建物を中核として初期須恵器・韓式系土器を伴う遺構群の存在は、八尾南遺跡・長原遺跡の地域的な特徴の一つとして再認識されよう。

なお、当調査の成果は、「八尾南遺跡発掘調査概要報告」として、『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要―昭和59年度』：（財）八尾市文化財調査研究会報告６に収めた。

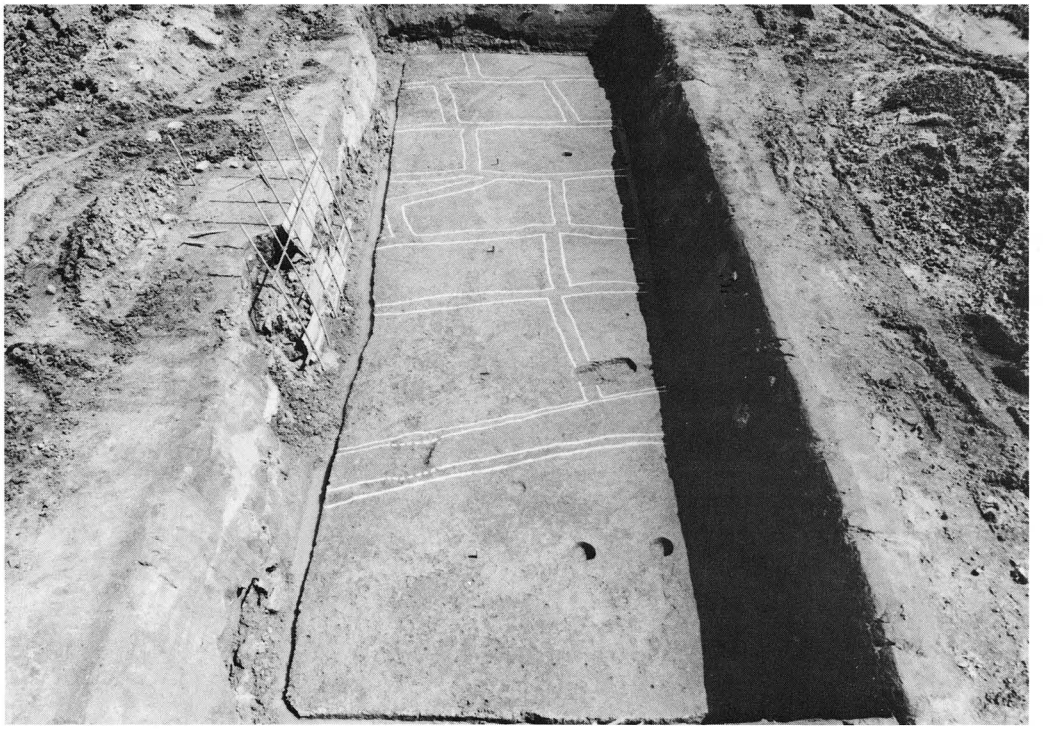
Ａトレンチ全景（西から）



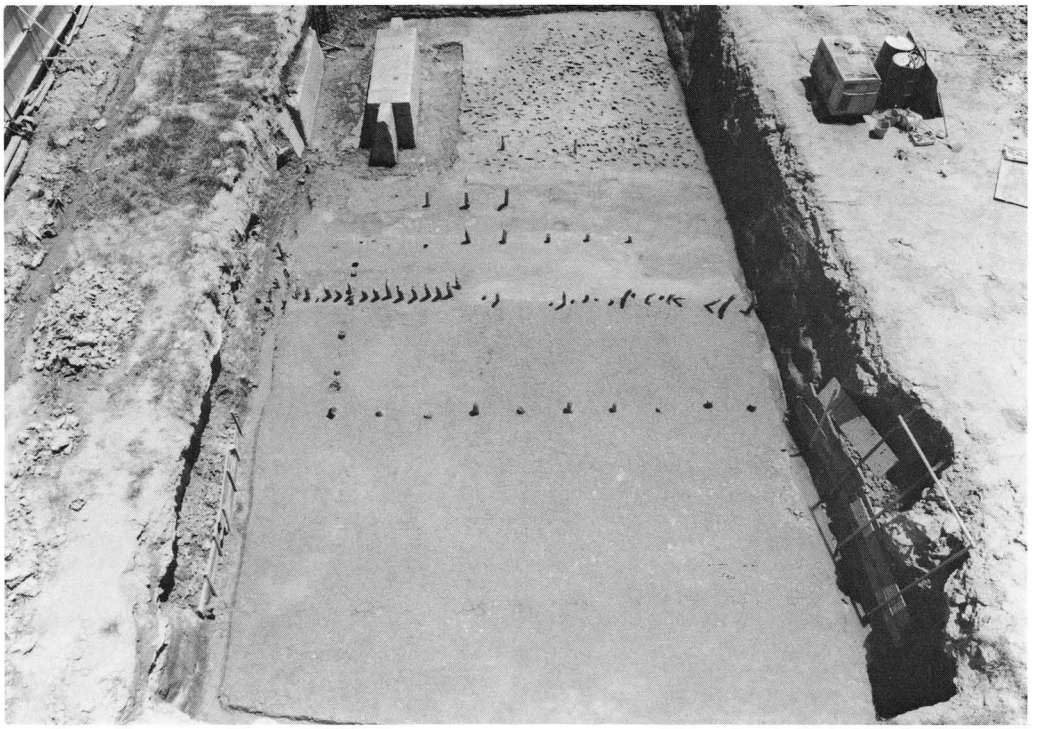
Aトレンチ掘立柱建物検出状況（北から）



Aトレンチ土坑検出状況（西から）



Ｂトレンチ古墳時代中期初頭水田面全景（西から）



Ｃトレンチ平安時代水田面全景（西から）

3　八尾南遺跡（第４次調査）

調 査 地：西木の本１丁目63

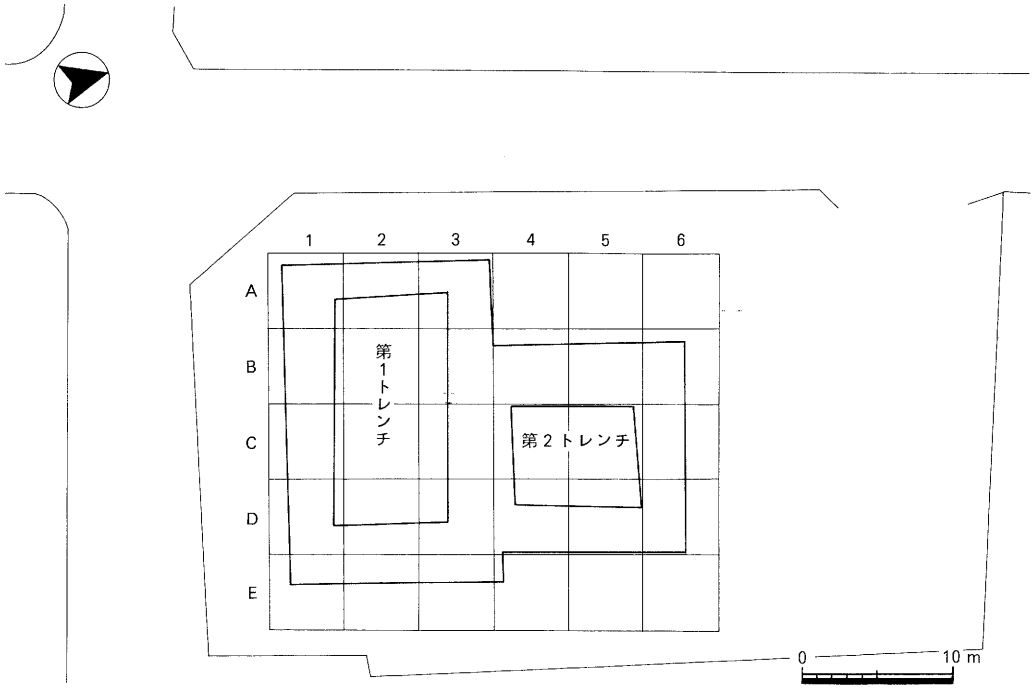
調査期間：昭和59年10月５日～11月６日

調査面積：630㎡

はじめに

今回の発掘調査は、病院建設に先立って実施したもので、八尾南遺跡内の第４次調査にあたり、第３次調査地の北東約350ｍの地点に位置する。

当調査地では、昭和56年10月に、八尾市教育委員会文化財室による試掘調査がすでに実施されていた。その結果、現地表下3.15ｍに古墳時代中期の遺物包含層が存在することが確認されていたため、開発に際しては全面発掘調査が必要であると判断されていた。このような中で本年度に建物の建設が予定されたため、当該地全面について発掘調査を実施する旨の指示が八尾市教育委員会文化財室より出された。この指示を受けた当調査研究会では、遺物包含層が深く湧水層と一致することや土質が軟弱であること、さらに隣接地に余裕がないこと等の事情から、全面発掘調査を実施するためには鋼矢板を打設する必要があると判断した。そこで、八尾市教



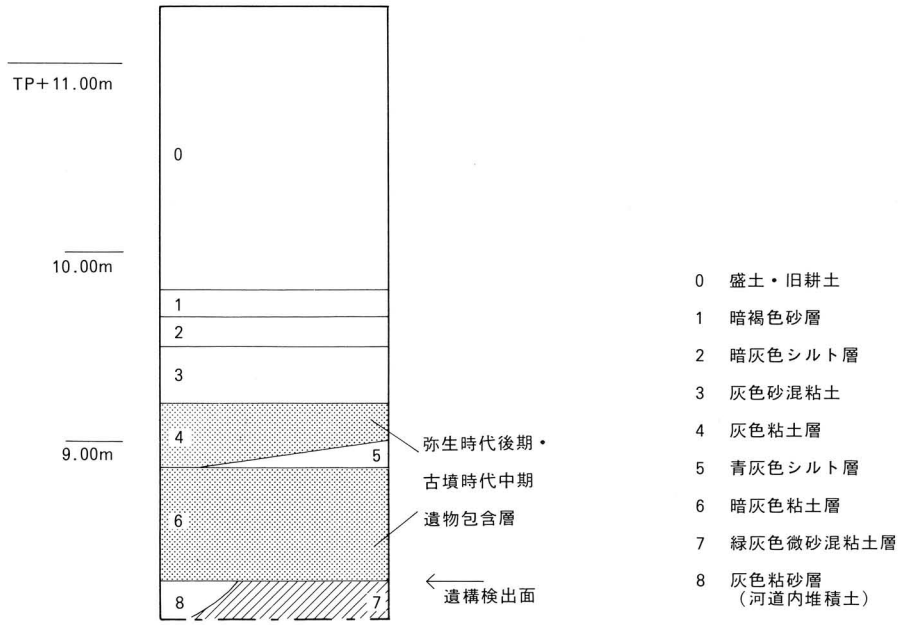
調査区設定図

育委員会文化財室の指示を仰いだところ、基礎工事によって破壊される部分約630㎡を調査対象に変更する旨の指示がなされた。なお、前記の条件に対処すべく、トレンチ壁面の勾配を充分に保ったため、最終的な遺構検出面はさらに狭まっている。

調査概要

調査地が狭小で、しかも掘削深度が深いことが試掘データから明らかであったため、あらかじめ盛土を機械掘削によって0.5ｍ程度除去した後、調査区を南北に分割し、南側を第１トレンチ・北側を第２トレンチと付称した。調査は第１トレンチから実施し、調査終了後に埋戻して第２トレンチの調査に移行した。

当初、第１トレンチでは現地表下2.2ｍ付近の第４層（遺物包含層）上面まで機械掘削を進める予定であったが、第１層・第３層からの湧水が著しく、壁面崩壊が相次いだため、現地表下1.8ｍ付近で機械掘削を中止した。以後人力で掘削を続行したが湧水が甚だしく、遺構検出面がきわめて軟弱となり、調査の続行が困難になった。そこでやむを得ず、遺構検出面を狭める措置を取ったため、充分な調査を実施することはできなかった。一方、第２トレンチでは、排水作業も比較的容易にできたため、当初の予定通り第４層上面まで機械掘削を進め、以下の各層については人力掘削を実施した。なお、実測図作成・写真撮影等の記録保存に必要な作業は、随時実施した。



層序模式図

層序は両トレンチともほぼ一定しており、盛土・旧耕土以下第１層灰褐色砂層（層厚0.3ｍ）、第２層暗灰色シルト層（0.1ｍ）、第３層灰色砂混粘土層（0.3ｍ）、第４層灰色粘土層（0.4ｍ）、第５層青灰色シルト層（0.05ｍ）、第６層灰色～暗灰色砂混粘土層（0.6～0.8ｍ）、第７層緑灰色微砂混粘土層（0.2ｍ以上）である。第５層は部分的に堆積する土層で、第２トレンチでは認められなかった。また、第６層には、植物遺体が多量に含まれる部分もある。

なお、これらのうち、第４層・第６層が弥生時代後期と古墳時代中期の遺物包含層である。その下に堆積する第７層上面が、弥生時代後期の遺構検出面である。

・第１トレンチ（21×14ｍ）

前記のように充分な調査は行えなかったが、現地表下３ｍ付近に堆積する第７層緑灰色微砂混粘土層上面（ＴＰ＋8.30ｍ）で、土坑３基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、小穴４個（ＳＰ－１～ＳＰ－４）の他、自然河道を検出した。

土坑

ＳＫ－１：調査区東辺中央部で検出した。上面隅丸方形を呈し、長辺0.7ｍ・短辺0.5ｍ・深さ0.1ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粘土で粘性はきわめて高く、炭化物・砂粒が混入している。内部からは、弥生時代後期（以下第Ｖ様式と記す）の高杯・甕等の細片が少量出土している。

ＳＫ－２：ＳＫ－１の南側で検出した。南東部は調査区外へ至るが、検出部で長楕円形を呈し、長径2.5ｍ・短辺0.8ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土はＳＫ－１と同じであるが、粘性はさらに高い。内部からは、土師器甕（８）の他、第Ｖ様式の壷・甕・高杯等の細片がごくわずかに出土している。

ＳＫ－３：トレンチ西部中央で検出した。部分的にしか検出できていないが、検出部の東西幅1.4～2.5ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粘土で、内部から第Ｖ様式の甕等の細片がごくわずかに出土している。

小穴

ＳＰ－１～ＳＰ－４：トレンチ北東部で３個（ＳＰ－１～ＳＰ－３）、ＳＫ－３の東隣で１個（ＳＰ－４）の小穴を検出した。上面円形あるいは楕円形を呈し、径0.15～0.35ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。内部堆積土はいずれも暗灰色粘土で、内部から第Ｖ様式の土器の細片が出土している。

自然河道

ＮＲ－１：トレンチ中央部をほぼ南北に流れるもので、幅2.1～2.3ｍ・深さ0.2～0.3ｍを測る。内部には灰色粗砂が堆積し、層中から土器の細片が少量出土している。この粗砂は河道内だけでなく、遺構検出面である緑灰色微砂混粘土上面にも部分的に堆積している。

・第２トレンチ（14×13ｍ）

当トレンチでも第１トレンチ同様第７層上面で、土坑１基（ＳＫ－４）、溝３条（ＳＤ－１～ＳＤ－３）の他、第１トレンチで検出した自然河道ＮＲ－１の北の延長を検出した。

土坑

ＳＫ－４：トレンチ南辺中央部で検出した。南部は調査区外へ至るため、全容は不明であるが、検出部で上面台形を呈し、長辺1.3ｍ・短辺0.7ｍ・深さ0.1ｍを測る。内部には暗灰色粘土が堆積し、第Ｖ様式の壷（１）・甕（３～５）・手焙形土器（２）の他、器種不明の体部・底部の破片が比較的多量に出土している。

溝

ＳＤ－１：トレンチ南東部で検出した。ほぼ南北に伸びる溝で、長さ４ｍで両端がとぎれている。幅0.2～0.4ｍ・深さ0.05ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粘土と緑灰色粘土の互層で、内部から第Ｖ様式の土器の細片が少量出土している。

ＳＤ－２：トレンチ中央部から北東方向へ約４ｍ伸び、調査区外へ至る。幅約0.2ｍ・深さ約0.05ｍを測る。内部堆積土はＳＤ－１同様、内部から土器の細片（６）が出土している。

ＳＤ－３：トレンチ中央部から北方向へ約４ｍ伸びた後、調査区外へ至る溝である。幅0.3～0.6ｍ・深さ0.06ｍを測る。内部堆積土は暗灰色砂混粘土で、内部から第Ｖ様式の甕（７）の他、土器の細片が少量出土している。

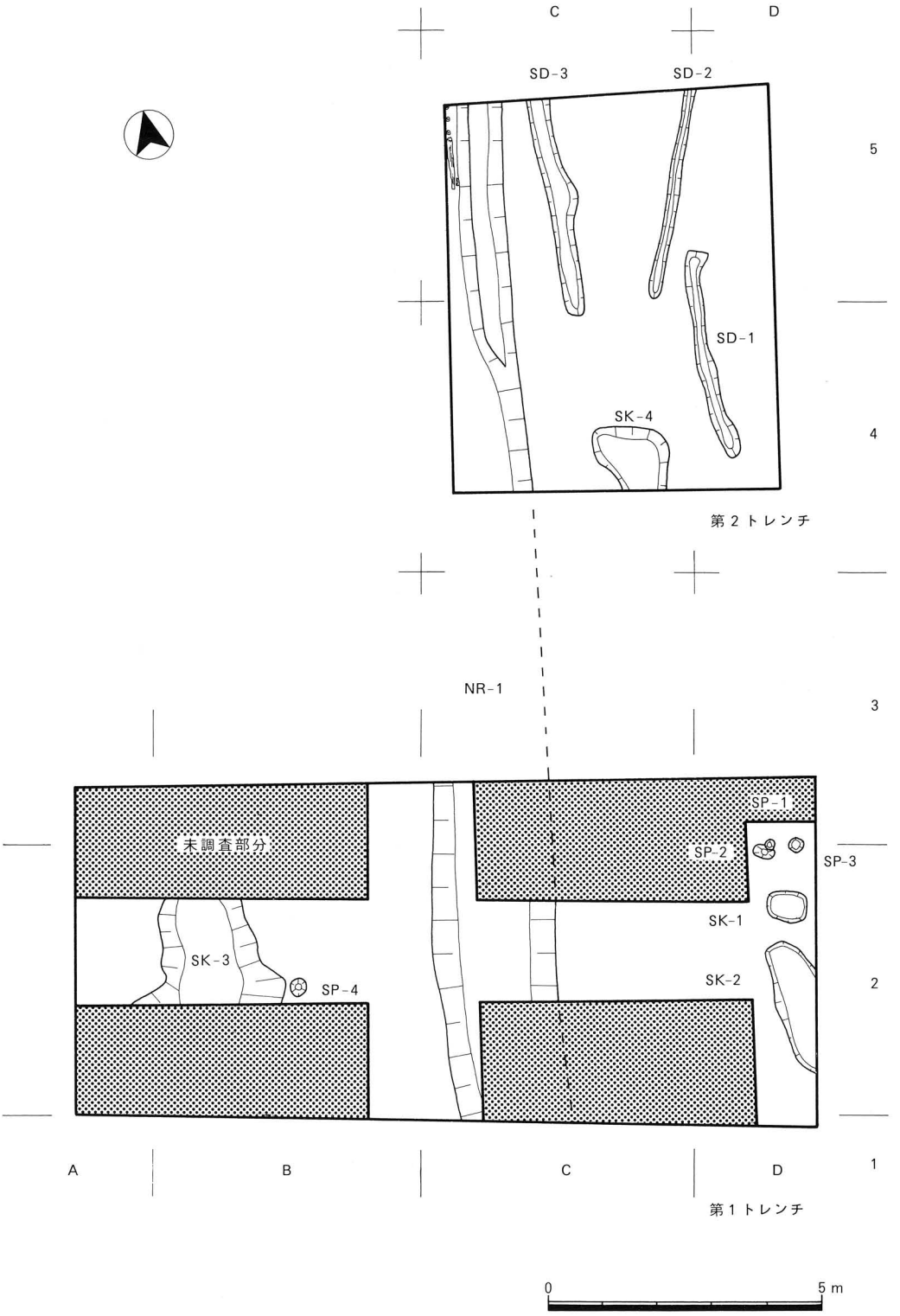
自然河道

ＮＲ－１：トレンチ西部で、第１トレンチで検出した自然河道の東岸を検出した。中央より北側には幅0.2～0.3ｍのテラス状の段を有する。最深0.35ｍを測り、内部堆積土は、上層の暗灰色粘土と下層の灰色粗砂からなる。なお、当トレンチでは、第１トレンチのような粗砂の広がりは認められなかった。また、トレンチ北西隅には、流路に沿って打込まれた杭が５本残存していた。このうちの４本は垂直に打込まれており、約0.3ｍの等間隔で並んでいる。これらの杭に掛かった状態で、須恵器杯身（９）・甕（10）等が検出されている。

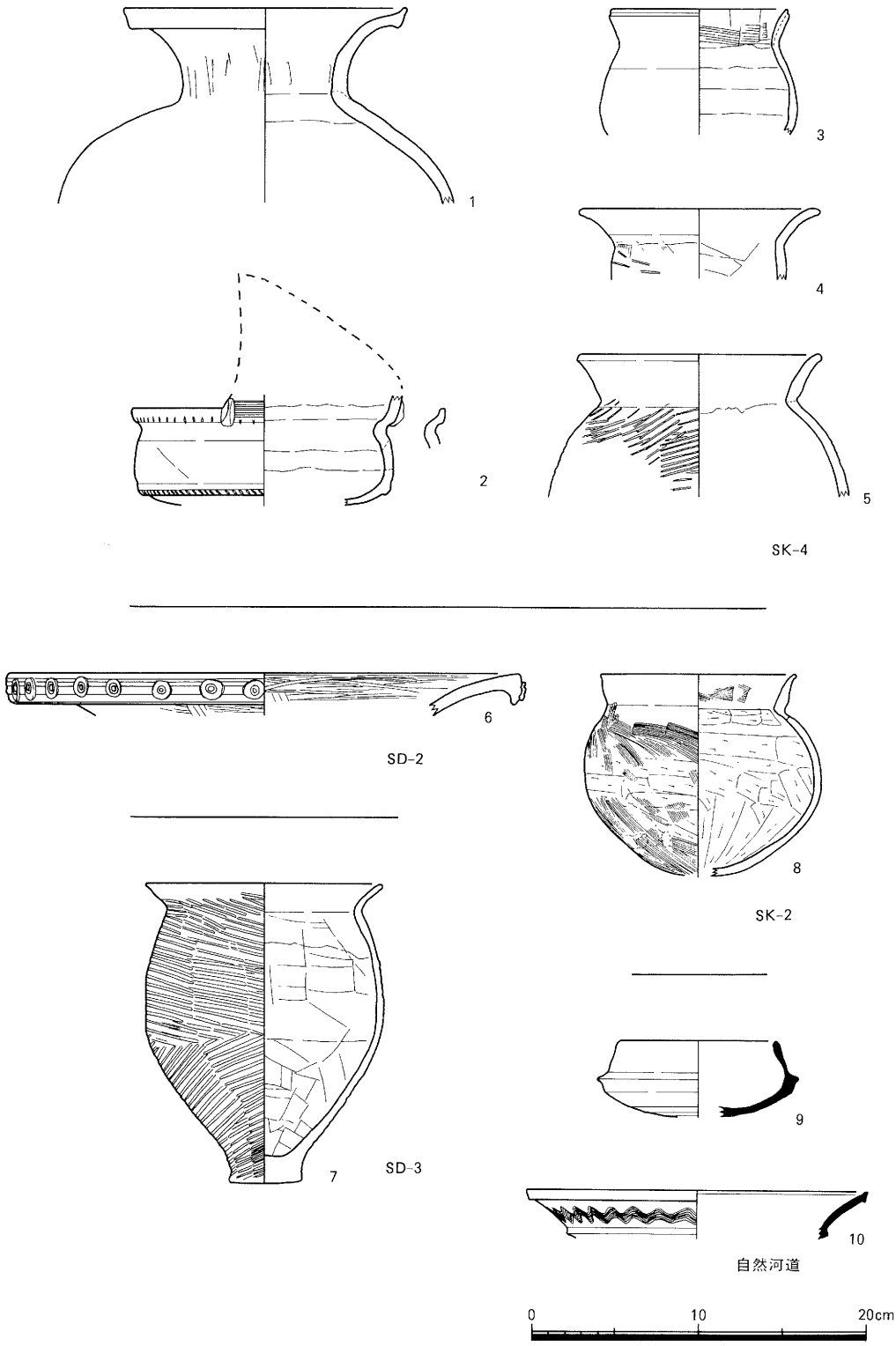
この河道は他の遺構と同様第７層緑灰色微砂混粘土層上面で検出されたが、古墳時代中期の遺物を含んでいることや、杭が第６層上面から打込まれていること等から、古墳時代中期（５世紀）までは河道として機能していたものと推定される。

まとめ

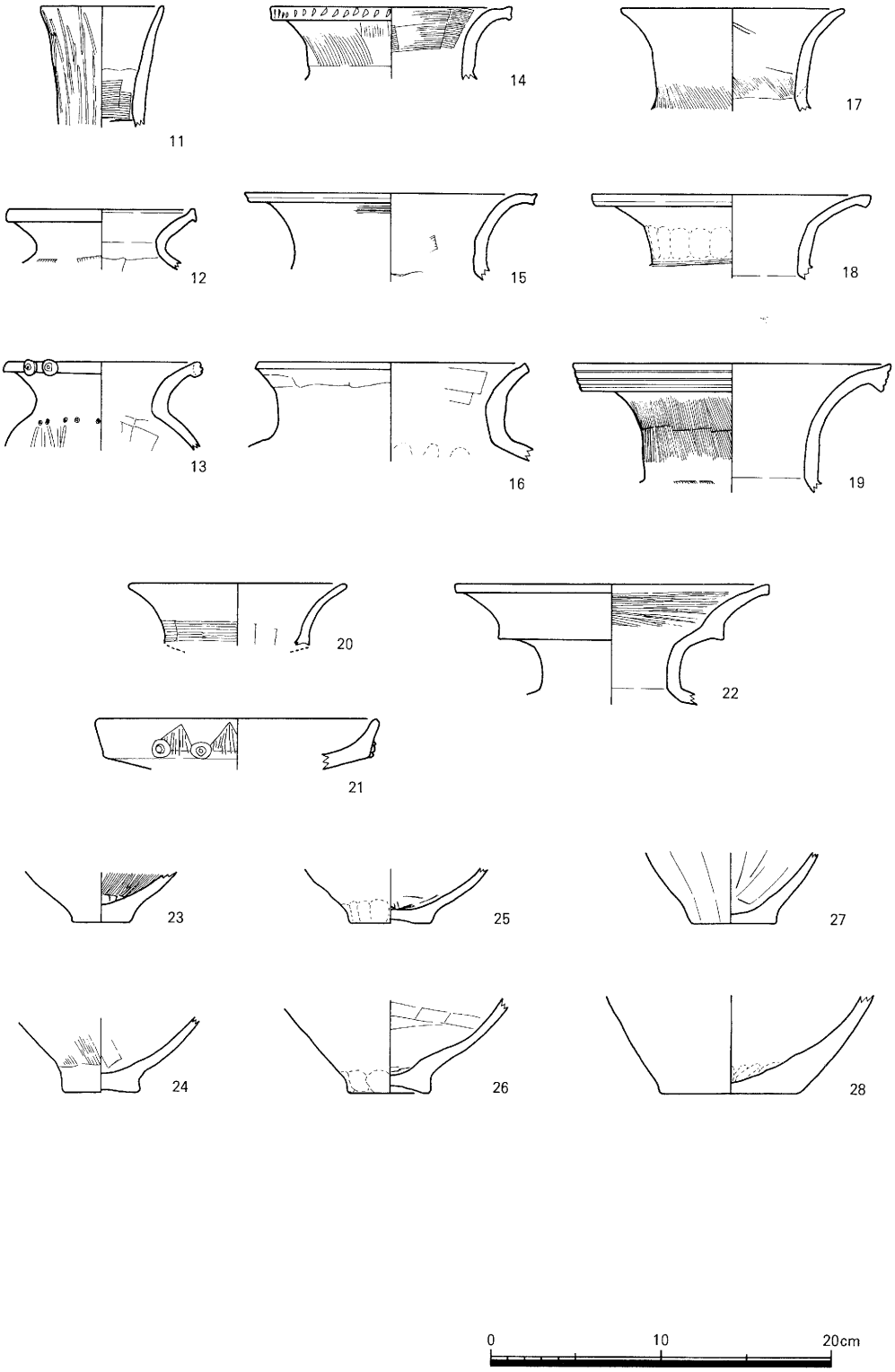
今回の調査では、各遺構および遺物包含層である第４層・第６層から、弥生時代後期・古墳時代中期の土器類がコンテナに10箱程度出土している。遺物包含層には２時期の遺物が混在しているが、遺物個々は磨耗を受けたものが少なく、かなり濃密な状態で出土していることから、当調査地の近隣に集落の存在が想定される。


C
D
SD-3
SD-2
5
SD-1
SK-4
4
第２トレンチ
NR-1
3
SP-1
未調査部分
SP-2
SP-3
SK-1
SK-3
SP-4
SK-2
2
A
B
C
D
1
第１トレンチ
0
5 m

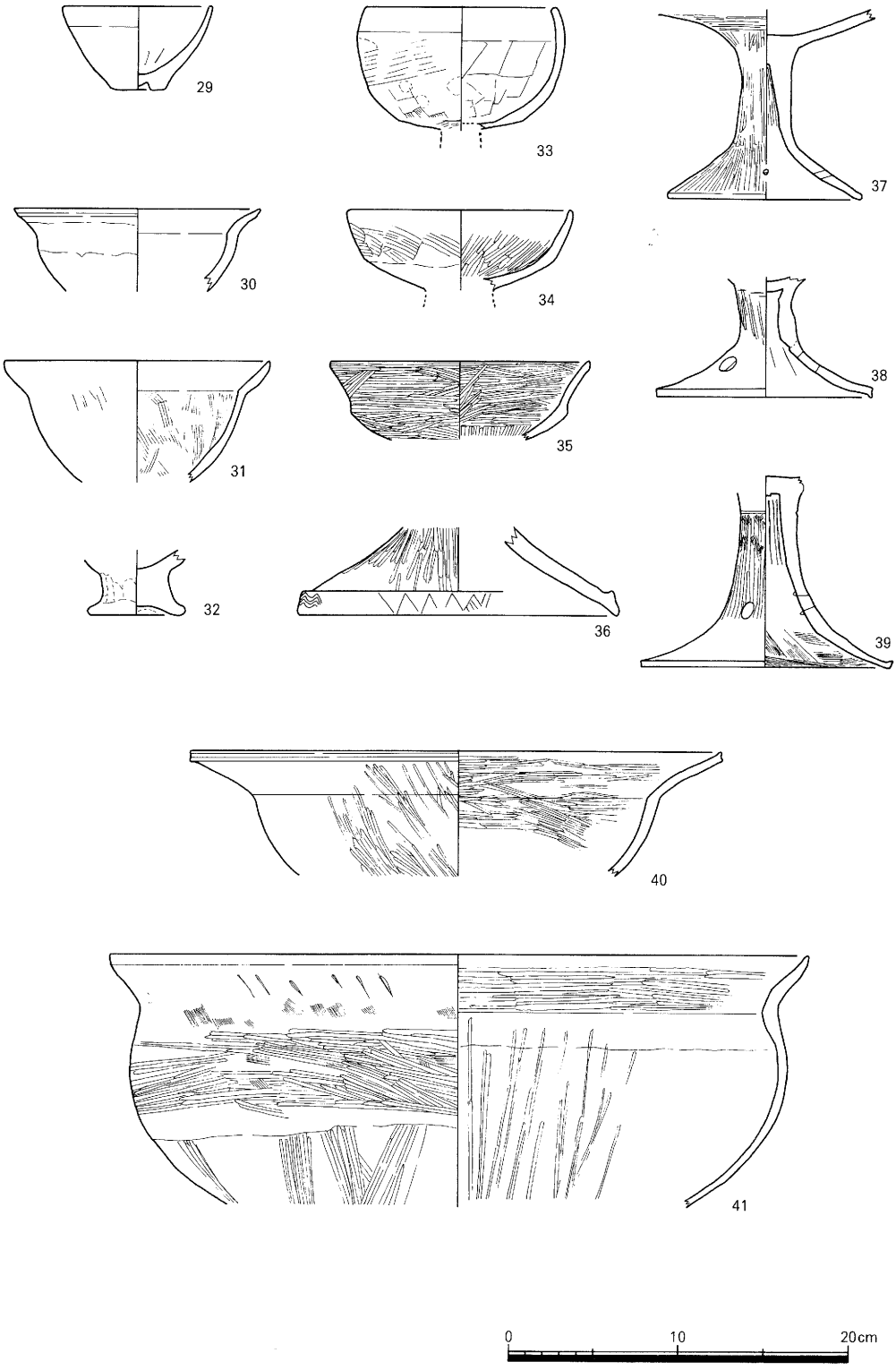
検出遺構平面図



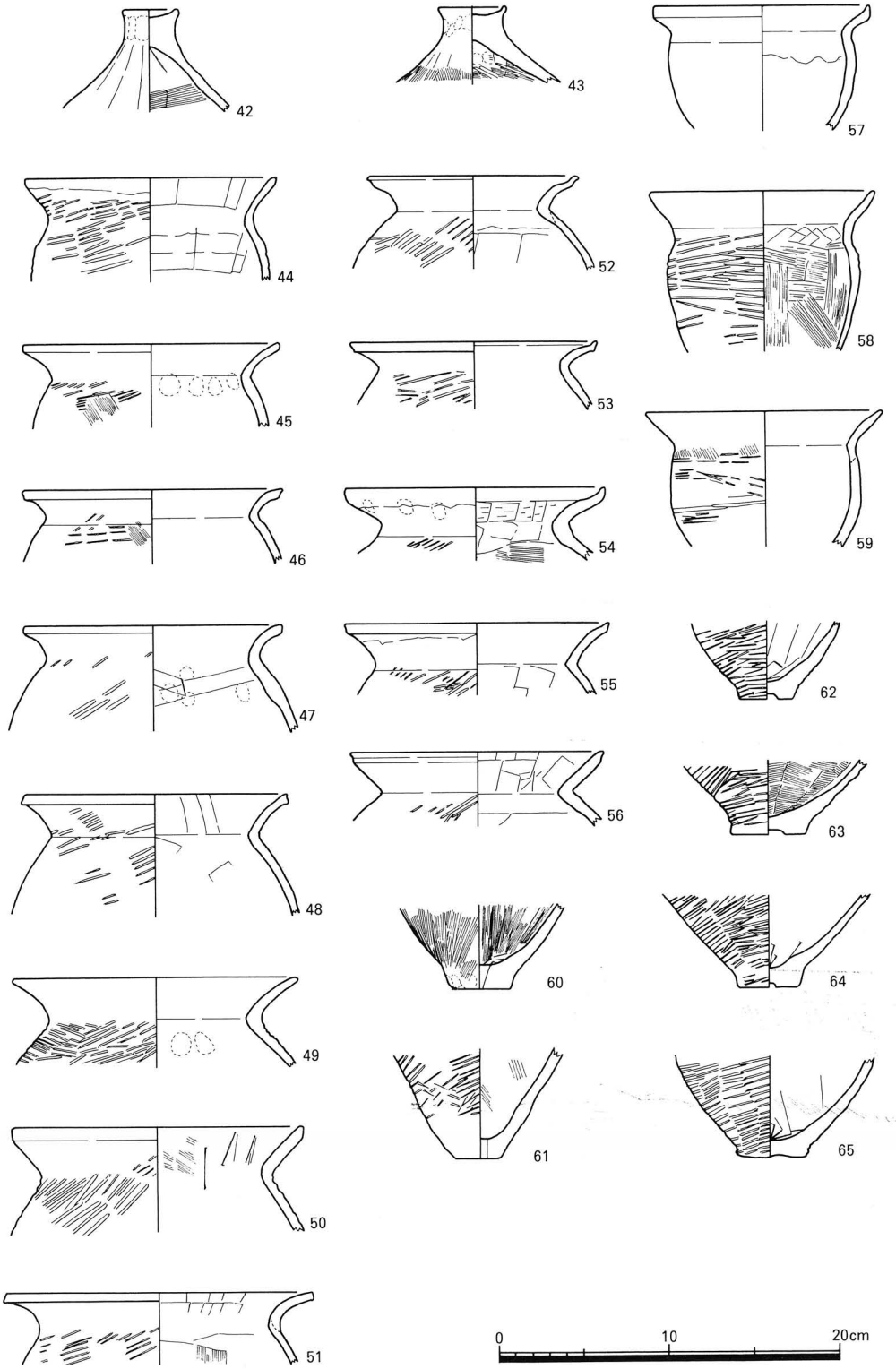
出土遺物実測図 1



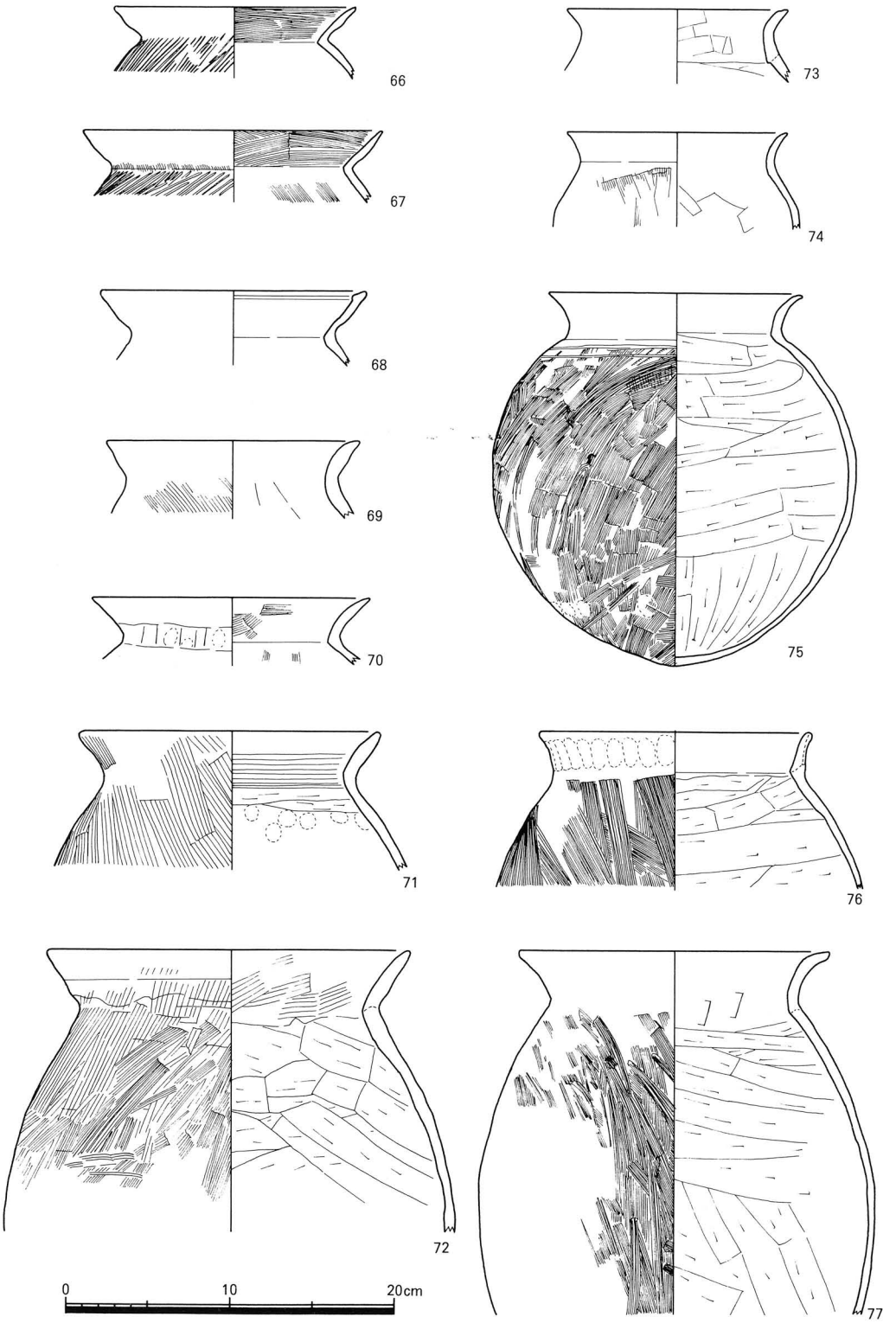
出土遺物実測図 2



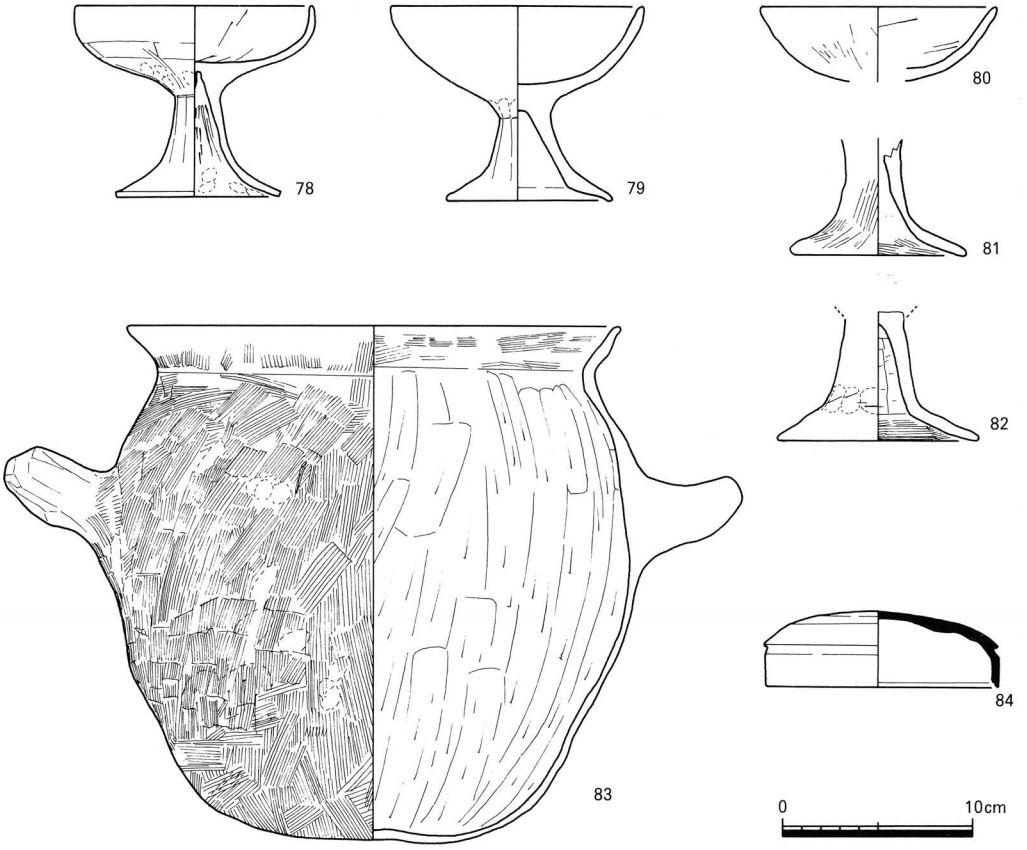
出土遺物実測図 3


42
43
57
44
52
58
45
53
46
54
59
47
55
62
56
63
48
60
64
49
61
65
50
51
0
10
20cm

出土遺物実測図 4



出土遺物実測図 5



出土遺物実測図 6

出土遺物観察表＜遺構内出土遺物＞

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	弥生土器 壷 SK－4	17.0 —	丸みをおびた体部から、直立ぎみに立ち上り、外反する口縁部に至る。端部は上下にわずかに拡張し、外傾する面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、頸部板状工具によるナデ。内面口縁部ヨコナデ。	灰褐色	5㎜前後の石英・長石、白色細砂粒を多量に、チャートを少量含む	良好	
2	弥生土器 手焙形 土器 SK－4	— — 最大径 15.7	覆部・底部欠損。受口状口縁部外面に刻目・体部と底部の境に凸帯＋刻目、口縁部と開口部の境に浮文を貼付する。 外面口縁部・凸帯をヨコナデ、体部に板状工具の圧痕を残す。内面口縁部ヨコナデ、体部に指頭圧痕を残す。	乳褐色	3㎜の石英・長石、雲母、6㎜の小石粒をわずかに含む	良好	
3	弥生土器 甕 SK－4	10.6 —	張りの少い体部から、器肉を増してわずかに外反する口縁部に至る。口縁端部には沈線が廻る。 外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ？　内面口縁部ハケ、体部ナデ。	淡赤褐色～乳橙色	精良 長石、雲母、白色細砂粒を少量含む	良好	
4	弥生土器 甕 SK－4	14.4	張りの少い体部から、大きく外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部タタキの後ハケ。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	乳褐色	石英、長石を多量に、雲母、赤色酸化粒を少量含む	良好	
5	弥生土器 甕 SK－4	14.6 —	丸い体部から外反する口縁部に至る。端部は丸みのある面を持つ。 外面体部右上りタタキ(5条／2.5㎝)の後口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	長石を多量に、石英を少量含む	良好	内外面に煤付着
6	弥生土器 壷 SD－2	30.6 —	水平近くに外反する口縁部のみ遺存。端部は下方に拡張し、広い面を持つ。端面には5条の沈線を廻らせた後、竹管押圧円形浮文を貼付する。 内外面ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ。	乳褐色	3～1㎜の石英、1㎜の長石を多量に含む	良好	
7	弥生土器 甕 SD－3	14.2 18.3 最大径 14.4 底径 4.4	突出平底から、中位よりやや上に最大径のある体部に至る。口縁部は丸く外反する。 外面口縁部ヨコナデ、体部上半左上り・下半右上りタタキ(6条／2.8㎝)。内面口縁部ヨコナデ、以下板状工具によるナデ（肩部右→左・体部右下→左上・底部乱方向)。	灰褐色～乳橙色	チャート、石英を多量に含む	良好	外面体部に黒斑
8	土師器 甕 SK－2	11.8 12.2 最大径 14.8	球形の体部から、内に稜を持って外傾する短い口縁部に至る。端部は器肉を減じて丸く終る。 外面体部中位以下ケズリの後全体をハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部横方向・底部放射状ヘラケズリ、口縁部ハケの後ヨコナデ。	褐色～乳褐色～黒色	石英、長石を多量に、雲母、赤色酸化粒をわずかに含む	良好	内外面に煤付着

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
9	須恵器 杯身 第2 トレンチ NR－1	9.4 6.7 受部径12.1	扁平な半球形の体部から、わずかに突出する受部に至る。立ち上りは長く内傾し、端部は丸く終る。 外面底部回転ケズリ、体部から口縁部にかけて回転ナデ。内面底部一方向静止ナデ、他は回転ナデ。	外面青灰色 内面暗赤紫 灰色	緻密 白色細砂粒を含む	良好 堅緻	
10	須恵器 甕 第2 トレンチ NR－1	10.4 —	凸線を廻らせ、外反する口縁部のみ。口縁端部は外に面を持って上下にわずかに拡張する。凸線上位に11条1組の波状文1帯を施す。 内外面回転ナデ。	黒灰色～灰色	緻密	良好 堅緻	

＜弥生時代後期の遺物＞

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
11	壷 第1 トレンチ 第6層	7.2 —	直立した後、外傾する口縁部。端部は尖りぎみに終る。 外面ヘラミガキ。内面端部付近にヨコナデ、頸部下半にハケによる調整。	乳茶褐色	3～1㎜の石英・長石を含む	良好	
12	壷 第2 トレンチ 第6層	11.0 —	体部から丸みのある「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は面を持って上下に肥厚する。 内外面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	乳茶褐色	白色細砂粒、雲母を含む	良好	
13	壷 第2 トレンチ 第6層	11.0 —	12と同様の形態。口縁部は下方に拡張し、竹管押圧円形浮文2個1組を圧着する（2組残存）。外面体部に竹管押圧文を施す。 外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	淡橙色～灰褐色	3～0.5㎜の石英・長石を多量に含む	良好	
14	壷 第2 トレンチ 第6層	14.2 —	直立ぎみの頸部から、水平に外反する口縁部に至る。端部は上下にわずかに肥厚して面をなし、ヘラ先による押圧文を施す。 外面ハケ（6本／1.6cm）後ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケ。	乳茶褐色	石英、長石を多量に含む	良好	
15	壷 第1 トレンチ 第6層	17.4 —	14に似る形態。口縁端部はやや外傾する面をなし、上方へつまみ上げぎみに終る。 外面口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。	淡褐色～橙色	5～3㎜の石英、長石、チャートを含む	良好	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
16	壷 第2 トレンチ 第6層	15.6 —	直立する頸部から、外反する口縁部に至る。端部は外傾する面をなし、上方へつまみ上げぎみに終る。 外面口縁端部ヨコナデ、他は磨耗のため不明、内面口縁端部ヨコナデ、口縁部から頸部板状工具によるナデ、体部に指頭圧痕。	淡赤褐色～橙色	3～0.5㎜の石英、長石を多量に含む	良好	
17	壷 第1 トレンチ 第6層	13.4 —	直立する頸部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 内外面頸部ハケ（7本／0.9㎝）後口縁部から頸部上半をヨコナデ。	乳茶褐色	石英、長石を多量に、3㎜前後のチャート、白色細砂粒雲母を含む	良好	
18	壷 第1 トレンチ 第6層	16.4 —	やや外傾ぎみの頸部から、外反する口縁部に至る。端部は面を持ち、下方へわずかに肥厚する。 外面ヨコナデ、頸部に指頭圧痕・頸部下にハケ目を残す。内面ヨコナデ。	赤橙色	石英、長石を多量に、チャートを少量含む	良好	
19	壷 第1 トレンチ 第6層	19.0 —	直立する頸部から、外反する口縁部に至る。端部は下方に拡張し、外面に3条の沈線を廻らせる。 外面口縁部ヨコナデ、頸部ハケ（4本／1㎝）。内面磨耗のため調整不明。	乳橙色	2～0.5㎜の石英、長石を多量に、チャート、雲母をわずかに含む	良好	
20	二重口縁 壷 第1 トレンチ 第6層	12.6 —	接合部から外反する口縁部のみ。 外面下部をハケナデ後ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面灰褐色 内面褐色	雲母を多量に、石英、長石、赤色酸化粒を含む	良好	
21	二重口縁 壷 第2 トレンチ 第6層	16.4 —	受口状の口縁部のみ。側面にヘラ先による鋸歯文と竹管押圧円形浮文を施す。 内外面磨耗のため調整不明。	外面乳橙色 内面赤橙色	石英、長石を含む	良好	
22	二重口縁 壷 第1 トレンチ 第6層	18.7 —	直立する頸部から大きく外反し、外に明瞭な稜を持ち、さらに外反する。端部は垂直な面を持つ。 外面ヨコナデ、肩部にハケ。内面ナデの後ヘラミガキ、肩部に指頭圧痕を残す。	赤橙色	石英、長石を多量に、角閃石を少量、雲母をわずかに含む	良好	
23	壷 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 3.2	突出平底の底部から、斜上方へ伸びる。 外面ナデ。内面ハケ。	褐色～暗赤褐色	2～1㎜の石英、長石、雲母、赤色酸化粒をわずかに含む	良好	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
24	壷 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 4.4	突出平底の底部から、丸みをおびて斜上方へ伸びる。 外面ハケ？ 内面板状工具によるナデ。	外面乳橙色 内面乳灰色	石英、長石、雲母、赤色酸化粒をわずかに含む	良好	
25	壷 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 4.8	突出するドーナツ状の底部から、丸みをおびて斜上方に伸びる。 外面底部側面指押さえの後ナデ。内面板状工具によるナデ。	外面乳橙色 内面灰褐色～黒色	白色細砂粒を含む	良好	内面底部に籾の圧痕
26	壷 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 4.7	突出する中窪みの底部から、斜上方に伸びる。 外面底部側面の指押さえの他不明瞭。内面板状工具によるナデ。	外面褐色 内面茶褐色	白色細砂粒、長石、雲母を含む	良好	
27	壷 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 5.4	わずかに突出する平底の底部から、斜上方に伸びる。 外面ナデ、底面に木葉痕を残す。内面板状工具によるナデ。	褐色～淡褐色	白色砂粒、石英、長石を多量に含む	良好	
28	壷 第1 トレンチ 第6層	— — 底径 8.1	突出しない平底の底部から、斜上方に直線的に伸びる。 外面に工具痕、内面に指頭圧痕・工具痕が認められるが、磨耗著しく調整不明瞭。	乳橙色	3㎜前後の石英、長石、チャートを少量含む	良好	
29	小型鉢 第1 トレンチ 第4層	8.8 5.1	中窪みの底部から、丸みを持って立ち上る。口縁部は直口し、端部丸く終る。 内外面底体部板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ。	淡橙色	3㎜前後の石英、長石、チャートを含む	良好	
30	鉢 第1 トレンチ 第6層	14.6 —	丸みを持つ体部から、内に鈍い稜を持って外反する口縁部に至る。端部は器肉を減じる。 外面口縁部のヨコナデの他磨耗のため不明瞭。内面口縁部ハケの後ヨコナデ、体部ナデ。	淡橙色	3㎜前後の石英、長石、白色細砂粒を含む	良好	
31	鉢 第2 トレンチ 第6層	15.8 —	丸みをおびた体部から、内に稜を持って内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終る。 内外面体部ハケ後ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳茶褐色	5～2㎜の石英、長石を多量に、チャート・雲母をわずかに含む	良好	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
32	鉢 第1 トレンチ 第6層	— — 裾径 5.7	台形の脚台部のみ。裾端部は丸く終る。 全体を指おさえ成形後、側面を板状工具によるナデ。	乳茶褐色～橙色	白色細砂粒を多量に、径3㎜の石英、長石、チャートを少量含む	良好	
33	高杯 第1 トレンチ 第6層	11.2 —	平坦な杯底部から、丸みをおびた稜を作り、内湾して直立する。口縁端部に浅い沈線状の窪みを持つ。 外面杯底部ハケ、体部タタキもしくはハケ、口縁部ヨコナデ。内面底体部板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ。	外面灰褐色～橙色 内面灰褐色	石英、長石を少量含む	良好	
34	高杯 第1 トレンチ 第6層	13.2 —	やや丸みをおびる杯底部から、角度を変えて伸びる口縁部に至る。端部はやや内湾して丸く終る。 外面ハケ。内面口縁部ヨコナデの後全体をヘラミガキ。	乳橙色	精良 1～3㎜の石英、長石、白色細砂粒、雲母をわずかに含む	良好	
35	高杯 第1 トレンチ 第6層	15.8 —	丸みのある杯底部から、外に稜を持った後外反する口縁部に至る。端部つまみ上げぎみに終る。 外面口縁部ヨコナデ後横ヘラミガキ、杯底部縦ヘラミガキ後横ヘラミガキ。内面口縁部横ヘラミガキ後杯底部縦ヘラミガキ。	外面乳茶褐色～黒色 内面乳茶褐色～褐色	石英、長石を含む	良好	外面口縁部に黒斑
36	高杯 第2 トレンチ 第6層	— — 裾径 18.8	「ハ」の字形に開く裾部。端部は上下にわずかに拡張し、面を持つ。端面に鋸歯文および波状文を施す。 外面ヘラミガキ後端部ヨコナデ。内面磨耗のため不明瞭。	外面乳橙色 内面乳橙色～黒色	石英、長石、チャートを少量含む	良好	裾端部付近に黒斑
37	高杯 第1 トレンチ 第4層	— — 裾径 11.5	筒形の柱状部から、ラッパ状に開く小型の裾部に至る。杯底部は大きく開く。裾部中位に4孔を穿つ（2孔残存）。 外面杯底部縦ヘラミガキの後横ヘラミガキ、脚部縦ヘラミガキ。内面杯底部ナデ後ヘラミガキ、柱状部しぼり目、裾部ナデ。	乳茶褐色	3㎜前後の石英、長石を含む	良好	
38	高杯 第2 トレンチ 第6層	— — 裾径 12.8	中空の短い柱状部から、ラッパ状に開く裾部に至る。端部は外に面を持ち、下につまみ出す。 外面柱状部ハケ後ヘラ調整、裾部ナデ、端部ヨコナデ。内面柱状部ケズリ、裾部板状工具によるナデ、端部ヨコナデ。	乳褐色	石英、長石、チャートを含む	良好	
39	高杯 第1 トレンチ 第6層	— — 裾径 15.0	中空の長い柱状部から、ラッパ状に開く裾部に至る。端部は外傾する面を持つ。 外面柱状部ハケ後ヘラ調整、裾部ナデ、上端に1条の沈線が廻る。内面柱状部上端に筒状の圧痕、上半しぼり目、下半ケズリ、裾部ハケ（11本／1.5㎝）。	淡橙色	精良 白色細砂粒を含む	良好	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
40	大型鉢 第1 トレンチ 第6層	31.4 —	丸みをおびた体部から、大きく外反する口縁部に至る。端部は外に面を持ち、上下にごくわずか肥厚する。 外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後口縁部から体部をヘラミガキ。	外面乳橙色～褐色～黒色 内面褐色～乳橙色	石英、長石を多量に含む	良好	内外面体部に煤付着
41	大型鉢 第1 トレンチ 第6層	31.9 —	丸みのある体部から、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げぎみに終る。 外面口縁部ヨコナデ（成形時の工具痕・ハケ目を残す）、体部上半横・下半縦ヘラミガキ。内面口縁部横ヘラミガキ、端部ヨコナデ、体部縦ヘラミガキ。	乳褐色～乳茶褐色	5㎜の石英、3㎜前後の長石を多量に含む	良好	
42	蓋(甕) 第1 トレンチ 第6層	— — つまみ径 3.2	中窪みの厚いつまみから、笠形に伸びる。 外面つまみ上端・側面指押さえ、体部板状工具によるナデ。内面天井部板状工具によるナデ、体部ハケ（5本／1㎝）。	淡褐色	石英、長石の細粒を含む	良好	
43	蓋(甕) 第1 トレンチ 第6層	— — つまみ径 4.0	42より扁平な器形。 調整42と同じ。	乳茶褐色～灰褐色	2㎜前後の石英、長石、白色細砂粒を含む	良好	
44	甕 第1 トレンチ 第6層	15.0 —	体部からゆるやかに外反する口縁部に至る。端部は外に面を持って尖りぎみに終る。 外面右上りタタキ（3本／1.3㎝）。内面板状工具によるナデ後口縁部ヨコナデ。	暗褐色	角閃石を多量に、2㎜前後の石英、長石を少量含む	良好	
45	甕 第2 トレンチ 第6層	15.0 —	体部から丸みをおびた「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ（3本／1㎝）後ハケ（11本／1㎝）。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	灰褐色	石英、雲母を含む	良好	
46	甕 第2 トレンチ 第6層	15.4 —	体部から丸みのある「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は外へつまみぎみとなり、外傾する凹面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、屈曲部から肩部にタタキ目・ハケ目を残す。内面口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色～黒色	2㎜前後の石英、白色小石粒をわずかに含む	良好	外面に煤付着
47	甕 第2 トレンチ 第6層	15.2 —	体部から丸みを持って外反する口縁部に至る。端部は垂直な面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ。内面口縁部ヨコナデ、体部指押さえ後板状工具によるナデ。	乳橙色	3～0.5㎜の石英、長石、赤色酸化粒を含む	良好	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
48	甕 第2 トレンチ 第6層	15.4 —	丸みをおびた体部から、「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は外傾する面を持ち、下方へわずかに肥厚して終る。 外面右上りタタキ後口縁部ヨコナデ、体部縦方向のナデ。内面板状工具によるナデ後口縁部ヨコナデ。	乳褐色～黒色	石英、長石、雲母を少量含む	良好	外面体部に黒斑
49	甕 第1 トレンチ 第6層	16.8 —	体部から「く」の字形に外反して口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ。内面口縁部ヨコナデ、体部指頭圧痕・工具痕を残す。	乳茶褐色	石英、長石を多量に、雲母を少量含む	良好	
50	甕 第1 トレンチ 第6層	17.2 —	体部から「く」の字形に屈曲して口縁部に至る。端部は垂直な面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ（3本／1.8cm）。内面口縁部板状工具によるナデ後ヨコナデ、体部ナデ。	外面乳茶褐色～黒色 内面乳茶褐色	3mmの石英、長石、チャートを含む	良好	外面体部に黒斑
51	甕 第2 トレンチ 第6層	18.0 —	体部から丸みを持って強く外反する口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ。内面口縁部ヘラケズリ後ヨコナデ、体部ハケ。	乳茶褐色 一部橙色	石英、長石、チャートをわずかに含む	良好	
52	甕 第2 トレンチ 第6層	12.2 —	丸い体部から内に稜を持って外反し、角度を変えて立ち上る口縁部に至る。端部は内傾する面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ(4本／2.2cm)。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	外面淡橙色 内面乳褐色～灰褐色	石英、長石、雲母、赤色酸化粒を含む	良好	
53	甕 第1 トレンチ 第6層	14.8 —	体部から強く外反して口縁部に至る。端部は外上方へ丸くつまみ上げ、外傾する面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ(3本／1.7cm)。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	乳茶褐色	1mm以下の長石、石英を含む	良好	
54	甕 第2 トレンチ 第6層	15.3 —	体部から丸みのある「く」の字形に外反し、口縁部に至る。端部は丸くつまみ上げる。 外面口縁部指押さえ後ヨコナデ、体部右上りタタキ。内面口縁部上半ヨコナデ・下半板状工具によるケズリ、体部ハケ（11本／1.6cm）。	橙色	3～1mmの石英、長石を多量に、雲母、赤色酸化粒をわずかに含む	良好	
55	甕 第1 トレンチ 第6層	15.6 —	体部から「く」の字形に屈曲した後外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	乳褐色	2mm前後の石英、長石、白色細砂粒を多量に含む	良	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
56	甕 第2 トレンチ 第6層	15.0 —	体部から「く」の字形に屈曲して口縁部に至る。端部は器肉を減じて丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ(2条／1cm)。内面口縁端部ヨコナデ、口縁部・体部板状工具によるナデ。	外面褐色～黒色 内面淡茶褐色	5～1mmの石英、1mm前後の長石を多量に含む	良好	
57	甕 第1 トレンチ 第6層	12.8 — 最大径11.0	張りの少い体部から、外折して口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に垂直な面を持つ。 外面口縁部ヨコナデの他不明。内面口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ。	外面乳茶色～黒色 内面乳茶褐色	2mm前後の石英、長石を多量に含む	良好	外面体部下半に煤付着
58	甕 第2 トレンチ 第6層	13.2 —	57に似る。口縁部は上位で内湾ぎみとなり、端部丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部上半左上り・下半右上りタタキ(3本／1.8cm)。内面口縁部ヨコナデ、体部ハケ(12本／1.8cm)。	外面淡赤褐色～黒色 内面淡橙色～淡灰色	石英、長石を含む	良好	外面に煤付着
59	甕 第1 トレンチ 第6層	16.8 — 最大径11.1	57に似る。口縁端部は丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部左上りタタキ、屈曲部にハケ目を残す。体部中位の接合部付近にヘラミガキ状の圧痕を残す。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	外面黒色 内面乳橙色	石英、長石、赤色酸化粒を含む	良好	
60	底部有孔土器 第1 トレンチ 第6層	— — 底径 3.6 孔径 0.9	突出平底の底部から、丸みを持って斜上方に伸びる。孔は焼成前に穿つ。 外面ハケ(12本／1cm)。内面ハケ(9本／1cm)。	乳茶褐色	3～1mmの石英、長石、チャートを含む	良好	
61	底部有孔土器 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 2.6 孔径 1.0	小型で平坦な底部から、斜上方へ直線的に伸びる。孔は焼成前に穿つ。 外面タタキ(1条／1cm)。内面板状工具によるナデ。	外面淡茶褐色～黒色 内面淡茶褐色	2mm前後の石英、長石、白色細砂粒、チャートを含む	良好	
62	甕 第1 トレンチ 第6層	— — 底径 3.2	突出するドーナツ状の底部から、丸みをおびて斜上方に伸びる。 外面右上りタタキ(2条／1.6cm)。内面板状工具によるナデ。	外面乳茶褐色～黒色 内面乳茶褐色	石英、長石、白色砂粒を含む	良好	
63	甕 第1 トレンチ 第6層	— — 底径 4.3	突出するドーナツ状の底部から、斜上方へ伸びる。 外面右上りタタキ。内面くもの巣状のハケ。	赤橙色	5～1mmの石英、長石を多量に含む	良好	黒斑あり

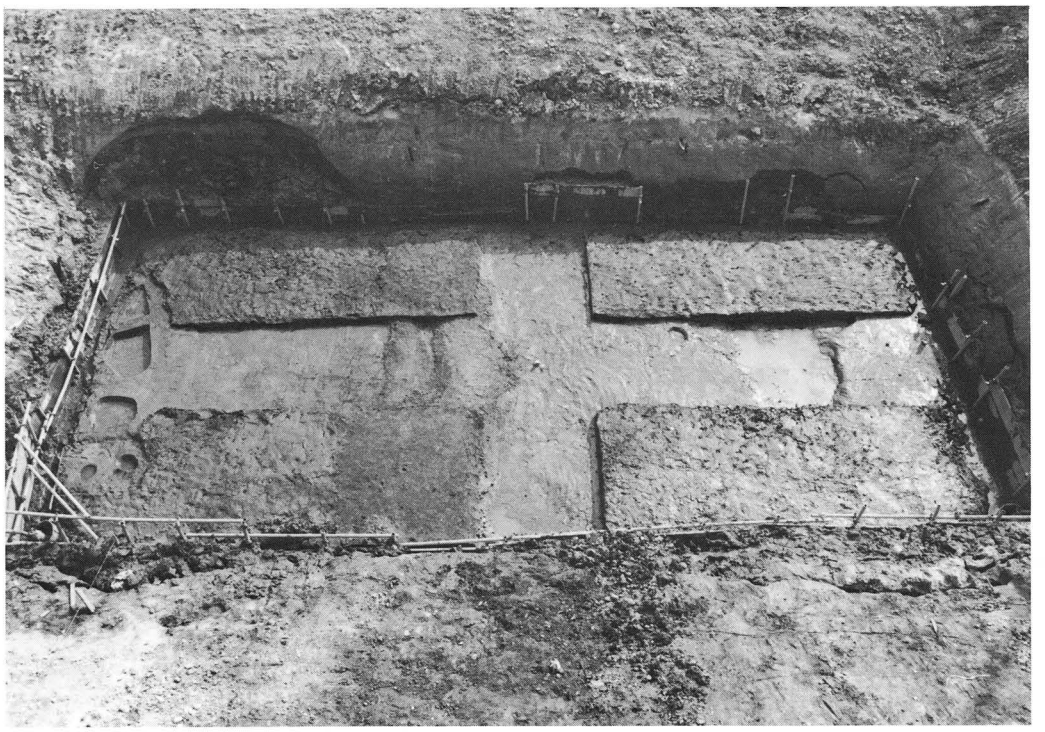
遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
64	甕 第2 トレンチ 第6層	— — 底径	突出する中窪みの底部から、斜上方へ直線的に伸びる。 外面右上りタタキ。内面板状工具によるナデ。	外面淡橙色～褐色 内面灰褐色	石英、長石を多量に含む	良好	
65	甕 第2 トレンチ 第6層	— — 底径 4.0	突出する平底の底部から、丸みをおびて斜上方へ伸びる。 外面右上りタタキ（5条／2.3cm）、底面に板状工具の圧痕。内面板状工具によるナデ(下→上)。	外面褐色～赤橙色 内面乳茶褐色	石英、長石、白色細砂粒を多量に、チャートを少量含む	良好	内面に黒斑？ 外面に煤付着

<古墳時代中期の遺物>

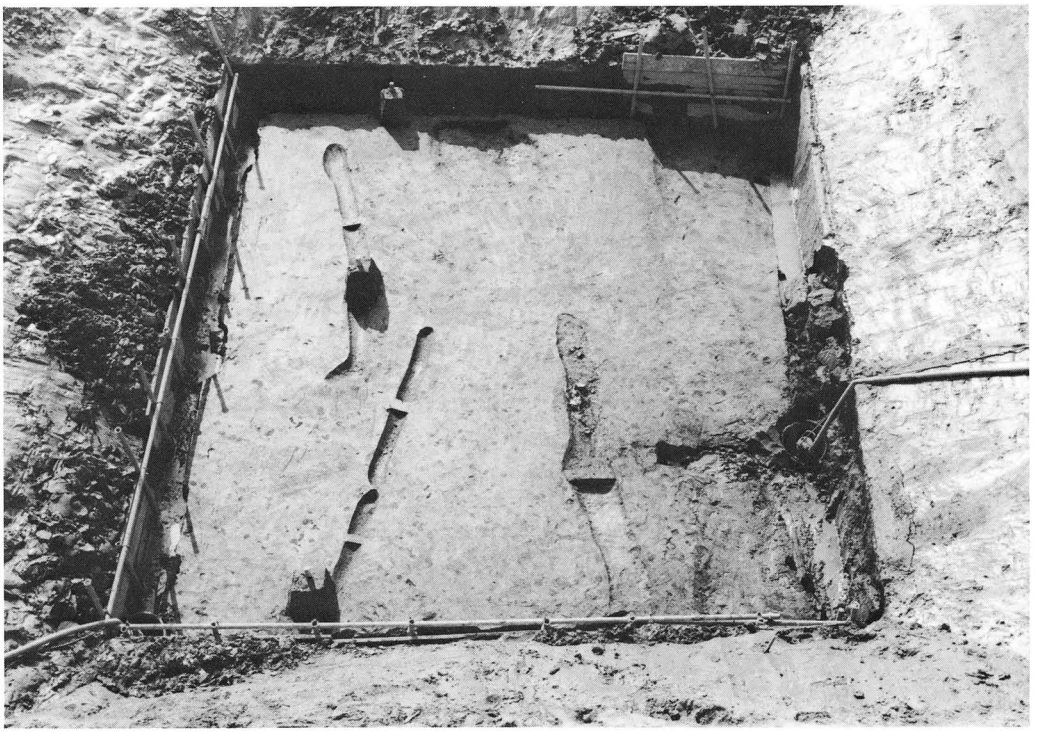
遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
66	甕 第1 トレンチ 第6層	15.0 —	内に鋭い稜を持ち、「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は尖りぎみに終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ（4本／1cm）。内面口縁部ハケ（6本／1.4cm）、体部へラケズリ。	暗褐色	角閃石を多量に含む	良好	
67	甕 第1 トレンチ 第6層	18.6 —	66に似る。 外面口縁部ヨコナデ、体部右上りタタキ(3本／1.8cm)、屈曲部にハケ目残る。内面口縁部ハケ、屈曲部以下1cmまでヨコナデ、体部ハケ。	外面褐色 内面乳茶褐色	白色細砂粒、3mmの石英を含む	良好	
68	甕 第2 トレンチ 第6層	16.3 —	体部から「く」の字形に屈曲した後、内湾して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する面を持ち、内外に肥厚する。 内外面ヨコナデ。	淡橙色	石英、長石粒を含む	良好	
69	甕 第1 トレンチ 第6層	15.8 —	体部からゆるやかに外反して口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ(12条／2.7cm)。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	乳茶褐色	白色細砂粒を含む	良好	
70	甕 第2 トレンチ 第6層	17.0 —	内に鋭い稜を持ち、強く外反して口縁部に至る。 外面体部右上りタタキの後屈曲部に粘土を補足して指押さえの後ナデ、最終的に口縁部ヨコナデ。内面口縁部ハケの後ヨコナデ。	乳灰色	3～1mmの石英、1mmの長石を多量に、チャートをわずかに含む	良好	外面に煤付着

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
71	甕 第1 トレンチ 第6層	18.2 —	丸みをおびた体部から、外反する口縁部に至る。口縁部は中位で器肉を増し、端部丸く終る。	淡橙色	白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	
72	甕 第2 トレンチ 第6層	22.0 —	張りの少い体部から、外反する口縁部に至る。端部尖りぎみに丸く終る。 外面屈曲部から体部上位粗いハケ（7本／2.5㎝）の後下位細かいハケ(10本／1.4㎝)の後口縁部ヨコナデ。内面口縁部ハケの後ヨコナデ、体部ヘラケズリ（右下→左上)。	外面灰褐色 内面乳褐色	石英、長石を含み、赤色酸化粒をわずかに含む	良好	外面口縁部・体部の一部に煤付着
73	甕 第1 トレンチ 第4層	13.6 —	体部から外反ぎみに伸びる短い口縁部に至る。端部尖りぎみに終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部磨耗のため不明。内面口縁部板状工具によるナデの後ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	外面暗赤色～黒色 内面乳茶褐色～黒色	石英、長石を含む	良好	
74	甕 第1 トレンチ 第4層	13.6 —	丸みのある体部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部尖りぎみに丸く終る。 内外面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	灰褐色	石英、長石を含む	良好	
75	甕 第1 トレンチ 第6層	15.4 23.1 最大径22.2	最大径をほぼ中位に持つ体部から、内に稜を持ち外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半指押さえ後ハケ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ（上半左→右・下半下→上)。	灰褐色～淡褐色～黒色	石英、長石の細粒を多量に含む	良好	
76	甕 第1 トレンチ 第6層	16.4 —	体部から内に稜を持って直立ぎみに立ち上り、わずかに外反する口縁部に至る。端部は肥厚ぎみとなり、丸く終る。 外面口縁部指押さえ後ヨコナデ、体部ハケ(12～15本／1㎝)。内面口縁部ヨコナデ（右→左)。	乳茶褐色～黒色	白色細砂粒を含む	良好	外面に煤付着
77	甕 第1 トレンチ 第6層	19.2 — 最大径24.4	張りの少い体部から外傾した後外反する口縁部に至る。端部は丸みのある面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ（12本／1㎝)。内面口縁部板状工具によるナデ後ヨコナデ、体部ヘラケズリ（上半右→左、下半下→上)。	乳橙色	白色砂粒を含む	良好	
78	高杯 第1 トレンチ 第6層	10.6 10.3 裾径 8.6	平坦な杯底部から丸みをおびて直立する。脚部ラッパ状に開き、端部外傾する面を持つ。 外面口縁部ヨコナデ、杯底部ヘラケズリ後ナデ、柱状部ヘラナデ、裾部ナデ。内面杯部板状工具による調整後丁寧なヨコナデ、柱状部しぼり目、裾部に指頭圧痕を残す。	淡橙色	精良 2㎜前後の白色細砂粒、赤色酸化粒、雲母、石英、長石わずかに含む	良好	

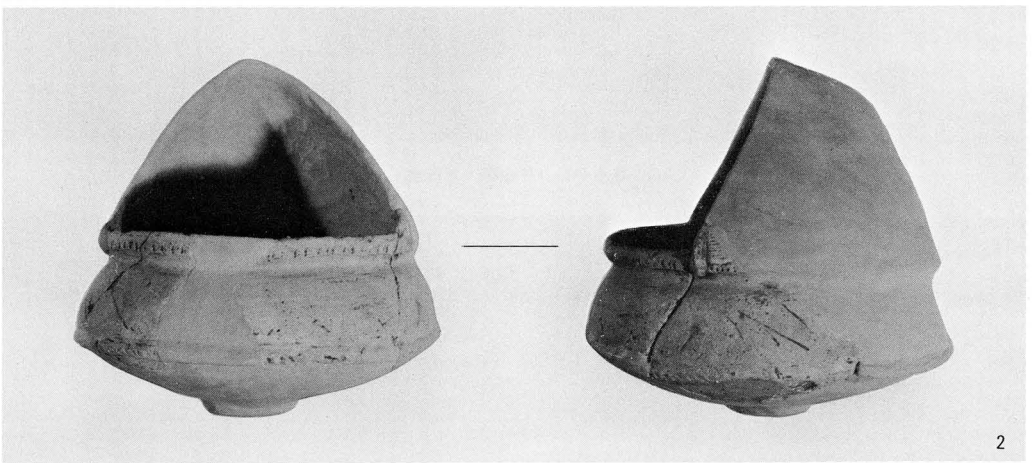
遺物番号	器種 出土地点	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
79	高杯 第1 トレンチ 第6層		13.4 10.4 裾径 8.6	半球形の杯部。脚部は低く、内に稜を持ち裾部に至る。端部は下につまんで終る。 外面杯部ヨコナデ、脚部ヘラナデ、杯部と脚部の接合部に指頭圧痕・ヘラ痕を残す。内面口縁部から体部ヨコナデ、柱状部ケズリ、裾部ヨコナデ。	灰褐色～黒色	石英、長石を含む	良好	外面裾部に黒斑
80	高杯 第1 トレンチ 第6層		12.6 —	浅い半球形の杯部のみ。口縁端部は丸く終る。 外面板状工具によるケズリの後口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	灰褐色～淡橙色	石英、長石、チャートを少量含む	良好	
81	高杯 第1 トレンチ 第6層		— — 裾径 9.0	短い柱状部と大きく開く裾部が遺存する。裾端部は丸く終る。 外面ハケ（3本／1cm）。内面柱状部ケズリ、裾部ハケの後ナデ、一部に粘土を補足してハケ目を残す。	橙色～乳茶褐色	白色細砂粒、5mmの石英を含む	良好	
82	高杯 第1 トレンチ 第6層		— — 裾径 5.5	柱状部から内に稜を持って開き、裾部に至る。端部は器肉を減じて丸く終る。 外面柱状部と裾部の境に指頭圧痕・板状工具痕を残す。内面柱状部ケズリ、裾部ハケ（6本／1.9cm）。	乳橙色	2mmの石英、長石、白色細砂粒、赤色酸化粒、黒色粒を含む	良好	
83	鍋 第1 トレンチ 第6層		25.8 27.6	平底の底部、張りの少い胴部に短く外反する口縁部がつく。端部丸く終る。把手は牛角状で体部上位につく。 外面口縁部ハケの後ヨコナデ、体部ハケ、屈曲部付近に横ハケを残す。把手は上面ハケ、他は指押さえ後ナデ。内面口縁部ハケ（7本／1.5cm）、体部ヘラケズリ（下→上）、底部磨耗のため不明瞭。	灰褐色	石英、長石の細粒を多量に、黒色砂粒を少量含む	良好	把手付近に黒斑
84	須恵器 杯蓋 第1 トレンチ 第4層		13.0 4.0 稜径	低い天井部から、稜を持って垂直に下る口縁部に至る。端部は内に段を持つ。 外面回転ナデ。内面天井部不整方向の静止ナデ、体部・口縁部回転ナデ。	外面緑灰色～灰色 内面灰色	精良、緻密	良好 堅緻	外面天井部に自然釉



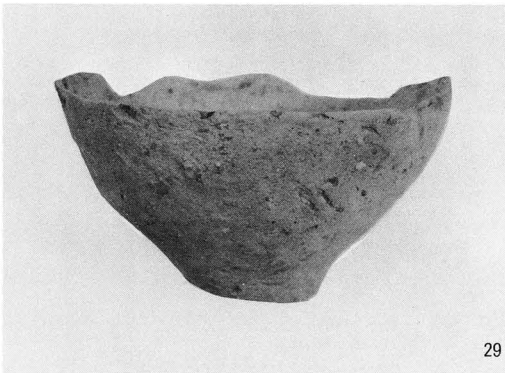
第１トレンチ全景（北から）

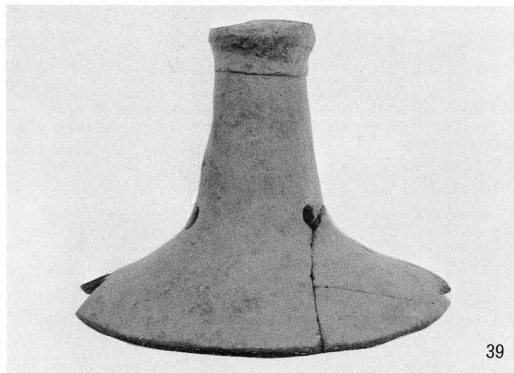


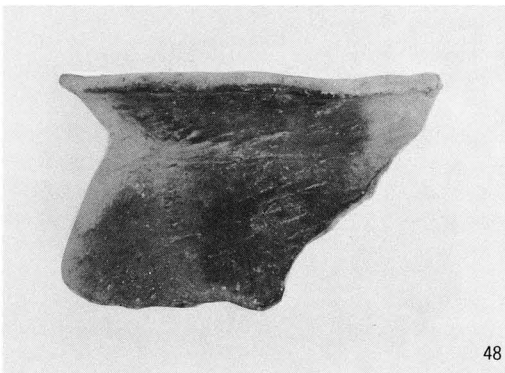
第２トレンチ全景（北から）



出土遺物 1



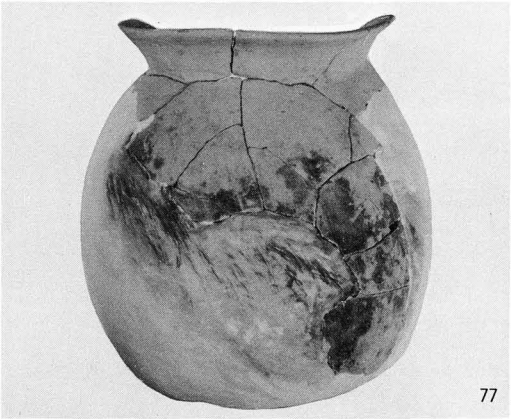




出土遺物 2

75

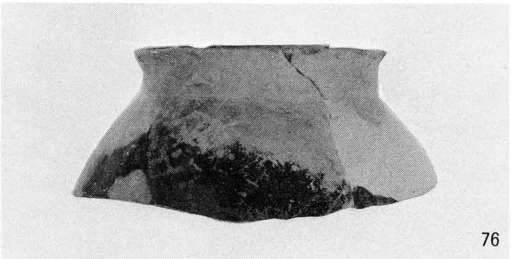
78

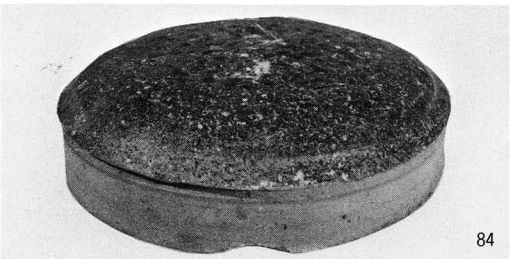

77

79

72

83


76


84

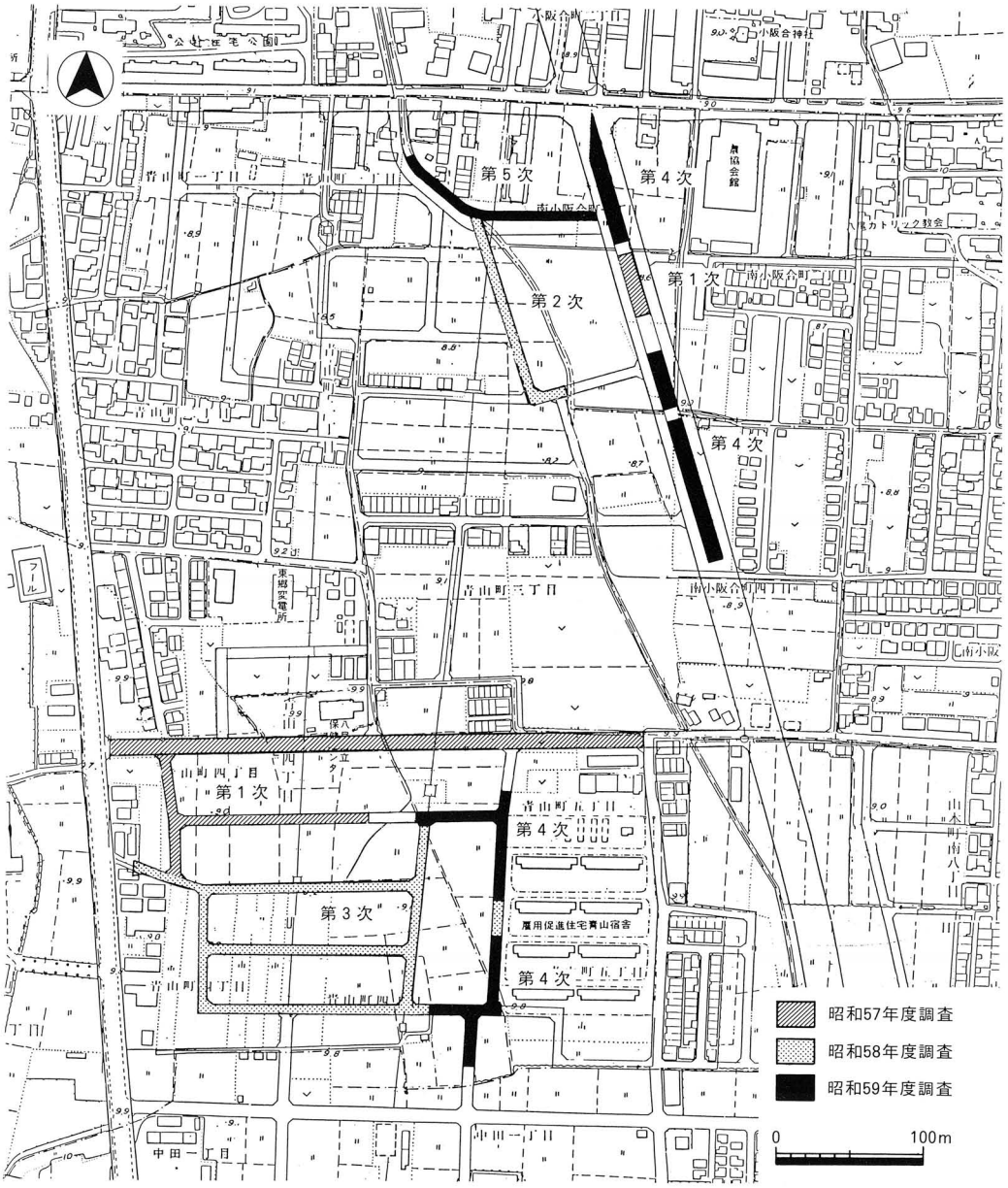
出土遺物 3

4　小阪合遺跡（第４次調査）

調 査 地：青山町・南小阪合町の一部

調査期間：昭和59年６月15日～11月15日

調査面積：1940㎡



調査地周辺図

はじめに

今回の発掘調査は、南小阪合土地区画整理事業計画に伴う昭和59年度の発掘調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第４次調査にあたる。

小阪合遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する遺跡である。同一の沖積地上には、南東から北西に東弓削遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・当遺跡があり、さらに当遺跡の北側に成法寺遺跡・東郷遺跡・萱振遺跡・佐堂遺跡・宮町遺跡・山賀遺跡が位置している。

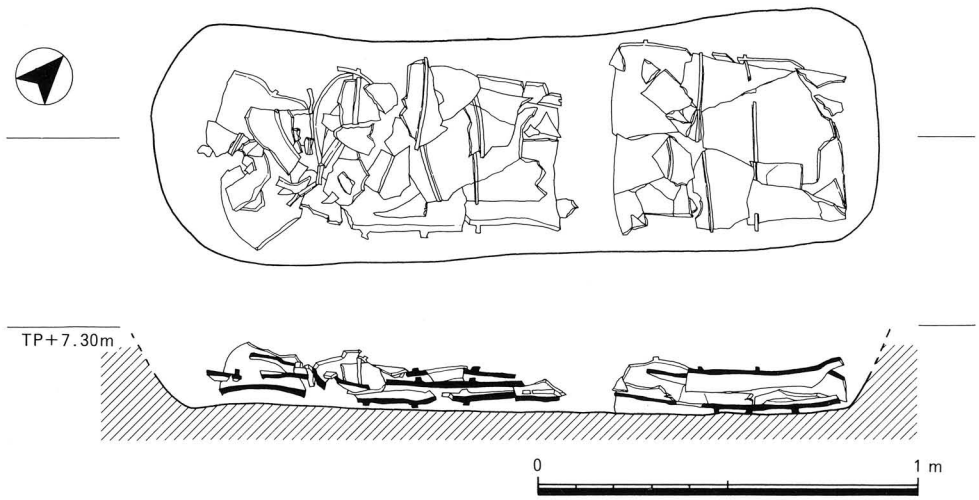
当地区の区画整理事業は昭和57年度より継続しているもので、57年度に第１次調査、58年度に第２次・第３次調査を実施している。第１次～第３次調査では、弥生時代後期から近世に至る遺構・遺物が検出されており、遺跡内での各時期ごとの土地利用の変遷が看取されるようになってきた。

調査概要

当調査地は、第１次・第３次調査地に隣接する調査地で、既往調査と同様計画道路部分にあたる。調査は、計画道路予定地の中央に、幅２～４ｍのトレンチを設定して実施した。調査の結果、弥生時代後期から鎌倉時代に至る遺構・遺物を検出した。

弥生時代後期末の遺構は、表土下1.1ｍ（ＴＰ＋8.20ｍ）付近に堆積する灰褐色砂混粘土層上面を構築面とするもので、落込み状遺構１基を検出している。

古墳時代前期の遺構は、ＴＰ＋8.00ｍ前後に堆積する淡灰茶色砂混粘土層・茶灰色粗砂層上面を構築面としており、井戸・土坑・溝・自然河道を検出している。自然河道は第１次・第３次でも検出したもので、幅100ｍを測り、北西方向に流路を持つものと推定される。



埴輪円筒棺検出状況平断面図

古墳時代中期の遺構は、前期の遺構検出面と同レベルに堆積する茶灰色シルト層上面で、落込み状遺構・土坑・溝・柱穴等を検出している。また北部の調査区では、淡灰青色粘質シルト層上面で、朝顔形埴輪と円筒形埴輪を組合わせた埴輪円筒棺を検出した。内部および周辺から副葬品は検出されなかったが、埴輪の両面には赤色顔料を塗布した部分が認められる。

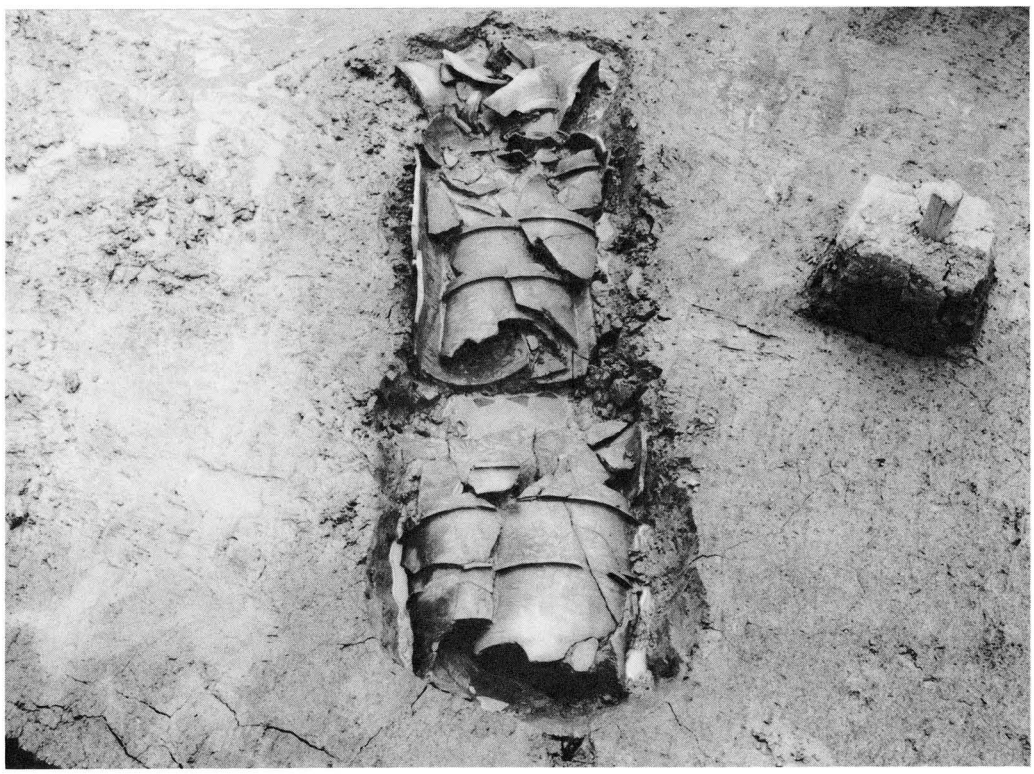
平安時代の遺構には、自然河道があげられる。この自然河道は幅10～20ｍ・深さ0.5～１ｍを測るもので、第１次・第３次調査でも検出されている。

鎌倉時代の遺構は、調査区全域で井戸・溝等が検出されている。

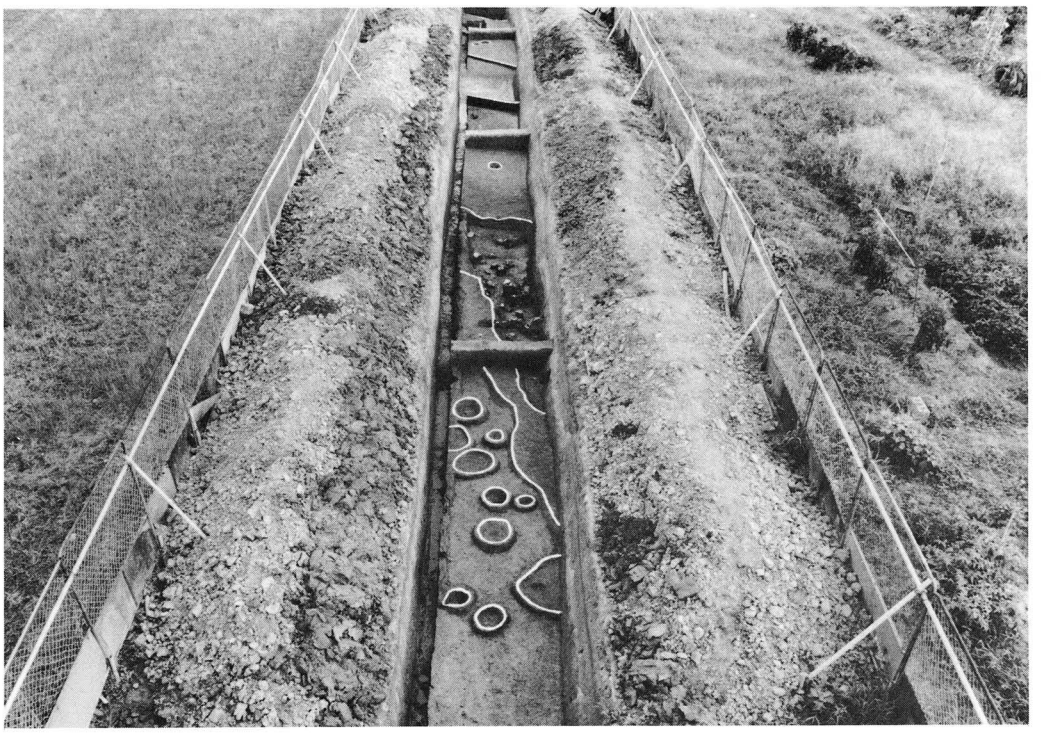
まとめ

当調査は区画整理事業に伴う継続事業で、調査対象地が道路部分であることから、調査区幅が２～４ｍに限定されている。したがって、線的な調査の意味合が強く、各時期ごとの遺跡のあり方も、限定された調査成果から推察せざるを得ないのが現状である。

今回の調査では、弥生時代後期末から近世に至る遺構・遺物を検出し、既往調査と同様の結果が得られた。なかでも、北部の調査区で検出した埴輪円筒棺は、当時の埋葬に対する意識を反映した資料として注目できる。



埴輪円筒棺検出状況



遺構検出状況（北から）

溝内遺物出土状況

5　小阪合遺跡（第５次調査）

調 査 地：南小阪合町１丁目の一部

調査期間：昭和60年１月25日～３月２日

調査面積：636㎡

はじめに

今回の発掘調査は、区画整理事業の一環として計画された、楠根川の仮水路付替工事に先立って実施したもので、小阪合遺跡内の第５次調査にあたる。調査地点は、小阪合遺跡推定範囲の北辺部に位置し、第２次調査地の北部に接している。

調査概要

調査区は幅６ｍ・長さ106ｍを測るが、途中で弓状に屈曲しているため、屈曲部を境として上流側と下流側に区別した。

調査は、八尾市教育委員会文化財室が実施した試掘結果に基づき、盛土および旧耕土を機械掘削し、以下の各層については土層葉理に従って人力掘削を実施し、遺構の検出に努めた。なお調査に際しては、下流調査区の北端から５ｍごとに基準杭を打設し、調査区をａ～ｔに区分した。

調査の結果、弥生時代後期～古墳時代の溝６条、平安時代末期～鎌倉時代前期の井戸２基・溝１条・小穴１個、鎌倉時代前期以降の溝３条を検出した。

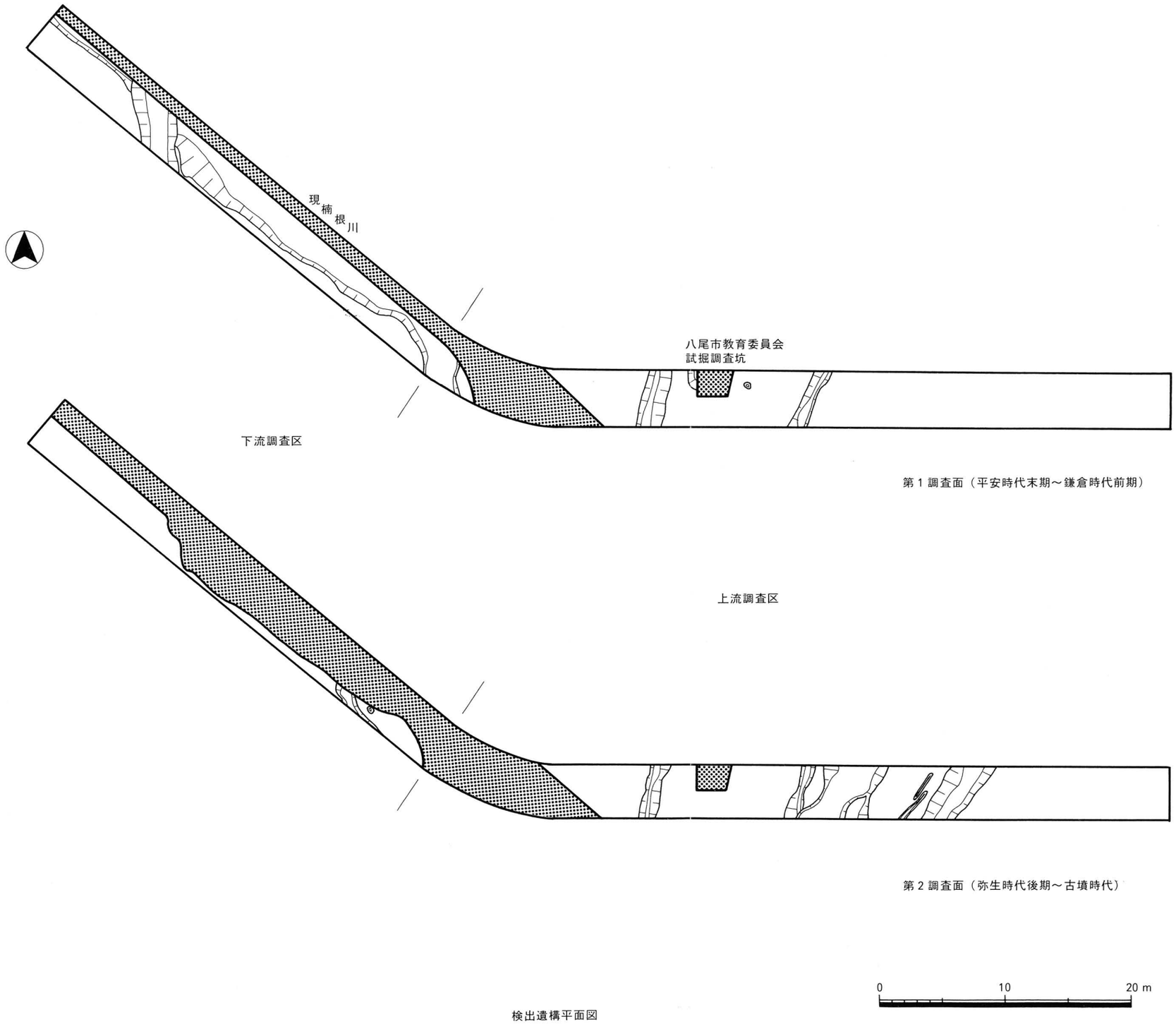
まとめ

今回の調査では、小面積にもかかわらず古墳時代と平安時代～鎌倉時代の遺構が検出され、小阪合遺跡の北辺部の様相を確認することができた。

なかでも上流側で検出した井戸から出土した２点の瓦器椀は、和泉型瓦器椀の最古に比定されるものであり、古代末期の小阪合遺跡の様相を知るうえで貴重な資料を提供している。

下流調査全景（北西から）

上流調査区井戸内遺物出土状況


現楠根川
八尾市教育委員会
試掘調査坑
下流調査区
第1調査面（平安時代末期～鎌倉時代前期）
上流調査区
第2調査面（弥生時代後期～古墳時代）
0
10
20 m

検出遺構平面図

6　東郷遺跡（第18次調査）

調査地：北本町２丁目141

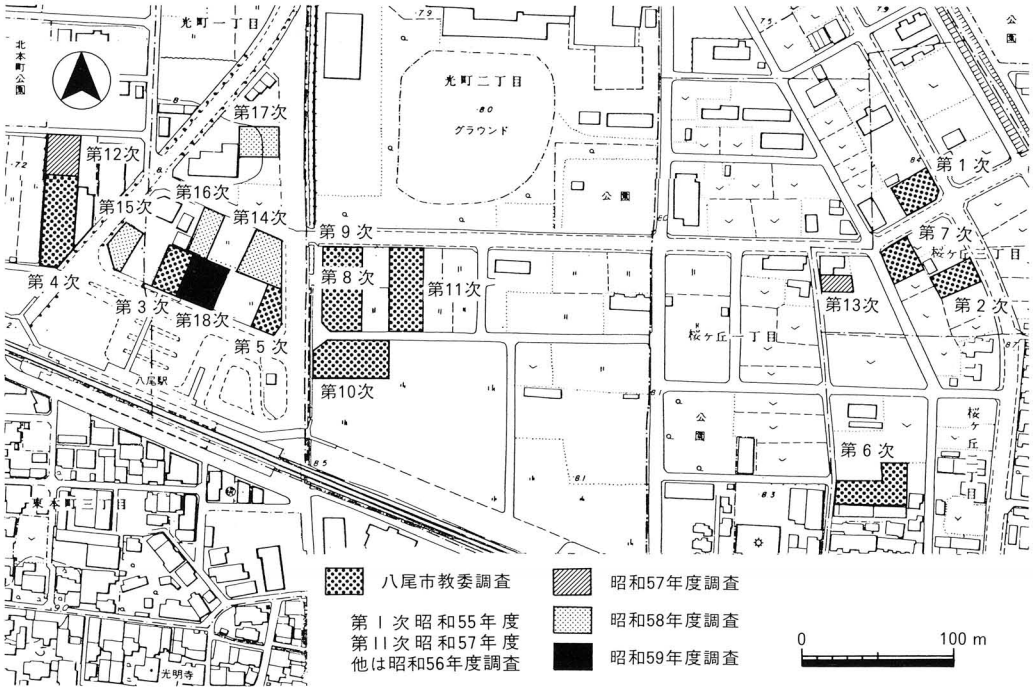
調査期間：昭和59年３月１日～４月10日

調査面積：500㎡

はじめに

今回の発掘調査は、店舗付賃貸共同住宅建設に先立って実施したもので、八尾市教育委員会文化財室・当調査研究会が、東郷遺跡内で実施した発掘調査の第18次調査にあたる。当調査地の東は第５次調査地、北は第14次調査地と接しており、西側に第３次・第16次調査地が位置している。

東郷遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川の沖積作用によって形成された三角州状の低平地に位置している。この低平地は、八尾市域の中央部を南東から北西に広がるもので、弥生時代中期以降の遺跡が爆発的に増加する地域である。この地域には、南東から北西へ東弓削遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・宮町遺跡・佐堂遺跡（美園遺跡）・萱振遺跡・山賀遺跡等が密集して存在している。



調査地周辺図

当遺跡は、八尾市の中心部である北本町・東本町・光町・桜ケ丘一帯に位置しており、昭和53年度以降の近鉄八尾駅前開発を境に各種工事が活発に実施されていることから、それに伴う埋蔵文化財発掘調査も断続的に実施されている。

調査概要

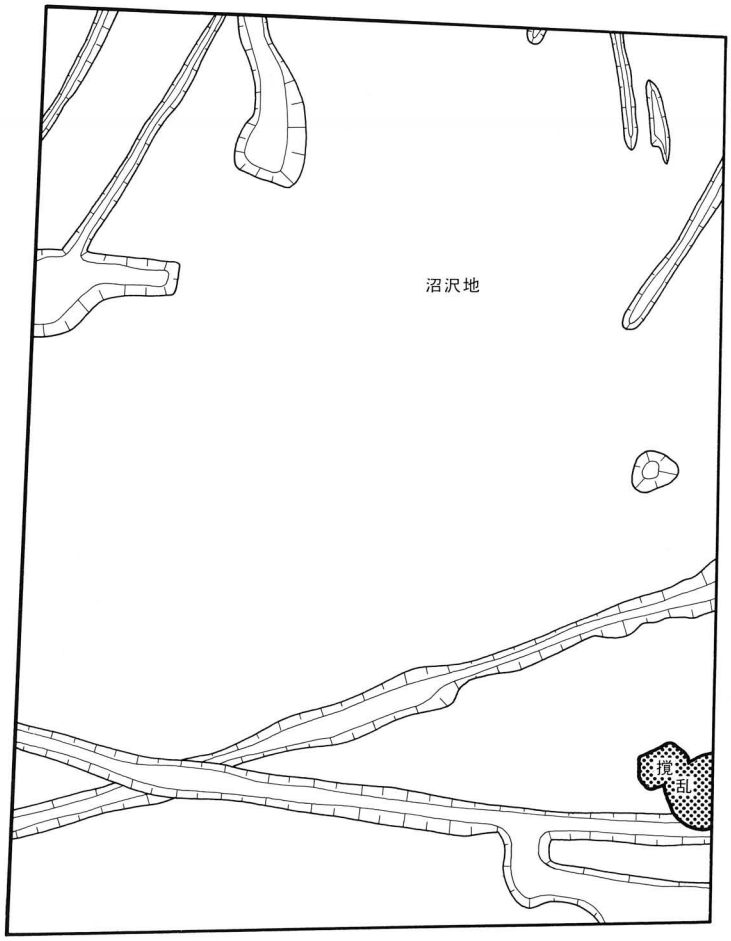
調査に際しては、調査地を東部・西部に分割し、西部を第１調査区・東部を第２調査区と付称した。

調査の結果、現地表下1.7ｍ付近に堆積する淡灰黄色～青灰色シルト上面（ＴＰ＋6.50ｍ）で、古墳時代前期の井戸・溝・落込みを検出した。なお、遺構は調査区の南部と北部に分散しており、遺構の検出が認められなかった中央部は、その堆積状況からみて西側一帯に広がっていたと推定される沼沢地の一部と考えられる。遺物は、各遺構から庄内式に比定される壷・甕・高杯・鉢等が多量に出土している。

まとめ

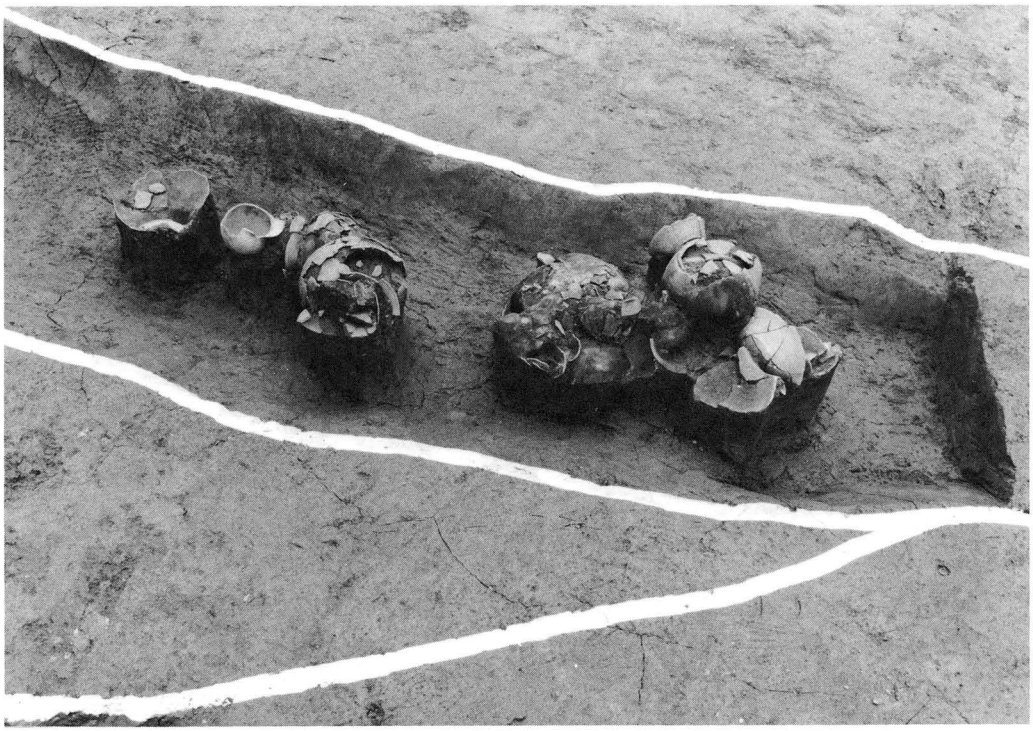
今回の調査地は、古墳時代の集落遺構を検出した第５次・第14次調査地に隣接しており、東郷遺跡の西部の様相を知るうえで注目された。調査の結果、既往調査の結果と同様古墳時代前期の集落遺跡とともに、沼沢地を検出した。一方、第５次・第10次調査地で検出した自然河道の右岸を当調査地の南部でも検出しており、今回検出した沼沢地は、その河道に付随した性格のものと考えられる。

以上の調査成果から東郷遺跡の古墳時代前期の景観を推察すれば、自然河道の北側一帯に集落遺構が広がっており、当調査地を境として西側一帯は沼沢地であったようである。なお、北部に位置する第17次調査地では、同時期の方形周溝墓１基が検出されており、当遺跡の北部には墓域が存在していたことが判明している。

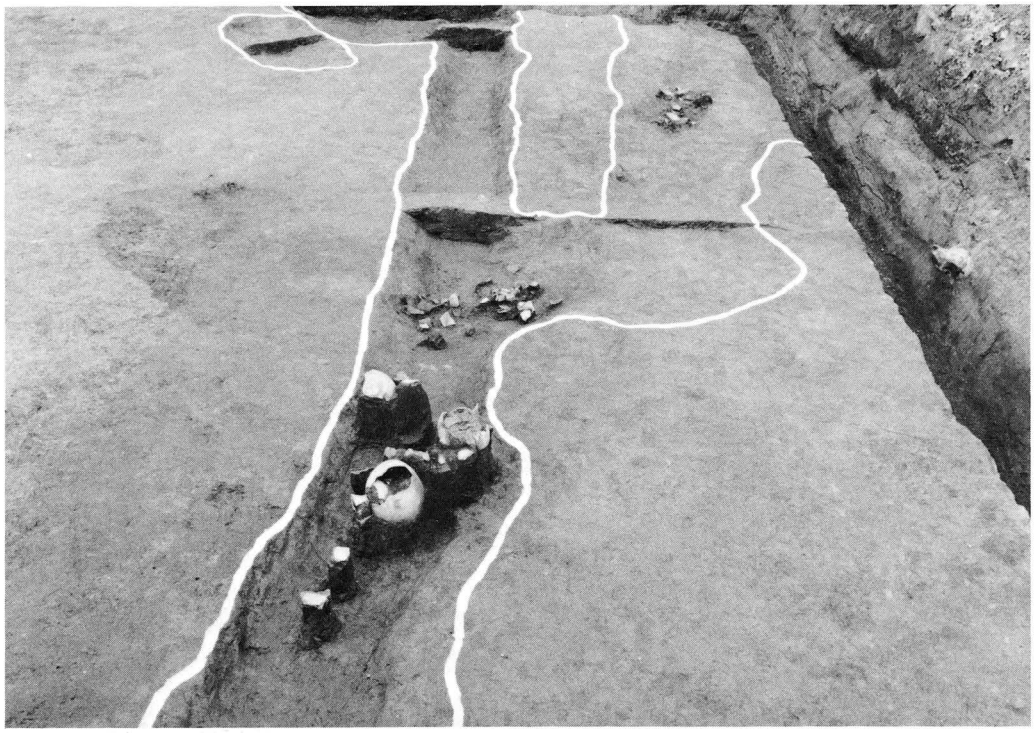


0　10m

検出遺構平面図



第 1 調査区溝内遺物出土状況（南から）



第 2 調査区溝内遺物出土状況（西から）

7　久宝寺遺跡（第１次調査）

調 査 地：北亀井町３丁目１

調査期間：４月２日～６月25日

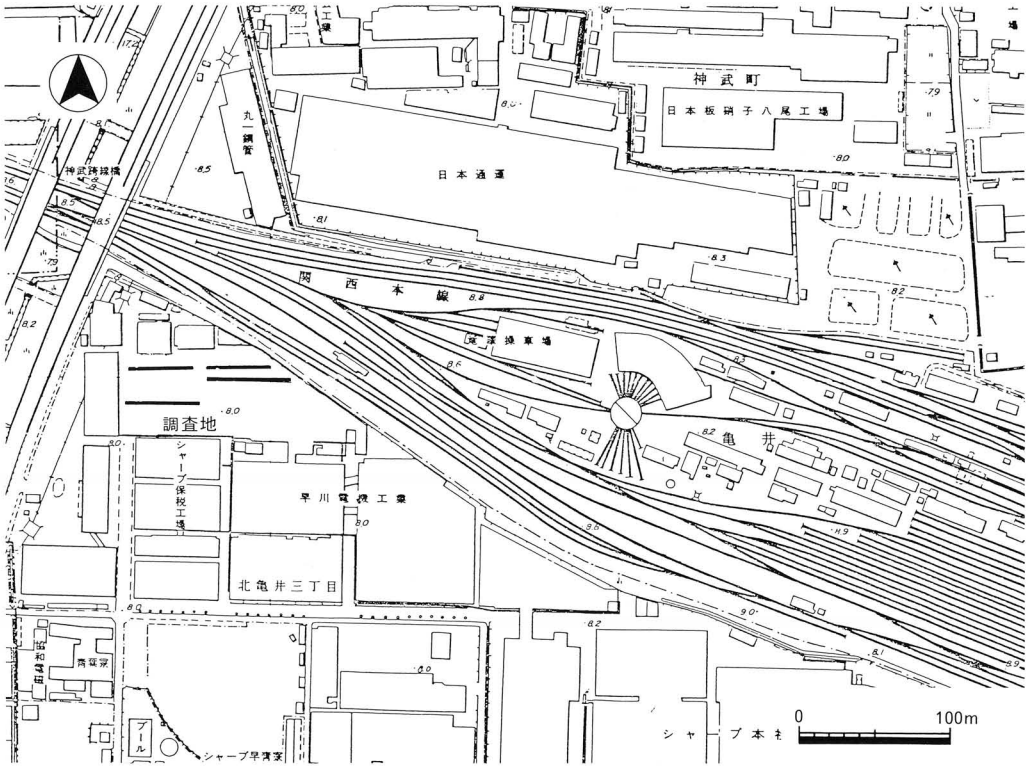
調査面積：792㎡

はじめに

今回の発掘調査は、工場建設に先立って実施したもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で始めて実施した発掘調査である。

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川左岸に位置し、中世には橘島と呼ばれた地域に属している。調査地の付近には、鎌倉時代から法燈を燈す真観寺および、発掘調査で確認された釈迦寺跡が存在している。また、近年の発掘調査によって、弥生時代から鎌倉時代に至る遺構・遺物が付近一帯で確認されており、早くから開発された地域であることが判明している。

なお、当遺跡周辺には、跡部遺跡・亀井遺跡・竹渕（たこち）遺跡・太子堂遺跡・植松遺跡等が同様の条件で立地している。



調査地周辺図

調査概要

調査対象地に４箇所の調査区を設定し、第１トレンチ～第４トレンチと付称して、調査を実施した。

・第１トレンチ（43×４ｍ）

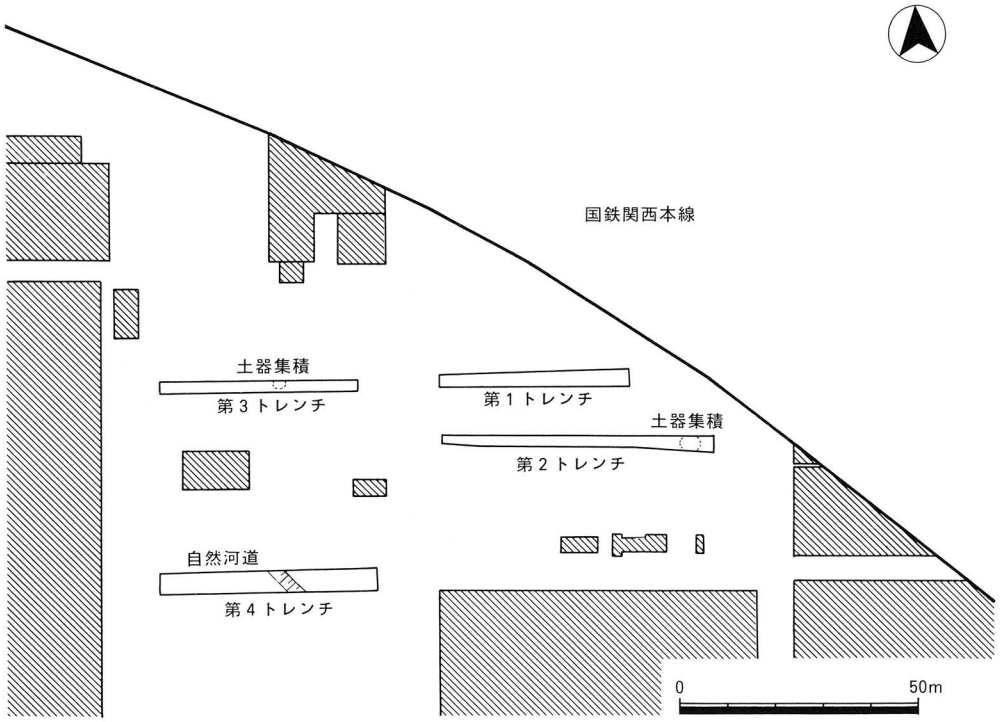
現地表下0.9～1.0ｍ（ＴＰ+6.80ｍ）付近に堆積する灰茶色砂質土層中で、奈良時代～鎌倉時代の土師器・須恵器等の細片を検出した。そこで、同時代の遺構を確認する目的で調査を実施したが、遺構の存在は認められなかった。

灰茶色砂質土層より0.7～0.8ｍ下層に堆積する灰青色粘土層中でも、古墳時代前期の遺物が少量出土したが、上層と同様遺構の存在は認められなかった。

・第２トレンチ（62×４ｍ）

現地表下0.85～1.1ｍ（ＴＰ+6.75ｍ）付近で、第１トレンチ同様奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層を確認することができ、包含層の南への広がりを知ることができた。

そこより0.7～0.8ｍ下層に堆積する灰黒色粘土層は、古墳時代前期の遺物包含層で、層中から多量の土器類が出土している。とくにトレンチ東部では、土器類が一箇所に集積する形で出土している。



調査区設定図

土器集積：約60個体分の土器で構成されており、東西約５ｍの範囲にわたって広がっている。器種には二重口縁壷・小型壷の割合が多く、甕は少ない。完形の土器で見る限りでは、口縁部を上にしたものが多く、意識的に設置したものと考えられる。なお、明瞭は掘形は確認できず、遺構の性格も不明な点が多い。

・第３トレンチ（44×４ｍ）

現地表下2.1ｍ付近に堆積する暗灰色粘土層上面（ＴＰ＋5.60ｍ）で、第２トレンチと同様の土器集積を検出した。なお、当トレンチでは、奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層は認められなかった。

土器集積：トレンチ中央部東寄りで検出した。約20個体分の土器が、東西2.5ｍ程度の範囲に広がっている。検出状況や器種構成、および明瞭な掘形が認められないこと等は、第２トレンチの土器集積と共通した特徴を示している。

・第４トレンチ（49×４ｍ）

当トレンチも第３トレンチと同様、奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層は認められなかった。また、調査途中で自然河道を検出したため、遺跡の立地条件と自然河道との関係を明確にすることに重点を置き、調査を実施した。

自然河道：トレンチ東端より17ｍの地点で**自然河道**の右岸を検出した。現状で幅30ｍ以上・深さ1.4ｍ以上を測る。内部には粗砂・細砂・シルトの３層が堆積しており、水量が多大で、水流の早い河道であったことが窺[註]える。なお、この河道の埋没時期は、内部に含まれる土器類から、古墳時代前期に比定できる。

まとめ

調査の結果、第２トレンチ・第３トレンチで古墳時代前期の**土器集積**、第４トレンチで同時期に埋没した**自然河道**を検出した。

土器集積の器種構成は、ともに完形あるいは完形に近い二重口縁壷が半数以上を占め、甕は希少である。また、何らかの意図を持って土器を設置したことが明らかで、祭祀に関係した遺構であると考えられる。

自然河道は北西への流路を持つ大規模なもので、出土遺物から古墳時代前期に埋没したことが推定でき、それ以前の時期の旧大和川の一つの流れであろうと考えられる。

註

脱稿後、当調査地西側で（財）大阪文化財センターが実施している亀井北遺跡（その１）の調査地を、技師小野久隆・服部文章氏から実見させていただいた。その結果、同一の河道の西の延長を確認することができたが、ここでは幅10ｍ・深さ２ｍの規模で東西方向に伸びている。この検出状況から考えれば、第４トレンチが河道とほぼ平行に位置する可能性があり、正確な数値は得られていないと考えられる。

第 2 トレンチ土器集積（西から）

第 3 トレンチ土器集積（北から）

8　弓削遺跡（第１次調査）

調 査 地：志紀町南２丁目74～76

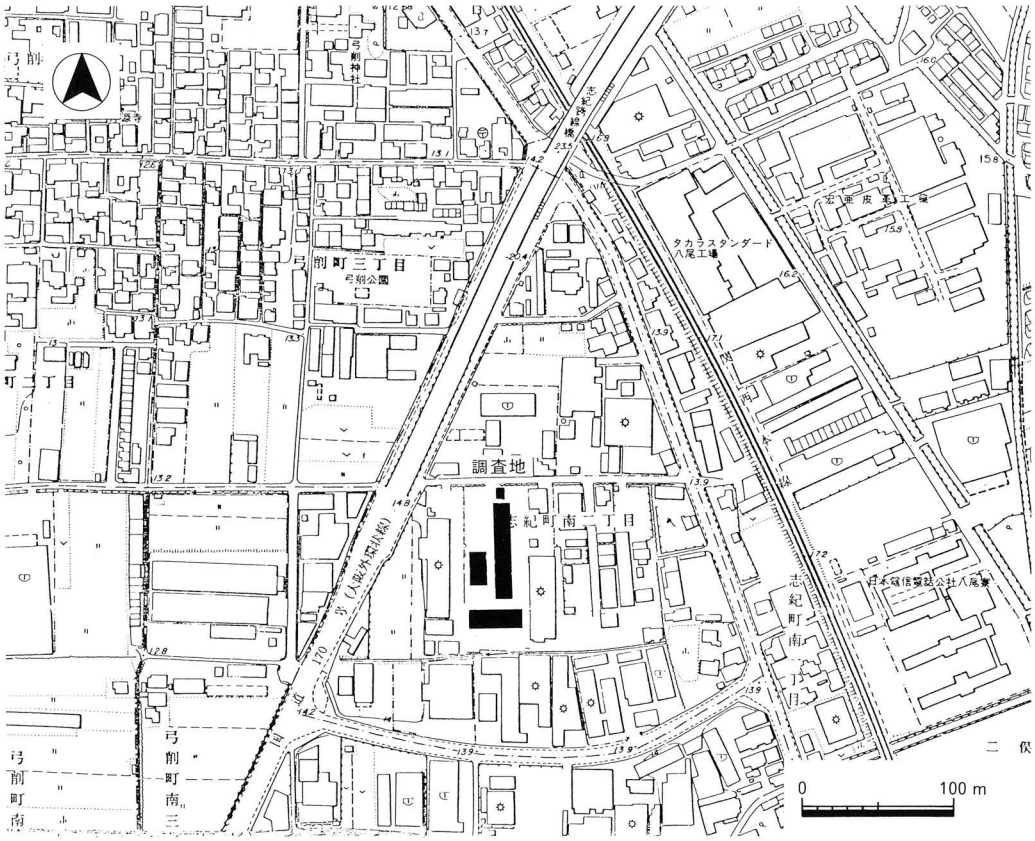
調査期間：昭和59年４月２日～７月27日

調査面積：1260㎡

はじめに

当調査は、共同住宅建設に先立って実施したもので、当調査研究会が弓削遺跡内で始めて実施した発掘調査である。

弓削遺跡は、八尾市南西部の志紀町南を中心に所在し、旧大和川の主流である長瀬川が玉串川と分岐する地点の左岸一帯に広がる自然堤防上に位置する。当遺跡周辺には、西に田井中遺跡・木の本遺跡、南に本郷遺跡（柏原市）・船橋遺跡（同）・川北遺跡（藤井寺市）、北に長瀬川を挟んで東弓削遺跡が位置している。



調査地周辺図

調査概要

共同住宅の建築物および一連の施設である浄化槽・防火水槽にあわせて、４箇所の調査区を設定し、Ａトレンチ～Ｄトレンチと付称した。

調査は、八尾市教育委員会文化財室の試掘結果に従って、現地表から1.6ｍまでは機械掘削を行い、以下の各層は人力掘削によって遺構面の検出に努めた。調査の結果、Ａトレンチで３時期、Ｂ・Ｃトレンチで２時期の遺構を検出した。

・Ａトレンチ（12×22ｍ）

浄化槽の構築予定地に設定したトレンチである。調査の結果、現地表下1.9ｍ付近で奈良時代、以下0.1ｍで古墳時代後期、以下0.4ｍで弥生時代後期の遺構を検出した。

＜第１調査面＞

淡茶褐色細砂混粘質土層上面（ＴＰ＋12.00ｍ）で、奈良時代の溝15条を検出した。これらの溝は東西方向・南北方向に伸びるもので、前者は11条、後者は４条検出した。前者は幅0.2～0.4ｍ・深さ0.1～0.2ｍ、後者は幅0.2～0.3ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測り、南北溝が東西溝を切る関係にある。内部からは土師器・須恵器の細片が少量出土しているだけで、形状から農耕に関連する溝と推定される。

＜第２調査面＞

奈良時代の遺構面から約0.1ｍ下部では、南西から北東に伸びる２条の溝を検出した。これらの溝は幅0.5～1.0ｍ・深さ0.1～0.15ｍを測るもので、遺物が出土していないために時期は明瞭にし難いが、上面に堆積する土層から古墳時代後期の遺構と考えられる。

＜第３調査面＞

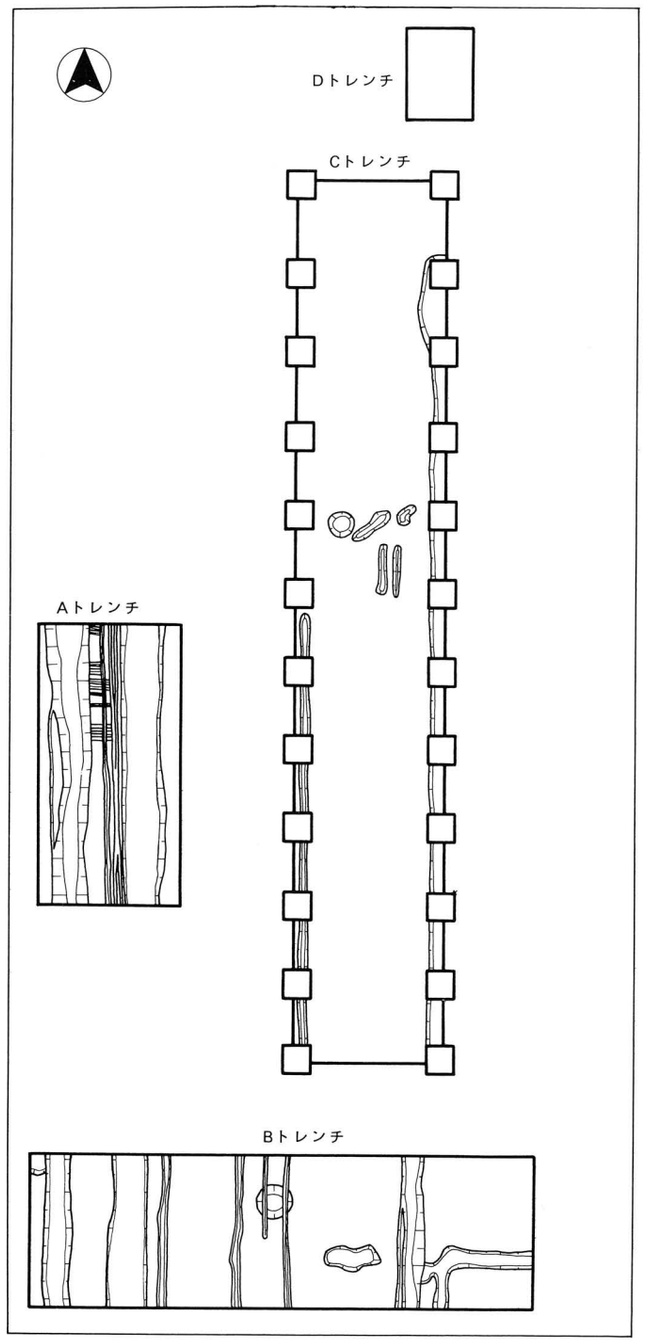
弥生時代後期の遺構は、第２調査面より約0.4ｍ下部に堆積する灰茶青色シルト混粘質土層上面（ＴＰ＋11.50ｍ）を構築面とするもので、溝１条を検出した。この溝は、調査区中央を南北方向に伸びるもので、幅3.5～４ｍ・深さ1.2～1.5ｍを測る。内部堆積土は、上層より茶褐灰色細砂混粘土・暗灰黒色粘土・灰青茶色シルト混粘土の３層からなる。暗灰黒色粘土層からは、弥生時代後期に比定される土器類がきわめて密集した状態で出土しており、この溝内だけでコンテナ約150箱分が出土している。

・Ｂトレンチ（36×13ｍ）

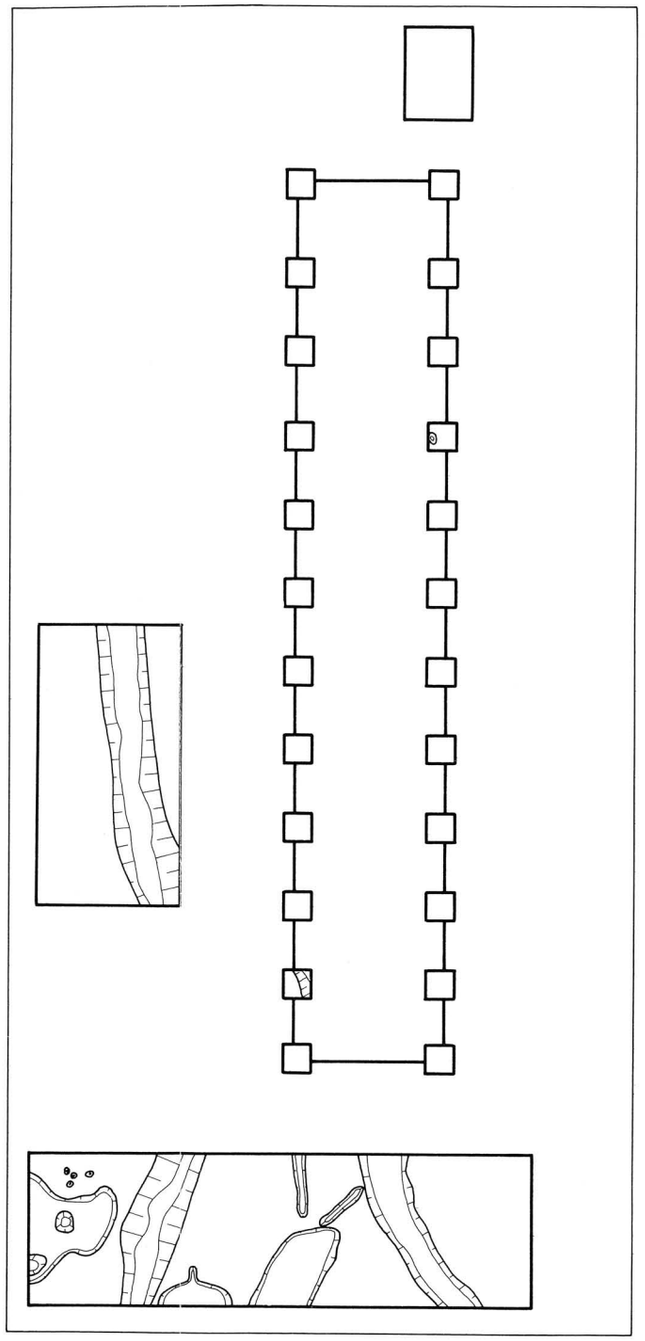
調査地の南部に設定したトレンチである。当トレンチでは、ＴＰ＋12.00ｍ前後で奈良時代の遺構を検出し、ＴＰ＋11.50ｍ前後で弥生時代中期～後期の遺構を検出した。前者はＡトレンチの第１調査面に、後者は第３調査面に対応する。

＜第１調査面＞

奈良時代の遺構は、Ａトレンチと同様現地表下1.9ｍ付近に堆積する淡茶褐色細砂混粘質土



第１調査面（奈良時代）



第２・第３調査面（弥生時代後期）

0　10　20 m

検出遺構平面図

層の上面を構築面とするもので、井戸２基・溝９条・土坑１基を検出した。

井戸には横板井籠組井戸と素掘井戸の２種がある。横板井籠組井戸は深さ1.7ｍを測るもので、上部井戸側と下部井戸側の二重構造である。下部井戸側は、長辺0.4ｍ・短辺0.2ｍ・厚さ２～３㎝を測る板材４枚を井籠組したものを３段に重ねたもので、水溜の機能を果している。上部井戸側は、長辺0.6ｍ・短辺0.3ｍ・厚さ２～３㎝を測る板材を井籠組したものを、下部と同様３段に重ねている。内部堆積土は、上層より茶褐色細砂混粘土・暗灰色粘土・暗灰青色粘土・灰青色粘土・暗灰褐色粘土で、層中から須恵器杯身の破片が出土している。

一方、溝は大半が南北方向に伸びるもので、形状・方向等からＡトレンチで検出した溝と同様の性格を帯びたものと推定される。

＜第２調査面＞

弥生時代中期～後期の遺構は、現地表下2.4ｍ付近に堆積する灰茶青色シルト混粘質土層上面で、井戸２基・土坑３基・溝４条・小穴４個を検出した。

・Ｃトレンチ（12×64ｍ）

調査地の中央部に設定したトレンチである。当トレンチは、当初Ａ・Ｂトレンチ同様、全面発掘調査を予定していた。しかし、Ａトレンチで検出した溝から出土した膨大な量の土器の取上げに多くの日数を費やしたため、計画した日程内での調査の遂行が危惧される状況となった。そのため、当調査研究会はこれまでの調査経過から考えて、調査日程の延長が必要不可欠である旨を八尾市教育委員会文化財室に昭和59年６月11日付で中間報告を提出し、行政判断を仰いだ。その結果、当初の調査日程を尊重した調査を継続する旨の解答が口頭で指示された。そこで、奈良時代の遺構面まで全面発掘調査を実施したが、それ以下については止むを得ず５×５ｍのグリッドを24箇所設定するという変則的な調査方法を実施せざるを得なかった。

調査の結果、Ｂトレンチ同様ＴＰ＋12.00ｍで奈良時代、ＴＰ＋11.50ｍで弥生時代の遺構を検出した。

＜第１調査面＞

奈良時代の遺構はＡ・Ｂ両トレンチと同様、淡茶褐色細砂混粘質土層上面を構築面とするもので、井戸１基・土坑２基・溝４条を検出した。

とくに井戸は、Ｂトレンチで検出した井戸と同様の横板井籠組井戸である。井戸側は、長辺0.8ｍ・短辺0.3ｍ・厚さ２～３㎝の板材４枚を井籠組したものを、５段以上重ねている。ただ、調査中約２ｍを掘削したところで井戸側が崩れ、調査を打切ったため、深さや井戸側の段数等の詳細は不明である。なお、井戸組に際しては、板材の端をＬ字形に切込む２枚の板材を東と西に置き、南と北には未加工の板材を置くもので、四隅には丸木の４分の１を切取った隅柱を外側にあてて固定している。内部堆積土は、上層から灰黒色礫混粘土・灰青色細砂混粘土

層の上面を構築面とするもので、井戸２基・溝９条・土坑１基を検出した。

井戸には横板井籠組井戸と素掘井戸の２種がある。横板井籠組井戸は深さ1.7ｍを測るもので、上部井戸側と下部井戸側の二重構造である。下部井戸側は、長辺0.4ｍ・短辺0.2ｍ・厚さ２～３㎝を測る板材４枚を井籠組したものを３段に重ねたもので、水溜の機能を果している。上部井戸側は、長辺0.6ｍ・短辺0.3ｍ・厚さ２～３㎝を測る板材を井籠組したものを、下部と同様３段に重ねている。内部堆積土は、上層より茶褐色細砂混粘土・暗灰色粘土・暗灰青色粘土・灰青色粘土・暗灰褐色粘土で、層中から須恵器杯身の破片が出土している。

一方、溝は大半が南北方向に伸びるもので、形状・方向等からＡトレンチで検出した溝と同様の性格を帯びたものと推定される。

＜第２調査面＞

弥生時代中期～後期の遺構は、現地表下2.4ｍ付近に堆積する灰茶青色シルト混粘質土層上面で、井戸２基・土坑３基・溝４条・小穴４個を検出した。

・Ｃトレンチ（12×64ｍ）

調査地の中央部に設定したトレンチである。当トレンチは、当初Ａ・Ｂトレンチ同様、全面発掘調査を予定していた。しかし、Ａトレンチで検出した溝から出土した膨大な量の土器の取上げに多くの日数を費やしたため、計画した日程内での調査の遂行が危惧される状況となった。そのため、当調査研究会はこれまでの調査経過から考えて、調査日程の延長が必要不可欠である旨を八尾市教育委員会文化財室に昭和59年６月11日付で中間報告を提出し、行政判断を仰いだ。その結果、当初の調査日程を尊重した調査を継続する旨の解答が口頭で指示された。そこで、奈良時代の遺構面まで全面発掘調査を実施したが、それ以下については止むを得ず５×５ｍのグリッドを24箇所設定するという変則的な調査方法を実施せざるを得なかった。

調査の結果、Ｂトレンチ同様ＴＰ＋12.00ｍで奈良時代、ＴＰ＋11.50ｍで弥生時代の遺構を検出した。

＜第１調査面＞

奈良時代の遺構はＡ・Ｂ両トレンチと同様、淡茶褐色細砂混粘質土層上面を構築面とするもので、井戸１基・土坑２基・溝４条を検出した。

とくに井戸は、Ｂトレンチで検出した井戸と同様の横板井籠組井戸である。井戸側は、長辺0.8ｍ・短辺0.3ｍ・厚さ２～３㎝の板材４枚を井籠組したものを、５段以上重ねている。ただ、調査中約２ｍを掘削したところで井戸側が崩れ、調査を打切ったため、深さや井戸側の段数等の詳細は不明である。なお、井戸組に際しては、板材の端をＬ字形に切込む２枚の板材を東と西に置き、南と北には未加工の板材を置くもので、四隅には丸木の４分の１を切取った隅柱を外側にあてて固定している。内部堆積土は、上層から灰黒色礫混粘土・灰青色細砂混粘土

で、内部から土師器甕・鉢の他、墨書人面土器・神功開宝が出土している。

＜第２調査面＞

弥生時代の遺構は、溝１条・小穴１個を検出しているが、グリッド調査で検出した遺構であり、詳細は不明である。

・Ｄトレンチ（6.5×8.5ｍ）

調査地北側の防火水槽構築予定地に設定したトレンチである。調査の結果、奈良時代の遺構面を覆う灰茶色細砂層から土師器の細片が少量出土した他は、遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ

今回の調査は、弓削遺跡内で初めて実施したものである。調査の結果、弥生時代中期から奈良時代に至る遺構・遺物を検出したことから、当遺跡が複合遺跡であることが判明した。

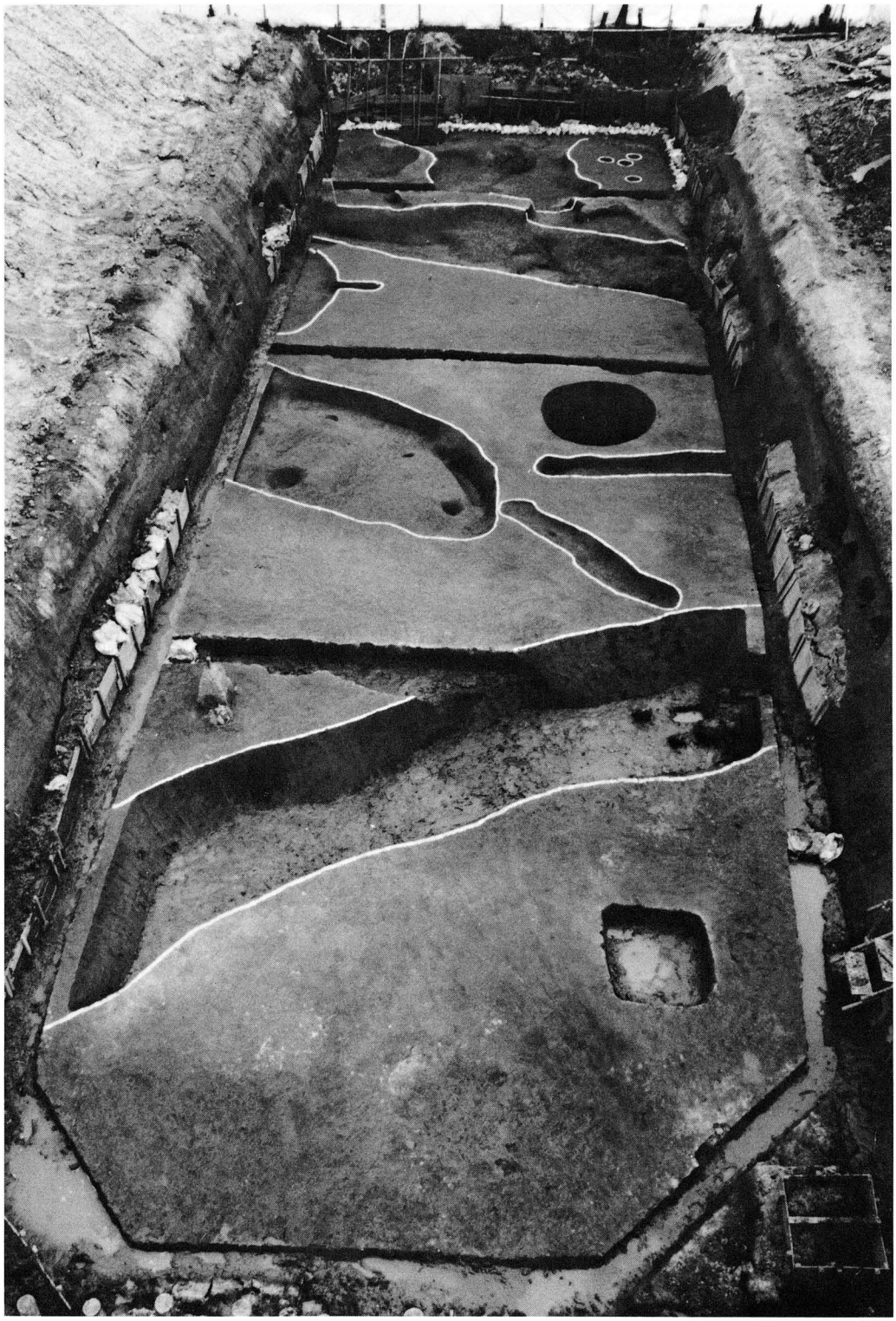
なかでも、Ａトレンチで検出した弥生時代後期の溝から出土した多量の土器群は、河内平野南東部の第Ｖ様式の土器を考察するうえで良好な資料といえる。さらに、Ｃトレンチの井戸から出土した奈良時代の墨書人面土器は、当時の精神文化を示す資料の一つとして注目できる。

Ａトレンチ第１・第２調査面全景（北から）

Aトレンチ第3調査面全景（北から）

Aトレンチ第3調査面溝内遺物出土状況

Bトレンチ第1調査面全景（東から）



Bトレンチ第2調査面全景（東から）

Cトレンチ全景（北から）

9　田井中遺跡（第２次調査）

調 査 地：空港１丁目81

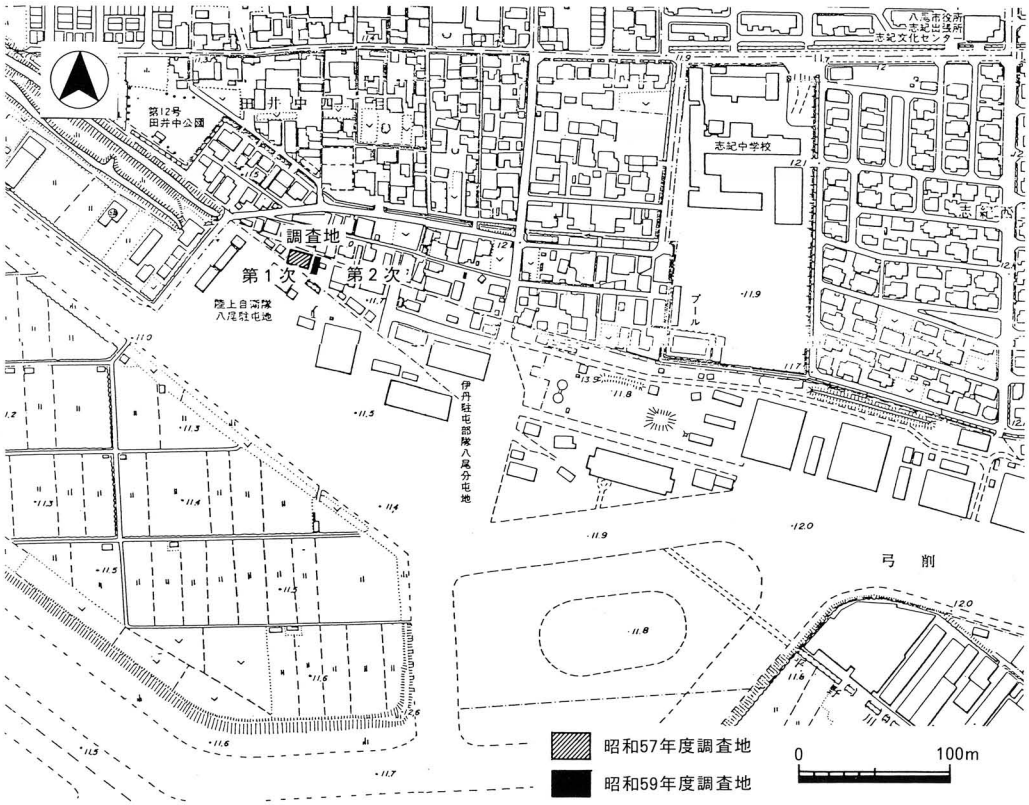
調査期間：昭和57年10月15日～10月26日

調査面積：155㎡

はじめに

今回の発掘調査は、陸上自衛隊八尾駐屯地内で予定された需品整備工場の建設に先立って実施した調査で、田井中遺跡内の第２次調査にあたる。当調査地は、昭和57年度に実施した第１次調査地の東隣に位置する。

田井中遺跡は、八尾市南部の田井中４丁目を中心に広がる弥生時代前期から古墳時代前期に至る遺跡である。当遺跡は、旧大和川の支流であった平野川流域の低湿地に位置する遺跡で、周辺には、東に弓削遺跡、西に木の本遺跡、南に川北遺跡（藤井寺市）、北に老原遺跡が位置している。



調査地周辺図

当地域は、以前陸上自衛隊八尾駐屯地内での工事掘削の際、弥生時代前期の土器が出土したことから、遺跡の存在が認識されていたが、その詳細は不明であった。ところが、昭和57年８月に実施した第１次調査では、遺構としては柱穴１個を検出したのみであったが、弥生時代前期から古墳時代中期に比定される多量の土器類が出土したことから、付近一帯に集落が存在する可能性が強くなった。今回の調査地は、第１次調査地の東に隣接しており、遺構・遺物の検出が期待された。

調査概要

需品工場の建築予定地にあわせて、10×15.5ｍの調査区を設定した。調査に際しては、現地表下約2.3ｍまでを機械掘削し、以下0.4ｍの厚さを測る遺物包含層および遺構面までは、人力によって掘削した。

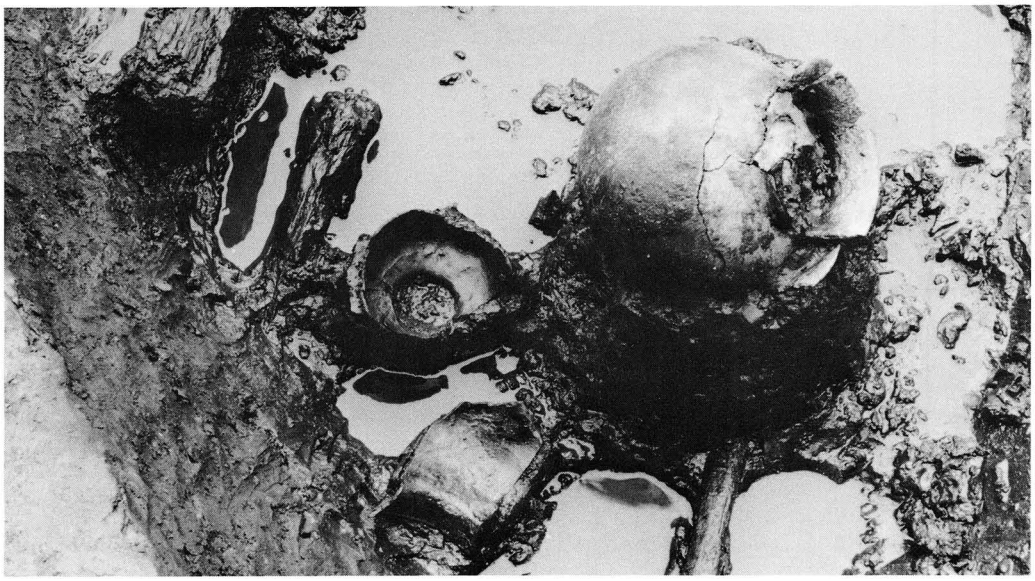
調査の結果、現地表下2.7ｍ付近に堆積する灰青色シルト層上面（ＴＰ＋8.7ｍ）で、弥生時代中期・古墳時代中期に比定される遺構を検出した。検出した遺構は、井戸１基・土坑５基・小穴13個である。このうち井戸以外はすべて弥生時代中期に比定される遺構で、井戸内部からは古墳時代中期の土師器壺・甕および木製品が出土している。

まとめ

今回の調査では、小面積にもかかわらず、弥生時代中期と古墳時代中期の遺構・遺物を検出したことから、当遺跡が複合遺跡であることが判明した。とくに弥生時代中期と古墳時代中期の遺構を同一面で検出した事実は、当地が古墳時代中期までは比較的安定した地域であったことが推定される。その反面、上層には河川流出土である砂層が調査地全面に広がっていることから、古墳時代中期以降の当地は遺跡の立地条件を満たすことのできない土地であったようである。なお、包含層中には弥生時代前期に比定される土器類が比較的良好な形で出土しており、付近にこの時期の集落の存在が想定できる。

検出遺構平面図

調査区全景（東から）



遺物出土状況

10　萱振遺跡（第１次調査）

調 査 地：幸町１丁目76

調査期間：昭和59年11月13日～12月24日

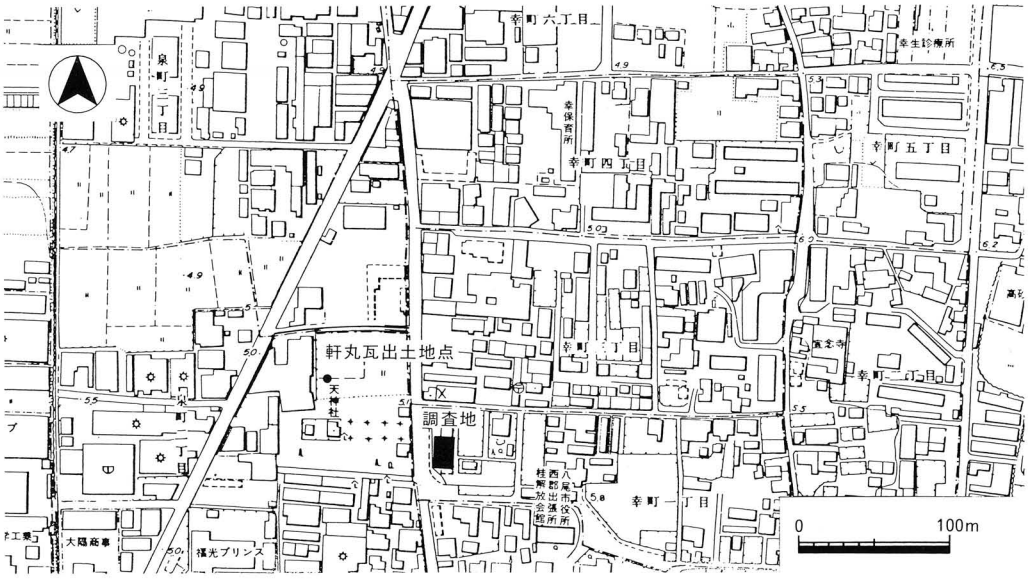
調査面積：266㎡

はじめに

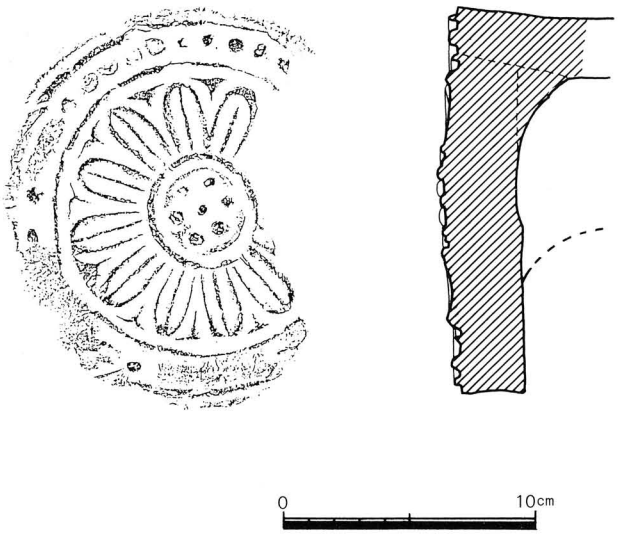
今回の発掘調査は、店舗付改良住宅建設に先立って実施したもので、当調査研究会が萱振遺跡内で始めて実施した調査である。

萱振遺跡は、昭和57年度に実施された大阪府教育委員会による府立八尾北高等学校建設に先立つ試掘調査によって発見された弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡で、長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。同一の沖積地には、南東から東弓削遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・萱振遺跡が連なって位置し、さらに当遺跡より北には山賀遺跡（東大阪市）・瓜生堂遺跡（同）・西岩田遺跡（同）が存在している。

今回の調査地は、萱振遺跡の北辺に位置し、しかも西郡廃寺推定地の東に隣接している。この西郡廃寺は、付近一帯を居住地としていた高麗系の氏族である錦織連の氏寺であったと考えられている。創建の時期は判然としないが、泉町２丁目に鎮座する天神社境内に塔心礎が遺存していることや、天神社北側の水田から出土した12葉蓮華文軒丸瓦（66頁図）等から推定すれ[註]



調査地周辺図



蓮華文軒丸瓦実測図

ば、奈良時代にはすでに法燈を燈していたものと考えられる。一方、大阪府教育委員会による発掘調査で検出された鎌倉時代（13世紀後半）の瓦積井戸に使用されている瓦の中に、左図と同形の瓦が認められる。

調査概要

調査に際しては、八尾市教育委員会文化財室の試掘結果に従い、現地表下0.5ｍまでは機概掘削、以下は人力掘削によって、３面にわたる調査を実施した。

＜第１調査面＞

現地表下1.1ｍ付近（ＴＰ＋4.70ｍ）を調査対象面とした。ただし、旧地形に起因するものか土層の堆積状況は複雑で、調査対象面は、南部では黄灰色シルト混粘質土層上面、北部では灰褐色砂質土層上面に大別される。調査の結果、鎌倉時代前期から中期の井戸５基（ＳＥ－５～ＳＥ－９）・土坑２基（ＳＫ－９・ＳＫ－10）・溝８条（ＳＤ－５・ＳＤ－12）・柱穴56個を検出した。

井戸

調査区の中央から北部一帯に集中して構築されている。内訳は、土釜井戸１基（ＳＥ－９）・曲物井戸２基（ＳＥ－６・ＳＥ－８）・下部曲物上部土釜井戸１基（ＳＥ－５）・その他１基（ＳＥ－７）である。内部からは、土師器小皿・瓦器椀・瓦器小皿・瓦等が出土している。なお、ＳＥ－６の最下の曲物には墨書が認められた。また、ＳＥ－７の井戸側は検出されなかったが、内部の堆積状況から、何らかの施設が存在した可能性が考えられる。

土坑

調査区北部で２基を検出した。ＳＫ－９は北東部をＳＥ－８に切られており、ＳＥ－８の付随施設の可能性が考えられる。

溝

調査区南部で８条の溝を検出した。ＳＤ－５～ＳＤ－７は東西方向に伸び、ＳＤ－８～ＳＤ－11は南北方向に伸び、ＳＤ－12はＬ字形を呈して伸びる。ＳＤ－８はＳＤ－５・ＳＤ－12を切っており、ＳＤ－６・ＳＤ－７がＳＤ－８に合流している。溝内の堆積土は、淡灰茶色砂質土層である。

柱穴

調査区全域で56個の柱穴を検出した。とくに調査区南部の溝で囲まれた区域に集中する柱穴群から建物を復元することが可能で、溝と建物の有機的な関係を示している。

＜第２調査面＞

現地表下1.4ｍ付近に堆積する灰黄色シルト上面（ＴＰ＋4.40ｍ）を調査対象面とした。調査の結果、古墳時代中期から鎌倉時代前期に至る井戸３基（ＳＥ－２～ＳＥ－４）・土坑２基（ＳＫ－７・ＳＫ－８）・溝３条（ＳＤ－２～ＳＤ－４）を検出した。

井戸

第１調査面と同様、調査区中央より北側で検出した。３基とも平安時代末期から鎌倉時代に比定される素掘井戸で、最下部は河川流出土に達している。内部からは、土師器小皿・瓦器椀・瓦器小皿・曲物容器等が出土している。

土坑

調査区中央付近で２基の土坑を検出した。ＳＫ－７は東西2.9ｍ・南北7.4ｍの長方形を呈するもので、内部からは奈良時代の土器類が多量に出土している。ＳＫ－８は第１調査面で検出したＳＥ－５によって南部を切られており、内部から鎌倉時代に比定される土器の細片がわずかに出土している。

溝

調査区西部を南北に伸びる２条の溝（ＳＤ－２・ＳＤ－４）と、調査区南部を東西に伸びる溝（ＳＤ－３）がある。前者の内部からは土師器皿・瓦器椀・瓦等が出土し、後者からは古墳時代中期の土師器・須恵器が出土している。

＜第３調査面＞

現地表下1.7ｍ（ＴＰ＋4.10ｍ）付近を調査対象面とした。調査の結果、弥生時代後期の井戸１基（ＳＥ－１）・土坑６基（ＳＫ－１～ＳＫ－６）・溝１条（ＳＤ－１）の他、調査区中央を南西から北東に伸びる自然河道の痕跡を検出した。なお、ＳＫ－２以外は、すべて自然河道の上面に堆積する灰色粗砂層を構築面としている。

井戸

ＳＥ－１は、縦板を組んで井戸側とするもので、北側の一部は第１調査面のＳＥ－９に切られている。内部からは、弥生時代後期に比定される土器類が出土している。

土坑

ＳＫ－１・ＳＫ－３～ＳＫ－６は、調査区の中央から南側に位置しており、内部から弥生時代後期の土器類が出土している。ＳＫ－２は調査区北部に位置し、深さも0.08ｍと浅く、他の遺構とは性格を異にしている。

溝

調査区南東部で、ＳＤ－１を検出した。この溝は、本来は環状に廻るものと考えられる。

自然河道

上面幅6.0～8.0ｍ・深さ1.3ｍ以上を測り、内部は粗砂で充塡されている。上層に弥生時代後期の遺構が構築されていることから、この時期には完全に埋没したものと推定される。

まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代後期・古墳時代中期末～後期・奈良時代・平安時代末期～鎌倉時代末期の４時期にわたる遺構が確認され、当調査地一帯が複合遺跡であることが明らかとなった。ここでは、今回の調査で検出した遺構の内容を整理して、各時期ごとに列記する。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構には、井戸側を伴う井戸・土坑・溝がある。これらの遺構は、埋没した自然河道上面に堆積している灰色粗砂層を構築面としている。また、上層の堆積状況が示すように、弥生時代後期以降は比較的安定した土地であったことが判明した。これらの事実から、この時代には、洪水によって完全に埋没した自然河道周辺に集落が営まれており、安定した土地と豊富な湧水が、居住地としての条件を満たしていたものと推定される。

古墳時代中期末～後期

この時代の遺構としては溝１条を検出しただけであったが、包含層中にはこの時期に比定される土器類が多量に含まれていることから、付近に同時期の集落の存在が考えられる。

奈良時代

この時代も、遺構としては土坑１基を検出したにすぎないが、包含層から多量の瓦が出土しており、これらの資料が西郡廃寺と何らかの関連を持つものと考えられる。

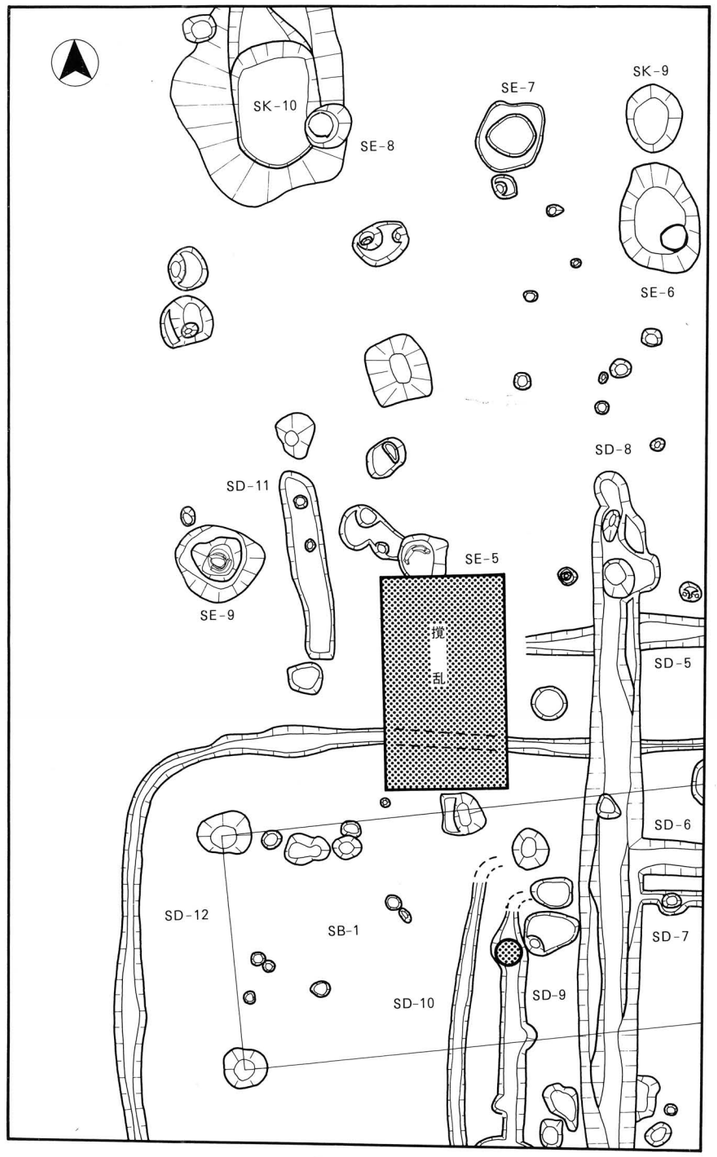
平安時代末期～鎌倉時代末期

第１調査面・第２調査面を主として、井戸・土坑・溝の他に、多数の柱穴を検出した。第１調査面と第２調査面は比高差が約30㎝あるにもかかわらず遺構の構築は、調査区北部で井戸、南部では溝および建物を構成する柱穴群に限定されている。このことから、当地では約150年間存続して同様の土地利用をしていたことが窺える。

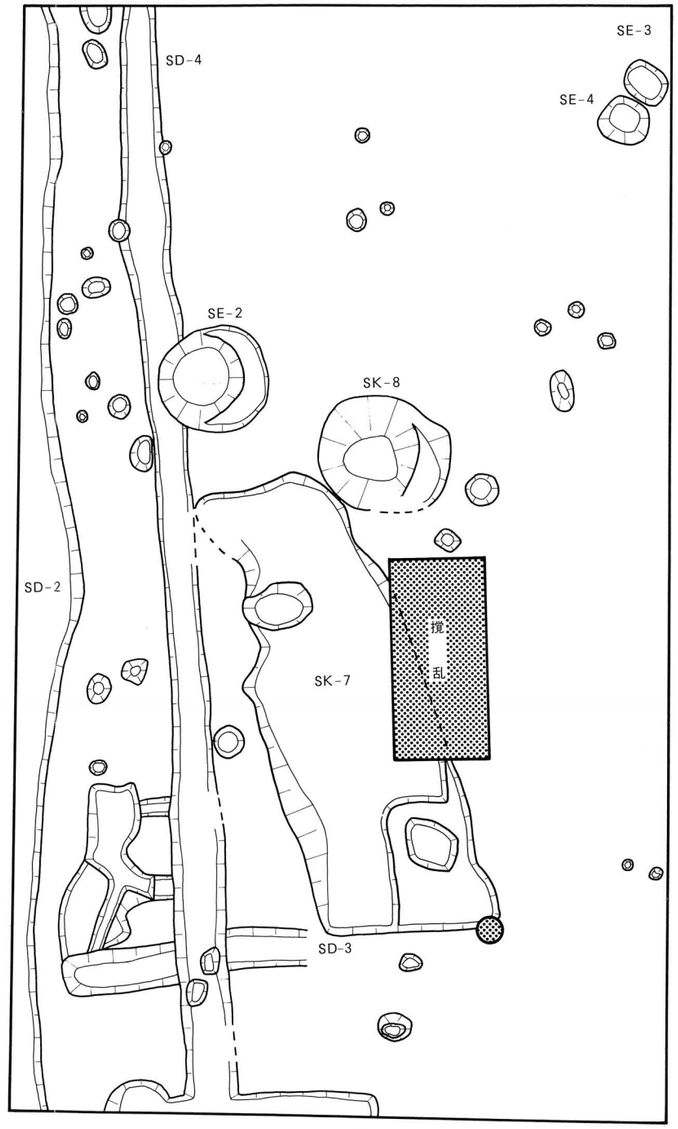
また、14世紀の前半以降の遺構が検出されなかったことから、南北朝・戦国時代における若江城・萱振城の存在と、当地との有機的な関係が推察できる。

註

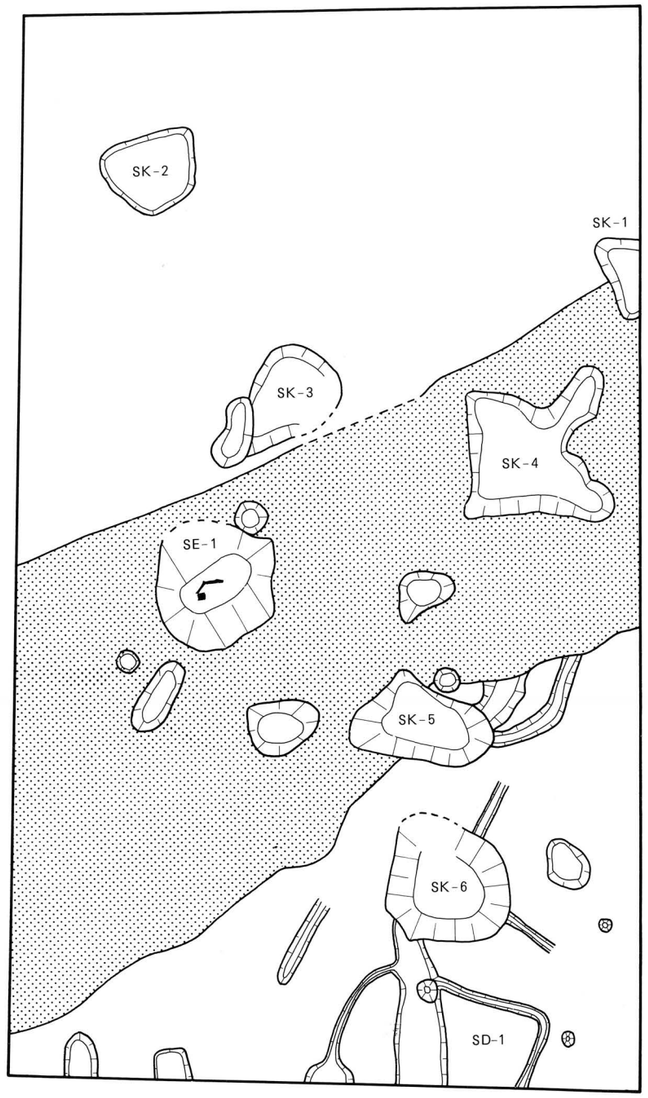
泉町２丁目（調査地北西・天神社北側）で井戸掘削中に出土した瓦で、桂町在住の村上末治氏より寄贈していただいた。



第 1 調査面（鎌倉時代前期～中期）



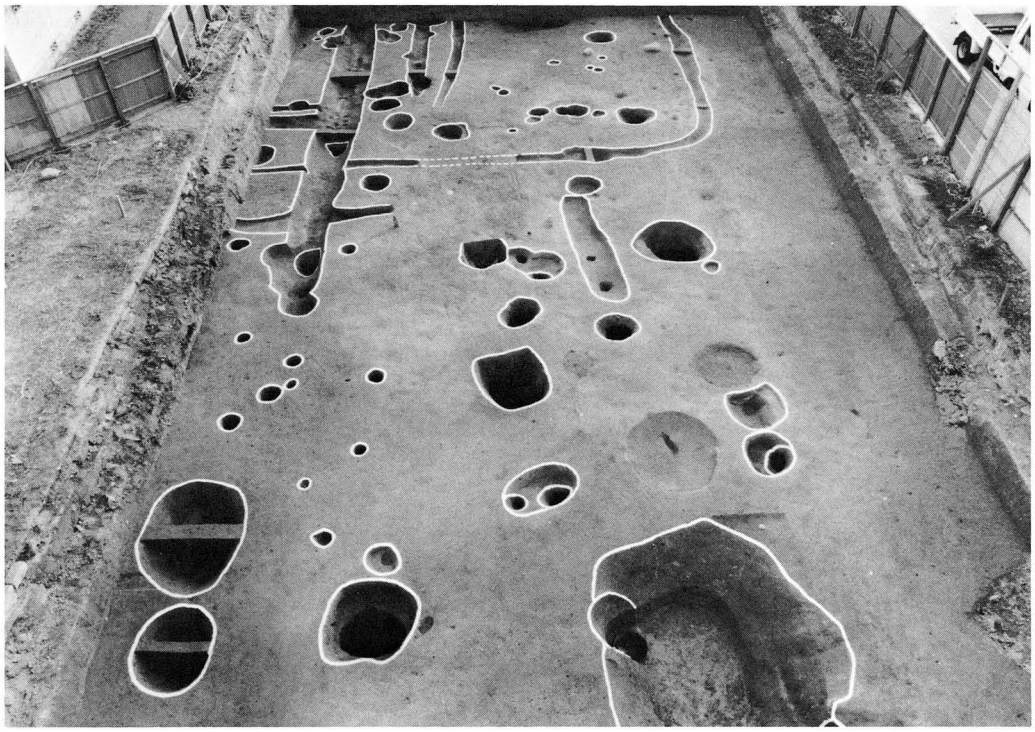
第 2 調査面（古墳時代中期～鎌倉時代前期）



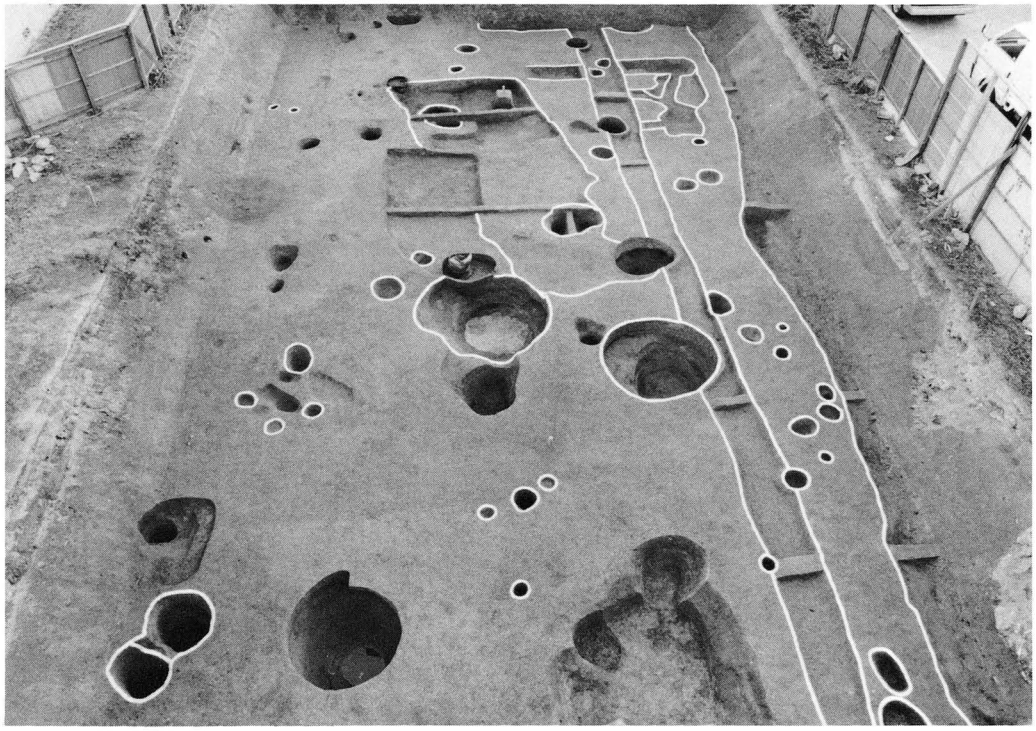
第 3 調査面（弥生時代後期）

0　5 m

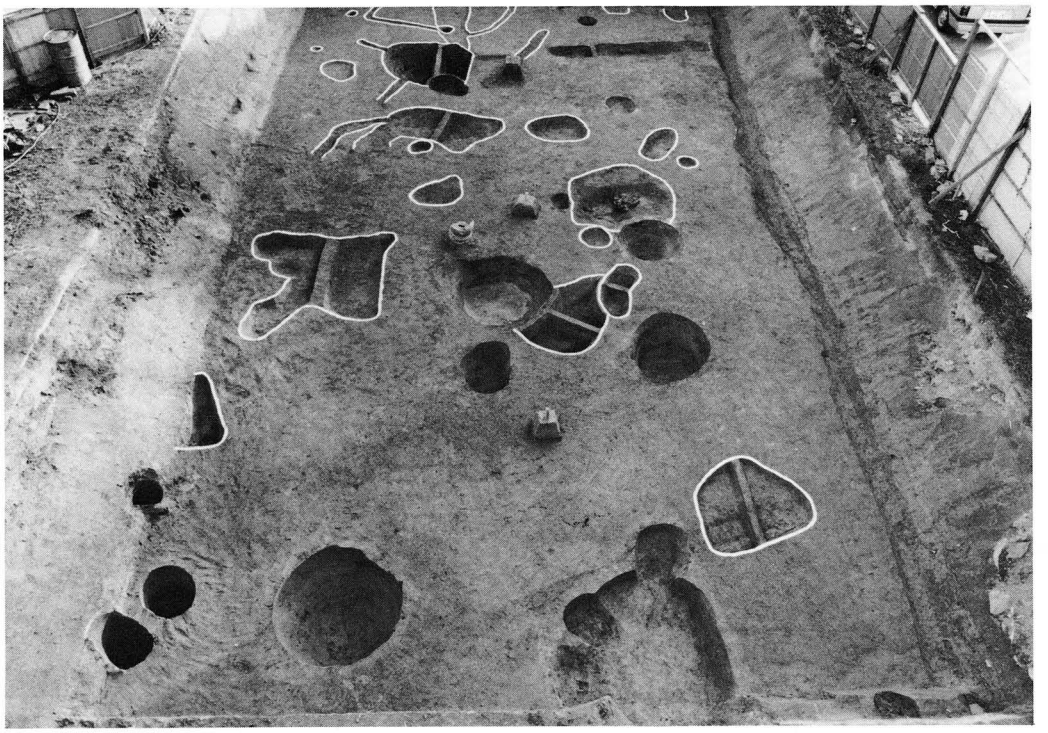
検出遺構平面図



第 1 調査面全景（北から）



第 2 調査面全景（北から）



第３調査面全景（北から）

第１調査面ＳＥ－６断面

11　老原遺跡（第１次調査）

調 査 地：東老原２丁目46

調査期間：昭和60年２月12日～３月８日

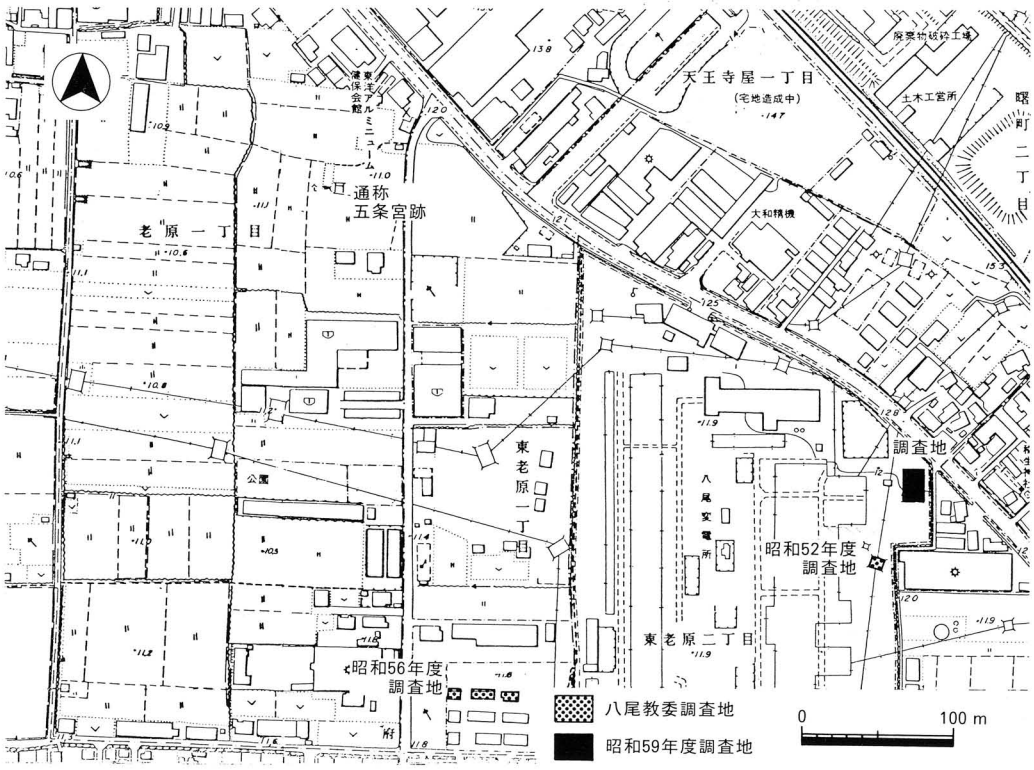
調査面積：333㎡

はじめに

今回の調査は、関西電力㈱の八尾変電所内に予定された建築物の構築に先立って実施したもので、当調査研究会が老原遺跡内で始めて実施した調査である。

老原遺跡は八尾市の南部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地に立地している。周辺には、西に植松遺跡・太子堂遺跡・木の本遺跡、南に田井中遺跡・弓削遺跡があり、さらに長瀬川を挟んだ東から北には、東弓削遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・小阪合遺跡等が位置している。

当地区はこれまで、奈良時代後期の屋瓦（細弁蓮華文軒丸瓦）等が出土したと伝えられる老原１丁目の通称「五条宮跡」付近を中心として、寺院遺構が存在しているものと推定されてい



調査地周辺図

た。ところが、昭和52年に老原２丁目で八尾市教育委員会が実施した送電鉄塔建設に伴う発掘調査では、遺構は検出されなかったものの、古墳時代から鎌倉時代に至る遺物が出土したことによって遺跡の存在が明らかにされた。さらに、昭和56年に東老原１丁目で八尾市教育委員会文化財室が実施した社宅建設に伴う発掘調査では、古墳時代後期と鎌倉時代前期の集落遺構が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが判明した。なお、今回の調査地は、昭和52年度教育委員会調査地の北80ｍ地点に位置する。

調査概要

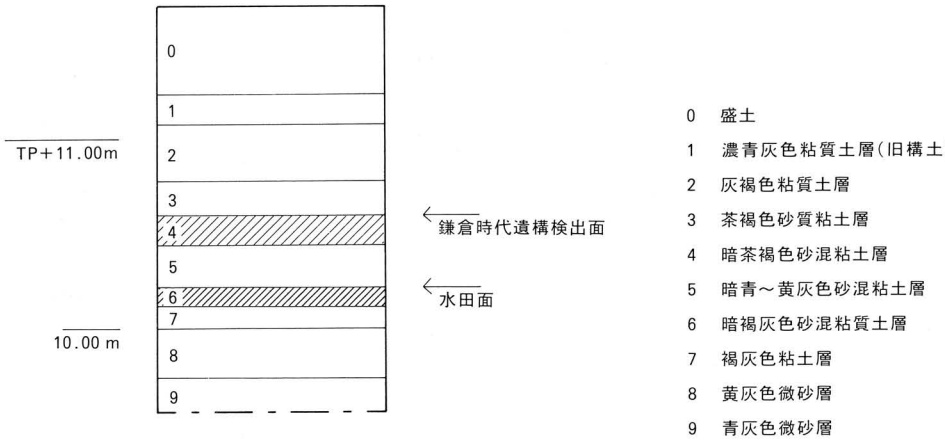
当初、八尾市教育委員会文化財室の試掘結果に従って現地表から約1.0ｍまで機械掘削を実施したところ、調査区中央部で送電鉄塔の基礎部分のコンクリート塊が確認され、調査区の約半分が撹乱を受けていることが判明した。そのため、撹乱部分を除いて人力によって慎重に掘削を進めていった。

現地表下1.1～1.3ｍ付近に堆積する第４層暗茶褐色砂混粘土層上面（ＴＰ＋10.60ｍ付近）で、鎌倉時代に比定される小溝を10条検出した。

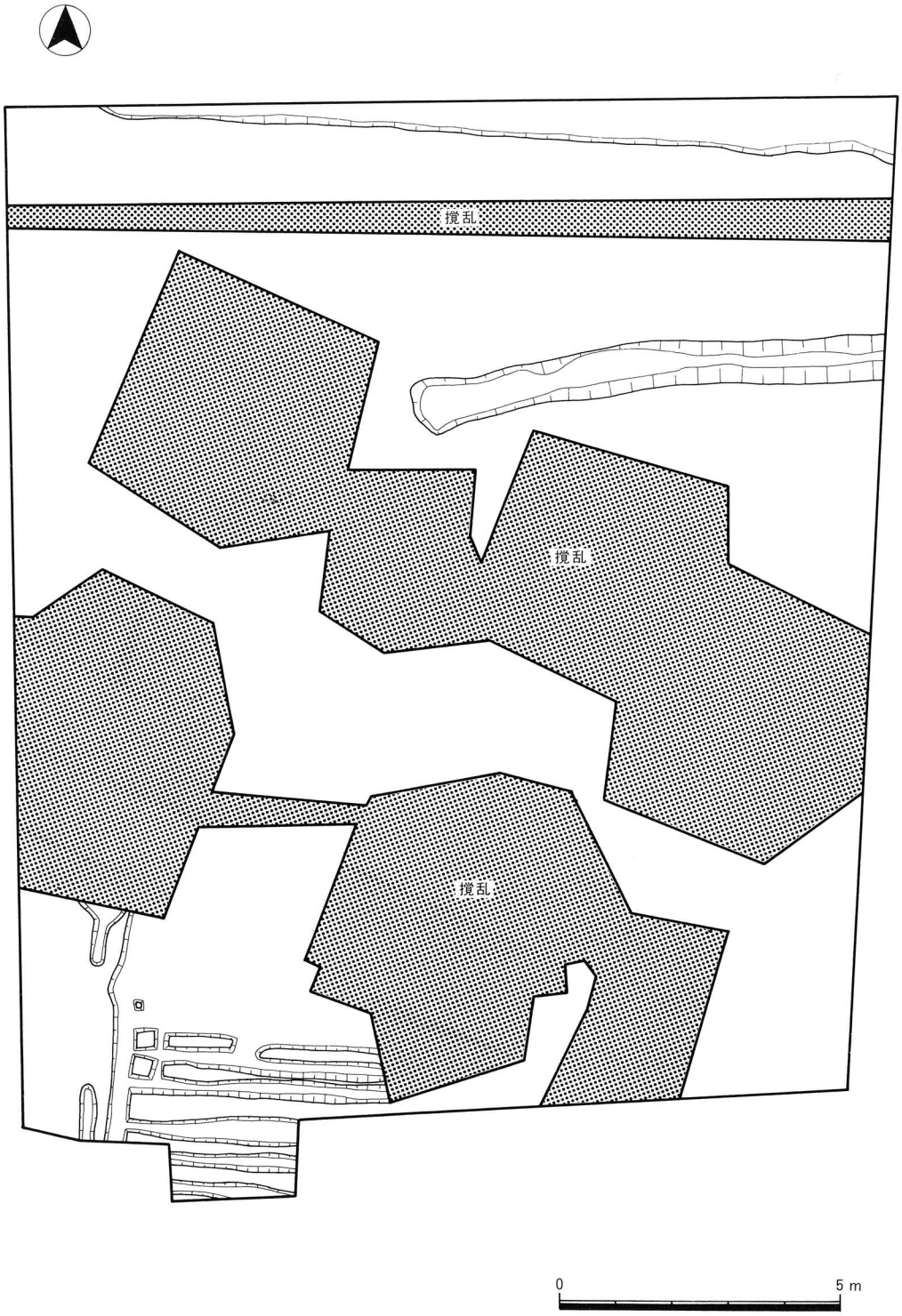
さらに、そこより0.3ｍ下に堆積する第６層暗褐灰色砂混粘質土層上面（ＴＰ＋10.20ｍ付近）で、足跡および鋤跡が遺存する水田面を検出した。

それ以下については、堆積状況を確認する目的で、２×２ｍのグリッドを２箇所に設定し、調査を継続した。その結果、第８層黄灰色微砂層（層厚約0.4ｍ）・第９層青灰色微砂層（層厚0.3ｍ以上）の堆積が認められた。これらの土層は、旧大和川に関連するものと考えられる。

なお、第２層以下の各層から、古墳時代後期から鎌倉時代に比定される土師器・須恵器・瓦器等が、コンテナに２箱程度出土している。



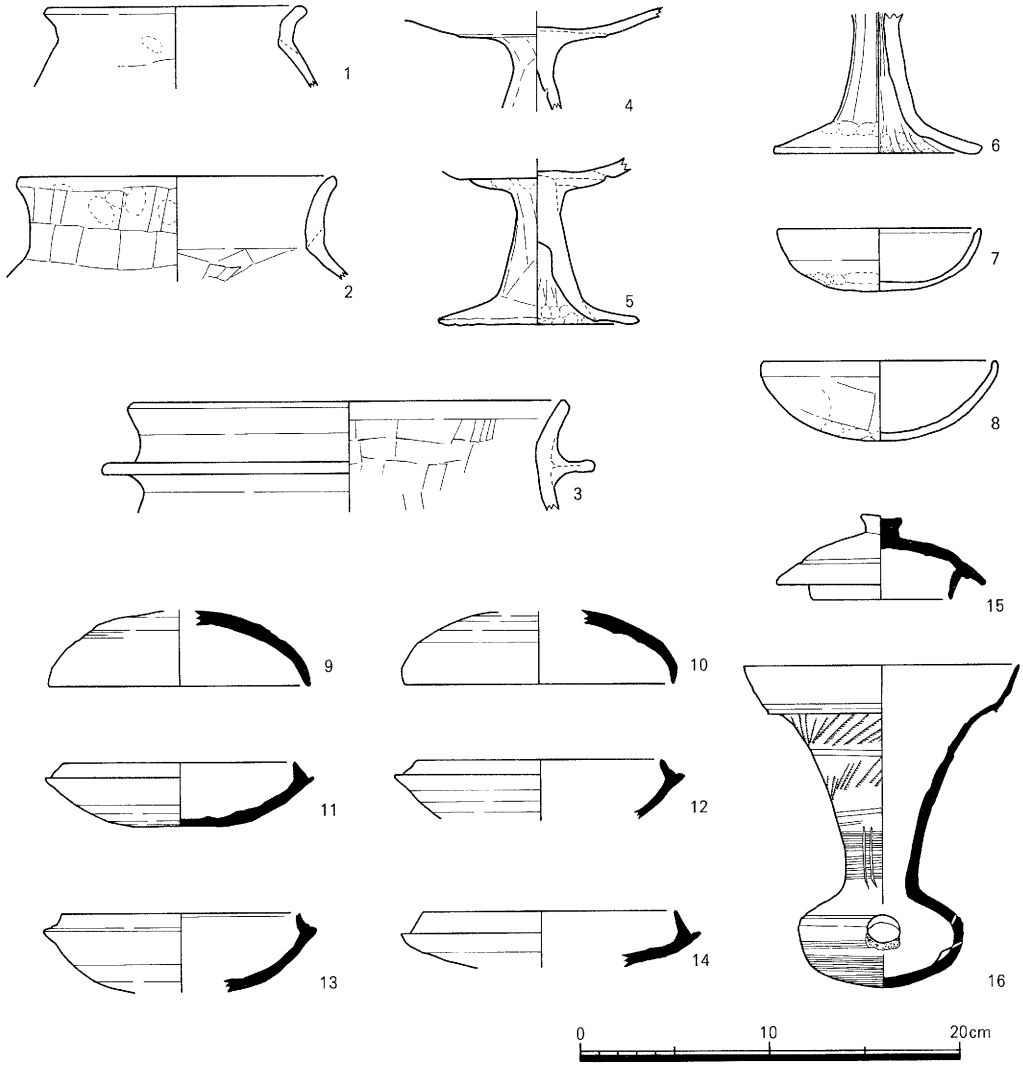
層序模式図



検出遺構平面図

まとめ

調査の結果、第４層上面で鎌倉時代の農耕に関する溝、第６層上面で水田跡を検出した。第６層上面で検出した水田遺構からは、時期を明確にし得る資料は得ていないが、耕作土には古墳時代後期の遺物を含むことから、少くとも古墳時代後期以降には構築されていたものと考えられる。今回の調査では、農耕に関する２時期の遺構を検出したにすぎないが、遺物については遺構には伴わないものの、第６層以下からは古墳時代後期の土器（２・８～16）が比較的まとまって出土している。この時期の集落遺構は、昭和56年度の発掘調査で検出しており、当調査地の近隣にも同時期の集落が存在するものと考えられる。

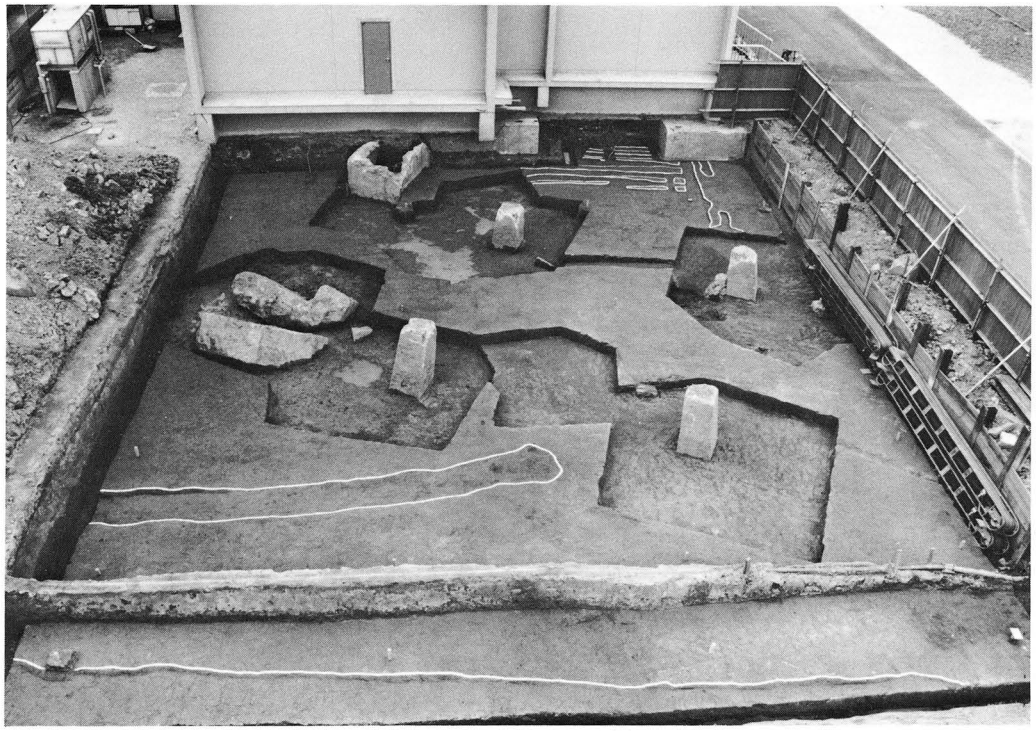


出土遺物実測図

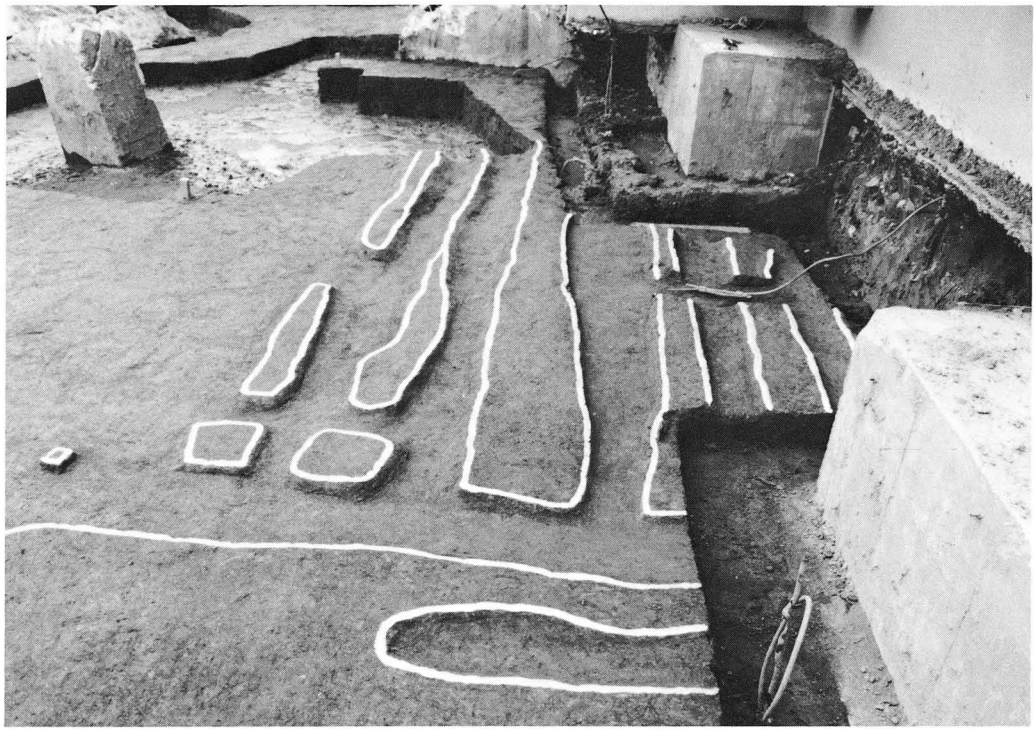
出土遺物観察表

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 甕 第5層		13.4 —	張りの少い体部から、内面に鈍い段を持って直立した後、外傾する口縁部に至る。端部は丸く終る。 内外面ともナデ。	淡橙色	白色細砂粒を含む	良好	
2	土師器 甕 第6層		16.7 —	内傾する体部から、器肉を増して直立した後、外傾する短い口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面口縁下部指頭圧成形後、板状工具によるナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	茶褐色～淡茶褐色	径0.5㎜の白色細砂粒、雲母、石英を含む	良好	内面は磨耗ぎみ
3	土師器 羽釜 第4層		23.0 鍔径 26.2	やや内傾する体部から、外傾する口縁部に至る。鍔は水平に伸びる。 外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ。	暗赤褐色	白色砂粒、赤色粒、雲母を多量に含む	良好	
4	土師器 高杯 第7層～第8層		— —	円錐形の柱状部は上端が水平な円板形となる。杯部は水平な底部から外上方に伸び外反し、柱状部上端と接合する。接合部は上部に段を持ち、下部には粘土を補足する。 外面柱状部板状工具によるナデで面取り、杯部ナデ。内部柱状部しぼり目、杯部ナデ。	淡橙色	精良 白色細砂粒、赤色粒を少量含む	良好	
5	土師器 高杯 第7層～第8層		— — 裾径 9.9	円錐形で上半が中実の柱状部から、強く外反して裾部に至る。杯部は水平な底部に段を持って体部に続き、柱状部上端に接合する。接合部には粘土を補足する。 調整4に似る。内面裾部には指頭圧痕も認められる。	橙褐色	石英、長石、雲母等含む	良好	裾部に黒斑
6	土師器 高杯 第7層～第8層		— — 裾径 10.6	円錐形で筒状の柱状部から、強く外反して裾部に至る。 外面柱状部板状工具によるナデで面取り、裾部ナデ、接合部に指頭圧痕を残す。内面柱状部上部しぼり目・下部ナデ、裾部に指腹・指頭による押さえ。	橙色	白色細砂粒、雲母を含む	良好	
7	土師器 杯 第2層		10.7 3.4	平坦な底部から、丸みをおびて立ち上る口縁部に至る。端部は内面に沈線状の窪みが廻る。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ、体部に指頭圧痕を残す。内面右廻りのヨコナデ。	橙色 外底面のみ乳橙色	白色砂粒を含む	良好	
8	土師器 杯 第6層		12.3 4.2	底部から丸みを持つ体部に続き、直立する口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面底体部指押さえ後ヘラケズリの後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	外面橙色～淡橙色 内面橙色	白色砂粒、赤色粒子、雲母	良好	

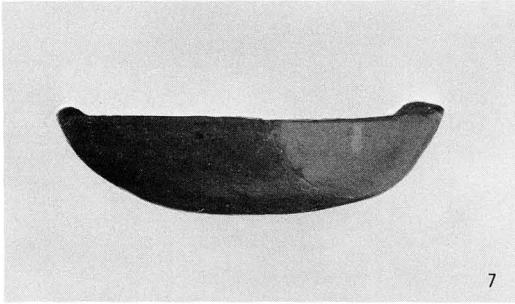
遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
9	須恵器 杯蓋 第6層	13.8 4.0	天井部は丸く、口縁部は斜下方に下る。端部は丸く終る。 外面天井部回転ケズリ、口縁部回転ナデ。内面回転ナデ。	白灰青色	緻密 白色砂粒を含む	良好 堅緻	
10	須恵器 杯蓋 第6層	14.2 4.0	天井部はやや低く、口縁部は垂直に下る。端部は尖りぎみに丸く終る。 外面天井部から⅔を回転ケズリ、他は回転ナデ。内面回転ナデ。	灰色	緻密 白色・黒色砂粒を多量に含む	良好 堅緻	
11	須恵器 杯身 第8層	12.3 3.4 受部径14.4	扁平な底体部から、外上方へ伸びる体部に至る。立ち上りは角度を変えてわずかに内傾し、端部は器肉を減じて丸く終る。 外面底部から⅔を回転ケズリ、他は回転ナデ。内面回転ナデ。	淡青灰色	緻密 砂粒を含む	良好 堅緻	
12	須恵器 杯身 第7層～ 第8層	— — 受部径15.6	体部から、やや内傾する立ち上りに至り、端部は丸く終る。受部は丸みを持って短く水平に伸びる。 外面体部大半を回転ケズリ、受部から立ち上りを回転ナデ。内面回転ナデ。	淡青灰色	緻密 白色細砂粒を含む	良好 堅緻	
13	須恵器 杯身 第7層～ 第8層	12.7 — 受部径14.6	丸みのある体部から、内に稜を持って垂直近くに伸びる立ち上りに至り、端部は丸く終る。受部は短く、水平近くに伸びる。 外面底部から⅔まで回転ケズリ、他は回転ナデ。内面回転ナデ。	淡灰緑色	緻密 白色砂粒を含む	良好 堅緻	
14	須恵器 杯身 第7層～ 第8層	14.2 — 受部径16.8	扁平な体部から、内傾する立ち上りに至り、端部は丸く終る。受部は短く水平に伸びる。 外面体部大半を回転ケズリ、受部から立ち上りを回転ナデ。内面回転ナデ。	淡灰色	緻密 白色砂粒を含む	良好 堅緻	
15	須恵器 蓋(壷用) 第6層 上面	10.9 4.5 つまみ径 2.1 かえり径 7.4	丸みのある天井部から、斜外方に伸びる口縁部に至る。天井部と口縁部の境には浅い凹線が廻る。かえりは下内方へ伸び、丸く終る。つまみは上面が窪む。 内外面とも回転ナデ。	淡灰青色	緻密 白色砂粒、黒色粒子を含む	良好 堅緻	外面天井部から内面の一部に深緑色の自然釉付着
16	須恵器 瓶 第7層 上面	14.8 17.2 最大径 8.7	小型の体部に、細い基部からラッパ状に開く頸部が続く。口縁部は外面に稜を持ち、角度を変えて上外方に伸びる。頸部に列点文と凹線文を交互に2帯・ヘラ描き沈線を施す。体部中位に径1.5cmの孔を持つ。 外面底部から頸部カキ目、その他回転ナデ。	灰色	緻密	良好 堅緻	

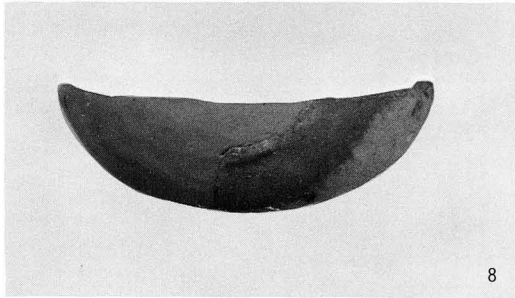


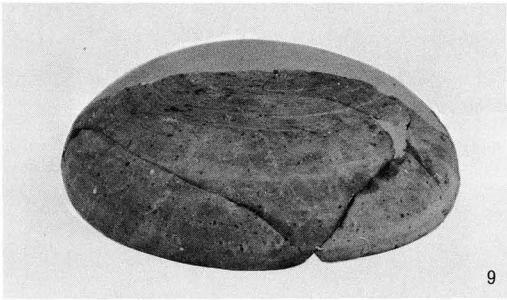
調査区全景（北から）

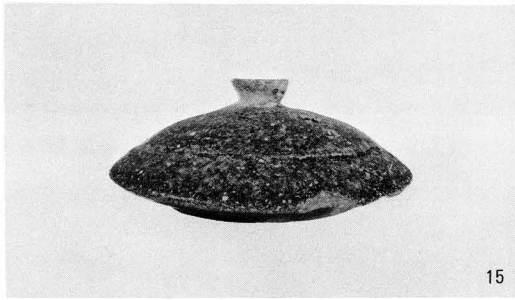


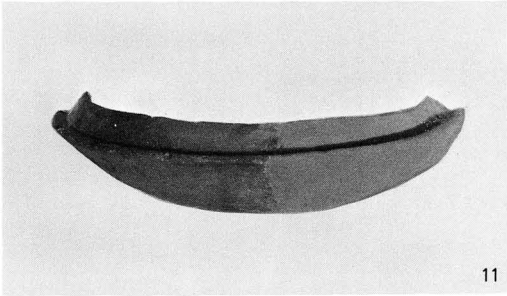
小溝検出状況（西から）

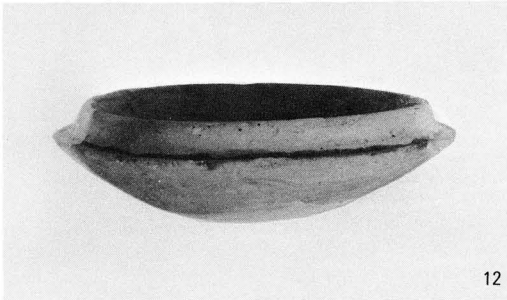












出土遺物

III　その他の事業

1　市内文化財の調査

久宝寺寺内町の調査　近畿大学助教授櫻井敏雄氏に委託

2　環山楼の公開　八尾市教育委員会からの委託業務

(1)　週２回の公開　毎週月曜日・木曜日午前10時～午後４時　見学者761人

(2)　催物のための公開　「八尾まつり」昭和59年９月15日・16日　見学者387人

(3)　要請に応じての公開

①　八尾市郷土文化推進協議会　昭和59年度第１回委員会総会　昭和59年５月８日

②　河内木綿同好会　昭和59年５月23日・７月３日

③　中央公民館主催　第31回八尾市民文化祭茶道展　昭和59年11月８日～12日

④　八尾市立八尾小学校６年生対象　文化財に対する啓蒙授業　昭和60年２月27日～３月１日・３月６日

⑤　八尾市立用和小学校３年生対象　環山楼見学　昭和60年３月11日

3　文化財普及事業

(1)　文化財講座

①　「奈良人形の興隆と伴林光平」　講師　浅井允昌氏（堺女子短期大学教授）

昭和59年５月19日　教育センター集会室

②　「叡尊の足跡」　講師　棚橋利光氏（大阪府立八尾高等学校教諭）

昭和59年12月15日　教育センター集会室

③　「大阪城と八尾」講師　村川行弘氏（大阪経済法科大学教授）

昭和60年３月30日　山本労働会館

(2)　チビッコ文化財夏期学級　昭和59年８月10日～13日　参加者32人

日程および内容

８月10日　開講式・土器のはなし

８月11日　土器づくり

８月12日　小阪合遺跡発掘調査現場見学

８月13日　土器を焼く・閉講式

(3)　展示

①　「八尾を掘る」―昭和58年度の発掘調査の成果―

昭和59年９月15日～29日　市民サービスコーナー　入場者1511人

主な展示内容

◦昭和58年度に実施した発掘調査のうち、主な遺跡の紹介

◦出土遺物に見られる食器類の変化

② 曙川コミュニティーセンター常設展示

コミュニティーセンター建設に先立って実施した発掘調査で出土した土器の展示

(4) 発掘調査現場の見学会

八尾南遺跡の現地説明会・鏡片一般公開　昭和59年５月20日　見学者70人

4　図書の刊行

(1) 『昭和58年度事業概要報告』：（財）八尾市文化財調査研究会報告５　昭和59年４月発行　昭和58年度に実施したすべての事業についてまとめている

(2) 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和59年度』：（財）八尾市文化財調査研究会報告６　昭和60年３月発行　昭和58年度実施の東郷遺跡第17次調査・昭和59年度実施の八尾南遺跡第３次調査の概要報告を集録

5　研究会・研修会・展示等の参加・協賛

(1) 奈良国立文化財研究会主催「昭和59年度埋蔵文化財発掘調査専門研修　中近世遺跡調査課程」に参加　昭和59年６月12日～23日　同埋蔵文化財センター研修棟

(2) （財）大阪文化財センター主催「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会　第10回」で発表「八尾南遺跡の調査」　昭和59年７月１日　大阪市立中央青年センター

(3) （財）大阪文化財センター主催「第２回近畿地方埋蔵文化財担当者会議」の協賛　昭和59年９月29日・30日　大阪市中央公会堂

(4) 読売新聞大阪本社・読売テレビ放送主催「古代河内展」の後援　八尾南遺跡出土の鏡片を出品　昭和59年９月30日～10月24日　八尾西武ホール

(5) （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府教育委員会主催「第27回研修会・第３回講演会」に参加　昭和60年２月23日　向日市文化資料館

「八尾を掘る」展

八尾南遺跡現地説明会・鏡片一般公開

Ⅳ　受贈図書一覧

団　体　名	書　名
(財)東大阪市文化財協会	◦若江遺跡発掘調査報告Ⅰ　遺物編 ◦鬼虎川遺跡　東大阪高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第15次発掘調査概要（その２の２） ◦鬼虎川遺跡第７次発掘調査報告３　遺構編
(財)大阪文化財センター	◦大阪文化誌第17号 ◦巨摩・若江北（その２）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告
(財)枚方市文化財研究調査会	◦枚方市文化財年報Ⅳ
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	◦狐谷横穴群ほか２遺跡　京都府遺跡調査概報第５冊 ◦近畿自動車道舞鶴線関係遺跡ほか６遺跡　同上第６冊 ◦国道９号線バイパス関係遺跡ほか４遺跡　同上第７冊 ◦京都府埋蔵文化財情報第８号 ◦同上第９号 ◦同上第10号 ◦同上第11号 ◦同上第12号 ◦焼きもののふる里　篠窯跡群　発掘調査の記録から ◦梵鐘鋳造遺構とその諸問題　第８回研修会資料
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	◦長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和58年度 ◦長岡京市埋蔵文化財調査報告書第１集 ◦長岡京跡　長岡京遷都200年記念　（乙訓文化財事務連絡協議会編）
(財)兵庫県文化協会	◦半坂峠古墳群・辻遺跡・兵庫県文化財調査報告書第18冊　（兵庫県教育委員会編） ◦昭和58年度指定兵庫県文化財調査報告書　（同上編）
(財)愛知県教育サービスセンター	◦環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ　昭和58年度 ◦勝川　名古屋環状２号線建設に伴なう発掘調査報告　愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告第１集
神奈川県立埋蔵文化財センター	◦小田原城跡八幡山遺構群　県立小田原高等学校体育館建設に伴なう発掘調査　神奈川県立埋蔵文化財調査報告５ ◦小池遺跡　同上６ ◦神奈川県立埋蔵文化財センター年報３
柏原市歴史資料館	◦柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1983年度　柏原市文化財概報1983―Ⅱ　（柏原市教育委員会編） ◦大県・大県南遺跡・下水道管渠埋設工事に伴う　同上1983―Ⅲ　（同上編）
吹田市教育委員会	◦七尾瓦窯跡・垂水南遺跡　昭和58年度文化財緊急発掘調査概報
美原町教育委員会	◦美原の歴史第４号　特集・地図と空中写真でみる美原町　美原町史紀要
尼崎市教育委員会	◦尼崎市猪名寺廃寺跡　尼崎市文化財調査報告第16集

団　体　名	書　名
綾部市教育委員会	◦聖塚・菖蒲塚試掘調査概報　綾部市文化財調査報告第11集
大和郡山市教育委員会	◦平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書　（奈良国立文化財研究所編） ◦大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書 ◦額田部狐塚古墳周濠部発掘調査報告書　大和郡山市文化財調査概要１ ◦郡山城第17次追手門東隅櫓・東多聞櫓発掘調査報告書　同上２
八日市市教育委員会	◦上日吉南遺跡・瓦屋寺カマエ遺跡発掘調査報告書　八日市市文化財調査報告(1) ◦内掘遺跡　後藤館遺跡発掘調査報告書　同上(2) ◦八日市市内遺跡分布調査報告書　同上(3) ◦五反田遺跡ほか３遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書　同上(4) ◦大森陳屋遺跡発掘調査報告書　同上(5)
金沢市教育委員会	◦金沢市新保町チカモリ遺跡　石器編　金沢市文化財紀要41 ◦金沢市畝田　寺中遺跡　同上42 ◦金沢市高尾公園遺跡　同上43 ◦金沢市額田ドウシンダ遺跡　金沢市無量寺Ｂ遺跡Ⅱ　同上44 ◦金沢市南新保三枚田遺跡　同上45 ◦金沢市大友・近岡遺跡　同上46 ◦金沢市埋蔵文化財調査年報　同上47

(財)八尾市文化財調査研究会報告 7

昭和59年度事業概要報告

発　行　昭和60年4月

編　集　(財) 八尾市文化財調査研究会
〒 581　八尾市清水町1丁目2番1号
0729－94－4700

印　刷　(株) 奈　良　明　新　社

表　紙　レザック66＜260kg＞
本　文　アート＜110kg＞
見返し　上　質＜110kg＞

181